福島県文化財調査報告書第464集

福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告20

空釜Ｂ遺跡

２００９年

福島県教育委員会
財団法人福島県文化振興事業団
福島県土木部

福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告20

空釜B遺跡

序　　文

文化財は，それぞれの地域の歴史に根ざした文化遺産であると同時に，我が国の歴史や文化を正しく理解し，将来の文化の向上・発展の基礎をなすために必要不可欠なものです。

そのため，私たち現代に生きる人間には，文化財を当時の姿がよくわかるように，なるべくそのままの形で保存し，後世に伝えていく努力をしていくことが求められます。

さて，「福島空港・あぶくま南道路」は，東北自動車道矢吹インターチェンジから福島空港を経て磐越自動車道小野インターチェンジを結ぶ自動車専用道路です。平成21年８月までに矢吹インターチェンジと石川・母畑インターチェンジ間，小野インターチェンジと蓬田パーキングエリア間の供用が開始され，現在は石川・母畑インターチェンジから蓬田パーキングエリア間の建設工事が進められています。

福島県教育委員会では，この計画路線上にある周知の埋蔵文化財包蔵地，いわゆる遺跡を含めた文化財を保存するため，関係機関と協議を重ねてきました。これらの埋蔵文化財のうち現状で保存が困難なものについては，詳細な記録を残すために発掘調査を継続して実施してまいりました。

本報告書は，平成20年度に発掘調査を実施した平田村所在の空釜Ｂ遺跡に関する調査結果をまとめたものです。空釜Ｂ遺跡は縄文時代早期～前期に営まれた集落の跡で，緩やかな斜面の部分を利用しながら作られた竪穴住居跡が６軒発見されています。また，遺物包含層からは当時の人々が使った土器や石器が発見されています。この他にも，今回の調査によってこの地域の人々の過去の営みについて興味深い事柄を明らかにすることができました。

今後，この報告書が，県民の皆様の文化財に対する理解を深めるとともに，地域の歴史を解明するための基礎資料として，さらには生涯学習等の資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に，発掘調査の実施に当たり，御協力いただいた平田村教育委員会，福島県土木部，財団法人福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し，深く感謝の意を表します。

平成21年11月

福島県教育委員会
教育長　遠　藤　俊　博

あ い さ つ

財団法人福島県文化振興事業団では，福島県教育委員会からの委託を受けて，県内の大規模な開発に先立ち，開発対象地域内にある埋蔵文化財の発掘調査を実施しております。

福島空港・あぶくま南道路に関連する埋蔵文化財の調査は，平成９年度から開始し，矢吹ＩＣから福島空港ＩＣ，平田ＩＣから小野ＩＣ間については平成14年度までに終了しております。また，平成17年度からは福島空港ＩＣから平田ＩＣ間にかかる埋蔵文化財の発掘調査を開始し，平成20年度までに玉川村・石川町・平田村に所在する遺跡について調査を実施いたしました。

本報告書は，平成20年度に実施した平田村空釜Ｂ遺跡の調査成果をまとめたものです。

空釜Ｂ遺跡は，縄文時代早期から前期の山間の集落跡です。竪穴住居跡や獣を獲る落し穴が見つかったほか，この時代の人が使った縄文土器や石器が出土しています。

今後，これらの調査成果を郷土の歴史研究の基礎資料として，さらには地域社会を理解する資料として，生涯学習の場などで幅広く活用していただければ幸いです。

終わりに，この調査に御協力いただきました平田村ならびに地域住民の皆様に，深く感謝申し上げますとともに，当事業団の事業の推進につきまして，今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成 21 年 11 月

財団法人　福島県文化振興事業団
理事長　富　田　孝　志

緒　　言

1　本書は，平成20年度に実施したあぶくま南道路関連遺跡の発掘調査報告書である。

2　本書には次に記す遺跡の調査成果を収録した。

空釜Ｂ遺跡　　福島県石川郡平田村大字下蓬田字空釜　　遺跡番号　503500149

3　本発掘調査事業は，福島県教育委員会が福島県土木部の委託を受けて実施し，調査・報告にかかる費用は福島県土木部が負担した。

4　福島県教育委員会では，発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団に委託して実施した。

5　財団法人福島県文化振興事業団では，遺跡調査部の以下の職員を配置して調査にあたった。

文化財主査　山元　出

さらに調査期間中は，臨時的に以下の職員を配置した。

文化財主査　青山博樹，嘱　　託　関根昌毅

6　自然化学分析は次の機関に依頼し，その結果を付章に掲載した。

放射性炭素年代測定　　株式会社　加速器分析研究所

7　本書に使用した地図は，国土交通省国土地理院発行の２万５千分の１地形図「上蓬田」，５万分の１地形図「小野新町」の該当範囲を複製したものである。

8　本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は，福島県教育委員会が保管している。

9　発掘調査および報告書作成にあたり，次の諸機関から御協力・御助言をいただいた。

平田村　　平田村教育委員会　　あぶくま高原自動車道建設事務所　　佐藤重俊

（敬称略・順不同）

用　　例

1　本書における地形図・遺構図の用例は，以下の通りである。

方位・座標　図中の方位は真北を示す。座標軸を示したものは図の上方を北とし，国土座標Ⅸ系に基づく座標値を記した。

毛　　羽　遺構内の傾斜部は「 ⊤⊤ 」，相対的に緩傾斜の部分には「 ⊤ 」，後世の撹乱および削平部には「 ⊤ 」を用いた。

網　　点　図中の網点は以下を示す。これら以外を示す場合は同挿図中に凡例を示した。

焼土面

土　　層　遺跡内堆積土層は，アルファベット大文字Ｌにローマ数字，遺構内堆積土はアルファベット小文字ℓに算用数字を付して表記した。土色およびその記号は『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄1967）に基づく。

水 糸 高　断面図の水糸高は，標高を示す。

縮　　尺　各挿図中にスケールとともに縮小率を示した。

2　本書における遺物図の用例は，以下の通りである。

網　　点　図中の網点は凡例を示した。

土器断面　繊維土器は無印とし，繊維を含まないものに＊を付した。観察可能な粘土積み上げ痕は１点鎖線で示した。

番　　号　遺物の番号は挿図ごとの通し番号とする。写真図版中の遺物番号は，本文中の「挿図番号」－「枝番号」を示す。

出土位置　遺物番号横の（　）に出土位置・層位を示した。

計 測 値　遺物の計測値については，推定値を（　），残存値を［　］で示した。

縮　　尺　各挿図中にスケールとともに縮小率を示した。

3　本書および調査・整理の上で使用した略号は以下の通りである。

平田村…ＨＴ　　空釜Ｂ遺跡…ＳＧ・Ｂ　　竪穴住居跡…ＳＩ　　土　　坑…ＳＫ

性格不明遺構…ＳＸ　　焼土遺構…ＳＧ　　遺物包含層…ＳＨ　　ピット…Ｐ

グリッド…Ｇ

4　参考・引用文献は執筆者の敬称を略し，本文末にまとめて収めた。

目　　次

第１章　遺跡の環境と調査経過

第１節　調査に至る経緯……1

福島空港・あぶくま南道路建設計画事業の概要（１）　平成20年度までの調査経過（２）

第２節　遺跡の位置と環境……4

第３節　歴史的環境……6

第４節　調査経過……9

第５節　調査方法……10

第２章　調査の成果

第１節　遺跡の概要と基本土層……11

遺跡の概要（11）　基本層序（11）

第２節　出土土器の分類……14

第３節　竪穴住居跡……15

１・４号竪穴住居跡（15）　２号竪穴住居跡（17）　３号竪穴住居跡（22）

５号竪穴住居跡（23）　６号竪穴住居跡（24）

第４節　性格不明遺構……27

１号性格不明遺構（27）

第５節　土　　坑……32

１号土坑（32）　２号土坑（32）　３号土坑（33）　４号土坑（33）　５号土坑（33）

第６節　遺物包含層……35

１号遺物包含層（35）　２号遺物包含層（44）

第７節　遺構外出土遺物……52

第３章　総　　括

第１節　遺構について……54

早期後葉の遺構（54）　前期初頭の遺構（55）

第２節　遺物について……56

縄文土器（56）　石　器（59）

第３節　ま　と　め……60

付　章　空釜Ｂ遺跡における放射性炭素年代……63

挿図・表目次

［挿図］

図１　福島空港・あぶくま南道路位置図…… 1
図２　平成20年度調査遺跡の位置…… 4
図３　調査区の位置…… 5
図４　周辺遺跡位置…… 7
図５　グリッド配置図…… 10
図６　調査区全体図…… 12
図７　基本土層…… 13
図８　１・４号竪穴住居跡…… 15
図９　１号竪穴住居跡出土遺物…… 16
図10　２号竪穴住居跡（１）…… 18
図11　２号竪穴住居跡（２）…… 19
図12　２号竪穴住居跡出土遺物（１）…… 20
図13　２号竪穴住居跡出土遺物（２）…… 21
図14　３号竪穴住居跡・出土遺物…… 23
図15　５号竪穴住居跡・出土遺物…… 25
図16　６号竪穴住居跡・出土遺物…… 26
図17　１号性格不明遺構（１）…… 27
図18　１号性格不明遺構（２）…… 28
図19　１号性格不明遺構出土遺物（１）…… 30
図20　１号性格不明遺構出土遺物（２）…… 31
図21　１～５号土坑・出土遺物…… 34
図22　１号遺物包含層出土土器（１）ⅠⅢ… 36
図23　１号遺物包含層出土土器（２）ⅠⅢ… 38
図24　１号遺物包含層出土土器（３）ⅠⅢ… 39
図25　１号遺物包含層出土土器（４）ⅠⅢ… 40
図26　１号遺物包含層出土土器（５）ⅠⅣ… 41
図27　１号遺物包含層出土石器…… 43
図28　２号遺物包含層出土土器（１）…… 45
図29　２号遺物包含層出土土器（２）…… 47
図30　２号遺物包含層出土土器（３）…… 48
図31　２号遺物包含層出土土器（４）…… 49
図32　２号遺物包含層出土土器（５）…… 50
図33　２号遺物包含層出土石器…… 51
図34　遺構外出土遺物…… 52
図35　空釜Ｂ遺跡出土土器集成…… 57

［表］

表１　福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査一覧…… 3
表２　周辺の遺跡…… 8
表３　遺物包含層遺物点数…… 53
表４　石器器種別点数…… 53
表５　剥片石材別点数…… 53

付　章

［挿図］

図１　暦年較正年代グラフ（１）…… 68
図２　暦年較正年代グラフ（２）…… 69
図３　暦年較正年代グラフ（３）…… 70

［表］

表１　測定結果…… 66
表２　暦年較正年代…… 67

写真図版目次

1　調査区全景……73
2　調査前現況……73
3　調査区北部検出状況……74
4　調査区北部完掘状況……74
5　調査区南部検出状況……75
6　調査区南部完掘状況……75
7　1号遺物包含層土層……76
8　2号遺物包含層土層……76
9　1・4号竪穴住居跡……77
10　1・4号竪穴住居跡細部……77
11　2号竪穴住居跡……78
12　2号竪穴住居跡土層断面……78
13　2号竪穴住居跡細部（1）……79
14　2号竪穴住居跡細部（2）……79
15　3号竪穴住居跡……80
16　3号竪穴住居跡細部……80
17　5号竪穴住居跡……81
18　5号竪穴住居跡土層断面……81
19　6号竪穴住居跡……82
20　5・6号竪穴住居跡細部……82
21　1号性格不明遺構……83
22　1号性格不明遺構検出……83
23　1号性格不明遺構土層断面……84
24　1号性格不明遺構遺物出土状況……85
25　1号性格不明遺構細部……85
26　1～3号土坑……86
27　3～5号土坑……86
28　遺構内出土土器（1）ＳＩ1・2……87
29　遺構内出土土器（2）ＳＩ2……88
30　遺構内出土土器（3）ＳＩ5……88
31　遺構内出土土器（4）ＳＩ3，ＳＸ1…89
32　遺構内出土土器（5）ＳＩ6……90
33　遺構内出土土器（6）
ＳＸ1，ＳＫ2・4……90
34　1号遺物包含層出土土器（1）ＬⅢ……91
35　1号遺物包含層出土土器（2）ＬⅢ……91
36　1号遺物包含層出土土器（3）ＬⅢ・Ⅳ　92
37　1号遺物包含層出土土器（4）ＬⅢ……93
38　1号遺物包含層出土土器（5）ＬⅣ……93
39　2号遺物包含層出土土器（1）……94
40　2号遺物包含層出土土器（2）……94
41　2号遺物包含層出土土器（3）……95
42　2号遺物包含層出土土器（4）……95
43　遺構内出土石器……96
44　遺物包含層出土石器……97
45　遺物包含層・遺構外出土石器……98
46　土器細部（1）……99
47　土器細部（2）……100

第１章　遺跡の環境と調査経過

第１節　調査に至る経緯

福島空港・あぶくま南道路建設計画事業の概要

福島県が整備を進めている地域高規格道路「福島空港・あぶくま南道路」（愛称：あぶくま高原道路）は，東北自動車道矢吹インターチェンジ（以下ＩＣとする）から福島空港を経て，磐越自動車道小野ＩＣに至る自動車専用道路である。

本事業は，福島空港を中核とした高速交通網の整備を目的とした，主要地方道矢吹・小野線の改築事業として位置づけられており，路線総延長34.8km，設計速度80km，車線数４車線で計画された。平成６年８月に東北自動車道矢吹ＩＣ～福島空港ＩＣ間と磐越自動車道小野ＩＣ～国道49号平田ＩＣ間が優先区間として路線発表された。本路線は，国土交通省が平成６年から重点的に整備を進めている地域高規格道路の計画路線に組み込まれている。平成10年度までに玉川村吉地区～平田村上蓬田地区間を除く部分が整備区間とされ，平成15年度までには，全区間が整備区間に組み込まれている。

福島県土木部では，平成７年度に平田村に「あぶくま高原自動車道建設事務所」（以下あ自建とする）を開所し，当面暫定２車線での供用を目指して平成８年度から本線工事に着工した。平成13年３月27日には，矢吹ＩＣ～玉川ＩＣ間の10.5kmが開通し，同年，須賀川市を会場として開催された「うつくしま未来博」へのアクセスに貢献した。続いて，平成14年９月18日には玉川ＩＣ～福島空港ＩＣ間が，平成16年11月25日には磐越自動車道小野ＩＣ～平田ＩＣ間が相次いで開通し，現在は，残る福島空港ＩＣ～平田ＩＣ間13.7kmについて建設が進められている。

図１　福島空港・あぶくま南道路位置図

平成20年度までの調査経過

本路線計画は西白河郡矢吹町，石川郡玉川村・石川町・平田村，田村郡小野町の５町村に跨っており，建設工区内の埋蔵文化財の調査は平成８年度より実施されている。

平成８年度，矢吹町及び小野町において遺跡の所在確認調査（表面調査）と試掘調査を両町の教育委員会が主体となって行っている。以降，平成９年度から現在に至るまで，福島県教育委員会（以下県教委とする）が調査主体となり，財団法人福島県文化センター（平成13年度より財団法人福島県文化振興事業団に改称）が埋蔵文化財調査業務の委託を受けて，調査を実施している。

平成８～12年には，矢吹ＩＣ～玉川ＩＣ間における調査を実施した。矢吹町では31ヶ所で試掘調査を行い，平成９～11年度に上宮崎Ａ遺跡をはじめとする19遺跡111,000㎡に対して発掘調査を実施した。玉川村では試掘調査を３ヶ所において行い，平成11・12年度に江平遺跡および高原遺跡の２遺跡57,600㎡に対しての発掘調査を実施した。

平成９年には，玉川ＩＣ～福島空港ＩＣ間における調査も開始しており，同12・13年度に重点的に発掘調査を行い，13年度中に終了している。ここでは玉川村の14ヵ所で試掘調査を行い，金波Ｂ遺跡・栗木内遺跡や堂平Ａ・Ｄ～Ｇ遺跡など11遺跡35,000㎡の発掘調査を実施している。

小野ＩＣ～平田ＩＣ間における調査は，平成８～10年および同12～14年度に実施している。小野町では16ヵ所で試掘調査を行い，柳作Ａ～Ｃ遺跡ほか８遺跡14,920㎡の発掘調査を実施した。平田村では５ヵ所で試掘調査を行い，平成14年度に中根館跡21,100㎡の発掘調査を実施した。

現在建設中の福島空港ＩＣ～平田ＩＣ間においては，平成12年度に表面調査を行い，平成15・16年度に路線計画変更に伴う表面調査を再度行っている。その結果，周知の遺跡も含めて玉川村において６遺跡および遺跡推定地５ヶ所，石川町において２遺跡および遺跡推定地１ヶ所，平田村において７遺跡を確認した。

平成16年度には玉川村吉地区の３遺跡の試掘調査を実施し，畑中遺跡・中下Ｂ遺跡について要保存とされた。平成17年度に実施した玉川村１遺跡と推定地１ヶ所，石川町１遺跡，平田村２遺跡に対する試掘調査によっては，玉川村の石橋遺跡，平田村の蓬来内館跡・空釜Ｂ遺跡について要保存範囲が確認された。工事が優先される畑中遺跡と蓬来内館跡について発掘調査を実施し，成果を『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査18』としてまとめた。平成18年度は，玉川村では７ヶ所，石川町２ヶ所の試掘調査を行い，玉川村３遺跡・石川町２遺跡において保存範囲が確認された。このうち同年度中に引き渡しを要望された玉川村中下Ｂ・境田・嫁田Ｂ・石橋，石川町手倉・法昌段Ａの６遺跡の発掘調査を実施した。平成19年度は，平田村草場Ａ遺跡において試掘調査・発掘調査を実施し，これに加えて前年度に保存となった玉川村青井沢Ｊ遺跡の発掘調査も実施している。これら平成18・19年度の成果は『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告19』にまとめた。

平成20年度は平田村空釜Ｂ遺跡の発掘調査を実施した。また煙石Ａ・Ｂ・Ｆ遺跡の試掘調査によって，煙石Ａ遺跡150㎡，煙石Ｆ遺跡1,000㎡が要保存とされた。

表1　福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査一覧

年度	町村名	遺跡名	調査面積（㎡）	調査期間	主要時代	遺跡種別	報告
9	矢吹町	上宮崎A	9,800	4月21日～9月18日	奈良・平安	集落跡	1
	矢吹町	上宮崎B	9,600	5月6日～10月17日	古墳	古墳群・集落跡	1
	矢吹町	下宮崎A	3,200	4月30日～9月12日	奈良・平安	集落跡	2
	矢吹町	小　又	9,400	5月12日～12月12日	縄文・奈良・平安	集落跡	2
	矢吹町	白山A	8,400	5月6日～10月9日	縄文・古墳	集落跡	3
	矢吹町	白山C	13,000	6月9日～12月25日	縄文・古墳～平安	集落跡	3
	矢吹町	白山D（1次）	2,020	10月20日～12月18日	古墳・平安	集落跡・水田跡	6
	矢吹町	白山E（1次）	1,500	6月16日～8月6日	平安	集落跡	3
	小野町	柳作B（1次）	100	8月25日～8月29日	近世	塚跡	4
	小野町	北ノ内	1,800	10月20日～12月5日	平安・近世	集落跡	1
10	矢吹町	田　町	2,500	4月21日～6月23日	縄文	集落跡	5
	矢吹町	弥栄A	900	7月2日～9月3日	弥生	集落跡	7
	矢吹町	八幡町A	2,100	6月18日～7月31日	縄文	狩猟場	10
	矢吹町	八幡町B	2,200	8月3日～10月30日	弥生	集落跡	7
	矢吹町	文京町	1,100	4月20日～6月17日	弥生	集落跡	5
	矢吹町	白山D（2次）	5,080	4月21日～8月25日	古墳・平安	集落跡・水田跡	6
	矢吹町	白山E（2次）	1,500	5月6日～7月14日	平安	集落跡	6
	矢吹町	弘法山古墳群	10,000相当	8月21日～12月25日	古墳	横穴墓群	8
	矢吹町	弘法山	300	10月7日～10月15日	不詳	塚群	9
	矢吹町	後　原	5,600	5月26日～11月6日	縄文・奈良・平安	集落跡	9
	矢吹町	後　原	1,200	11月26日～12月18日	縄文・奈良・平安	集落跡	9
	玉川村	金流B（1次）	1,400	11月9日～12月11日	奈良・平安	集落跡	6
	小野町	柳作A	1,520	5月11日～8月31日	奈良・平安	集落跡	4
	小野町	柳作B（2次）	1,200	4月20日～7月17日	縄文	集落跡	4
	小野町	柳作C	1,500	4月20日～7月17日	奈良・平安	集落跡	4
11	矢吹町	赤沢A	2,900	7月6日～10月7日	縄文・平安	集落跡・狩猟場	10
	矢吹町	赤沢B	17,500	4月21日～9月22日	縄文・平安	集落跡・狩猟場	10
	矢吹町	後　原（2次）	1,200	10月7日～12月10日	縄文・奈良～中世	集落跡	9
	玉川村	金流B（2次）	800	4月19日～5月21日	奈良・平安	集落跡	11
	玉川村	高　原	2,800	5月6日～9月7日	古墳～平安	集落跡	11
	玉川村	江　平（1次）	36,000	5月31日～3月17日	古墳・平安・中世	集落跡・古墳群	12
12	玉川村	江　平（2次）	18,800	4月10日～10月27日	旧石器～平安	集落跡	12
	玉川村	堂平A	2,700	8月3日～10月13日	縄文・平安	散布地	13
	玉川村	堂平D	3,000	6月19日～8月30日	縄文・平安	集落跡	13
	玉川村	堂平E	1,900	6月19日～8月10日	弥生	集落跡	13
	玉川村	堂平F	500	6月19日～10月4日	平安	集落跡	13
	玉川村	栗本内（1次）	3,100	10月13日～12月22日	縄文・弥生・平安	集落跡	14
13	玉川村	栗本内（2次）	6,400	4月10日～9月18日	縄文・古墳～平安	集落跡	14
	玉川村	堂平G	3,100	4月9日～6月29日	縄文・奈良・平安	集落跡	15
	玉川村	宮ノ前A	5,300	4月9日～9月14日	縄文・平安・近世	集落跡	15
	玉川村	中　下	3,100	4月9日～7月13日	弥生・平安	集落跡	15
	玉川村	池ノ上	1,200	7月2日～9月14日	縄文・弥生・平安	狩猟場	15
	玉川村	兎　田	2,500	7月2日～9月28日	縄文・弥生・近世	集落跡・墓地	15
	小野町	鹿　島	3,300	9月5日～11月30日	縄文・平安	集落跡	16
	小野町	反田B	1,300	9月19日～11月20日	縄文	集落跡	16
	小野町	関場B	1,200	10月1日～11月9日	縄文・平安・近世	散布地	16
14	小野町	仁井殿	3,000	4月9日～5月31日	縄文・平安	集落跡	17
	平田村	中根館跡	21,100	5月7日～11月8日	縄文・平安・近世	狩猟場・城館跡	17
17	玉川村	畑　中	1,000	9月13日～10月21日	縄文・弥生・近世	散布地・塚跡	18
	平田村	蓬来内館跡	1,500	10月19日～12月9日	中世	城館跡	18
18	玉川村	石　橋	700	4月12日～5月17日	縄文	集落跡・狩猟場	19
	玉川村	中下B	1,500	5月18日～6月23日	縄文・平安	散布地	19
	玉川村	境　田	400	7月3日～8月29日	縄文・弥生・平安	集落跡	19
	玉川村	堀田B	1,200	11月7日～12月15日	縄文・弥生・平安	集落跡	19
	石川町	法昌段A	600	9月5日～10月17日	縄文・弥生・平安	集落跡・狩猟場	19
	石川町	手　倉	1,600	10月11日～12月12日	縄文・弥生	集落跡・狩猟場	19
19	玉川村	青井沢J	1,800	8月28日～12月14日	中世～近世	製鉄跡	19
	平田村	草場A	300	5月15日～8月3日	中世～近世	製鉄跡	19
20	平田村	空梁B	1,600	4月9日～9月3日	縄文	集落跡	本書

年度欄の年号は平成
報告欄の数字は『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告❋』の番号（❋）を示す

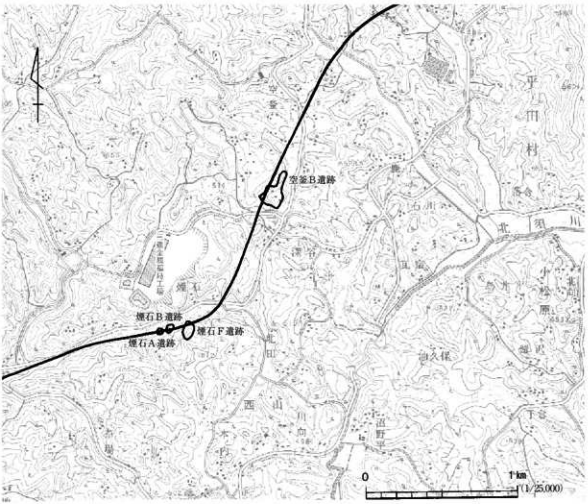


図２　平成20年度調査遺跡の位置

第２節　遺跡の位置と環境

福島県は東北地方の南端に位置し，全国で３番目に広い県土を有する。越後山脈，奥羽山脈，阿武隈高地の３つの山地が南北に平行して，西から会津地方・中通り地方・浜通り地方という気候・風土を異にする３地方に分割される。空釜Ｂ遺跡が所在する平田村は，中通り地方南部にあたる阿武隈高地南部中央に位置する。東はいわき市と田村郡小野町，西は石川郡石川町・玉川村，北は須賀川市および郡山市，南は石川郡古殿町と接している。現在の村域面積は93.53km^{2}である。

阿武隈高地は標高500～800mの隆起準平原で，地質は花崗岩類を主体として構成され，ほとんどが中生代白亜紀に形成されている。花崗岩は，被熱による膨張・収縮を繰り返すと鉱物間の結びつきが弱くなり破砕しやすいため，風化の進んだ当地域の基盤の大部分は真砂化しており，堆積土も基盤の風化土を主とする。丘陵上の黒色土の堆積はおしなべて薄く，埋積谷にのみ厚く認められる。

村内の地形は，阿武隈高地の山地および丘陵が主体をなす。村の北端には蓬田岳（952.2m）や十石山（718.1m）が聳え，南東端の芝山（819.2m）へと村域東側には標高600m級の山地が連なる。

村内に広がる丘陵の標高は450～600mで，南西に向かって緩やかに高度を減じていく。丘陵の間には，蓬田岳南麓に源を発する北須川や西山川，芝山西麓に源を発する平田川などが流れ，西端部で人造湖である母畑湖へ集まる。これらの河川や支流によって狭小な谷底平野や段丘が丘陵内に縦横に入り組むように形成され，複雑な地形を呈する。斜面の傾斜は，蓬田岳山腹で20～30°以上で，丘陵の大部分が15～20°程度の傾斜である。開析を受けた丘陵裾・段丘上では８～15°，谷底平野で３°未満と下方に行くほど緩くなっている（中村ほか1996）。

現在の土地利用は，丘陵斜面がスギやヒノキの人工林が主となり，落葉広葉樹やアカマツからなる雑木林もかなりの面積を占める。丘陵斜面下位の緩斜面は葉タバコなどの畑地・牧草地・宅地とされ，谷地および低地は水田として利用される。気候は，年較差・日較差の大きい内陸性気候である。夏季は，標高が高いため真夏日になることは少ないものの，夏日は連続して記録される。冬季は２月の月平均気温が0.1℃と冷え込みが厳しいものの，積雪は比較的少ない。

空釜Ｂ遺跡は，平田村大字下蓬田字空釜地内に所在し，村域の中央部やや西寄りに位置する。北

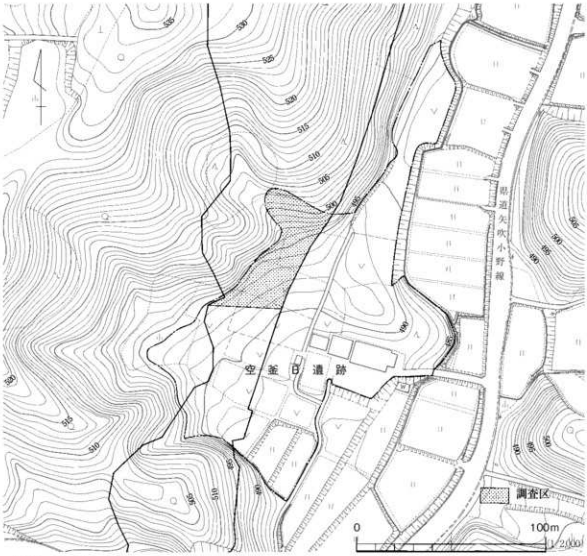


図３　調査区の位置

須川と西山川に挟まれた，蓬田岳の南麓より伸びる丘陵の先端部にあたり，西山川から北東方向に伸びる谷底平野に面する。丘陵先端部での頂部の標高は530m前後で，遺跡はその裾部の標高485～500mを測る南東向き斜面に立地する。遺跡中央には西から丘陵が張り出し，遺跡東部の宅地の北側には残丘状の丘陵が存在する。遺跡周辺の現況は，丘陵斜面はスギ林および荒地であり，丘陵裾部は畑・宅地，谷底平野は水田として利用されている。今回の調査範囲は，道路本線部分にあたる1,600㎡で，南側工区内1,700㎡は試掘調査の結果，慎重工事範囲とされている。

第３節　歴 史 的 環 境

今回調査を行った平田村では，現在までに149ヶ所の遺跡が周知され，県教委が担当した当事業の調査や広域農業開発事業阿武隈中部第二地区による確認調査，中小の開発を原因とする村教育委員会による調査が数ヶ所で行われている。

旧石器時代，縄文時代草創期の遺跡は，村内では確認できていない。縄文時代早期・前期に至ると，丘陵地において多くの遺跡が確認されるようになる。入ノ坂遺跡で早期末葉～前期初頭に位置づけられる竪穴住居跡が検出されているほか，蓬田岳Ｂ・Ｈ，大柏木，程久保，江名竜Ｄ，柳橋Ａ・Ｂ，蓬来内Ｂ遺跡などで当該期の土器が確認されている。隣接する小野町でも仁井殿遺跡で早期末葉大畑Ｇ式期の集落が確認されており，阿武隈高地南部の丘陵地における活発な活動を彷彿させる。中期になると段丘や谷底低地を望む丘陵裾など比較的広い平坦面に大規模な集落を形成するようで，北須川流域の三斗蒔遺跡で中期後葉～後期前葉にかけての集落跡が確認され，小野町十石川流域の堀切遺跡も中期の集落跡と目されている。後期中葉以降は再び阿武隈高地内の小支谷中に遺跡が見られるようになる。見上Ｃ遺跡において晩期大洞Ａ式期の竪穴住居跡が検出されているほか，入ノ坂，刈万田Ａ・Ｂ，筒地Ｃ遺跡などで当該期の土器の出土が認められる。

弥生時代・古墳時代の遺跡の目立った調査事例は知られていない。弥生時代では，縄文時代晩期末葉～前期の萩ノ作Ｂ遺跡，中期前葉の酒州遺跡，中期中葉の江名竜Ｂ遺跡，後期の大柏木遺跡などで各期の土器の出土が認められる。古墳時代においても，墳丘を有する古墳および集落は未確認で，４基の横穴墓で構成される酒洲横穴墓群が確認されるにすぎない。

奈良～平安時代は，当地域は白河郡に属していたと考えられている。この時代においても目立った調査事例はないが，「止」字が墨書された土師器が出土した坪内遺跡が知られるほか，酒州，刈万田Ｂ，平堂内遺跡などでも土師器の出土が認められる。

中世以降は，11世紀前半までに白河郡から分立した石川郡に属していたと考えられ，現在の石川町の三蓋城を本拠とする石川氏の支配地として発展する。石川氏の一族である面川氏，小平氏，蓬田氏などが村内のそれぞれの所領を治め，蓬田館跡・小平館跡などの多数の城館が築かれている。

天正18年（1590年）に豊臣秀吉が行った奥州仕置以降は，会津藩領，白河藩領と支配が変遷する。寛保元年（1741年）白河藩主松平義知の転封に伴い，天領または常陸および越後の諸藩による分領

図４　周辺遺跡位置（■は城館跡，▲は製鉄跡を示す）

表２　周辺の遺跡

	遺跡名	所在地	時代	種別
1	銭神Ｂ	須賀川市小倉字銭神・桐久保	近世	製鉄跡
2	武平壇Ｂ	須賀川市小倉字武平壇	近世	製鉄跡
3	東山Ａ	須賀川市上小山田字東山	近世	製鉄跡
4	銭神Ｇ	須賀川市小倉字銭神	近世	製鉄跡
5	沢又山	須賀川市小倉字銭神	近世	製鉄跡
6	東山Ｈ	須賀川市上小山田字東山	近世	製鉄跡
7	山新田Ａ	玉川村南頃釜字山新田	中世・近世	製鉄跡
8	仁井殿	小野町雁股田字仁井殿	縄文	集落跡
9	堀切	小野町雁股田字堀切	縄文	散布地
10	蓬田岳Ｂ	平田村蓬田新田字大柏木	縄文・弥生	散布地
11	蓬田岳Ｇ	平田村蓬田新田字蓬田岳	縄文	散布地
12	蓬田岳Ｈ	平田村蓬田新田字蓬田岳	縄文	散布地
13	大柏木	平田村蓬田新田字大柏木	縄文	散布地
14	桧久保	平田村上蓬田字桧久保	縄文・奈良・平安	散布地
15	中根館跡	平田村上蓬田字中根	縄文・平安・近世	城館跡
16	向館跡	平田村上蓬田字向館	中世	城館跡
17	蓬田館跡	平田村上蓬田字館ノ前	中世	城館跡
18	三斗蒔	平田村上蓬田字三斗蒔	縄文	集落跡
19	小綱木	平田村九生滝字小綱木	縄文・古墳～平安	散布地
20	平堂内	平田村九生滝字平堂内	奈良・平安	散布地
21	蓬来内館跡	平田村下蓬田字蓬来内	中世	城館跡
22	蓬来内Ｂ	平田村下蓬田字蓬来内	縄文	散布地
23	入ノ坂	平田村鴇子字入ノ坂	縄文	集落跡
24	坪内	平田村鴇子字坪内	奈良・平安	散布地
25	酒州横穴墓群	平田村永田字酒州	古墳	古墳
26	酒洲	平田村永田字酒州	縄文・弥生・奈良・平安	散布地
27	境館跡	平田村永田字酒きょう	中世	城館跡
28	江名竜Ｄ	平田村永田字江名竜	縄文	散布地
29	江名竜Ｂ	平田村永田字江名竜	縄文	散布地
30	小松原館跡	平田村小松原字大棒	中世	城館跡
31	北向館跡	平田村小松原字北向	中世	城館跡
32	生天目館跡	平田村小松原字大棒	中世	城館跡
33	平館跡	平田村永田字広町	中世	城館跡
34	天王館跡	平田村永田字戸花	中世	城館跡
35	永田本館跡	平田村永田字上永田	中世	城館跡
36	瓦宿	平田村下蓬田字瓦宿	縄文	散布地
37	萩ノ作Ｂ	平田村永田字萩ノ作	縄文・弥生	散布地
38	柳橋Ａ	平田村永田字柳橋	縄文・平安	散布地
39	柳橋Ｂ	平田村永田字柳橋	縄文・平安	散布地
40	宮田館跡	平田村東山字佐瀬内	中世	城館跡
41	駒形館跡	平田村駒形字小館	中世	城館跡
42	草場Ａ	平田村西山字草場	中世	製鉄跡
43	青井沢	平田村西山字青井沢	中世・近世	製鉄跡
44	燻石Ａ・Ｂ・Ｆ	平田村西山字燻石	中世・近世	製鉄跡
45	西山館跡	平田村西山字川向	中世	城館跡
46	真弓館跡	平田村西山字真弓	中世	城館跡
47	小平館跡	平田村小平字小平	中世	城館跡
48	中倉館跡	平田村中倉字中倉	中世	城館跡
49	幕坪天王館跡	平田村中倉字幕坪	中世	城館跡
50	菱苅城跡	平田村中倉字幕坪	中世	城館跡
51	見上Ｃ	平田村中倉字見上	縄文	集落跡
52	筒地Ｃ	平田村中倉字筒地	縄文	散布地

支配となり近代に至る。戊辰戦争時には，明治政府軍の進軍路上に位置しており，平成14年に調査された中根館跡は奥羽列藩同盟側の台場と考えられている。

中世以降の特徴的な遺跡としては，城館跡以外に製鉄跡が挙げられる。蓬田岳西麓の須賀川市域では沢又山・銭神Ｂ・Ｇ・Ｈ・武平壇Ｂ・山新田Ａ遺跡など，平田村内でも青井沢・草場Ａ遺跡で製鉄炉が確認され，小規模な「野たたら」の跡と考えられている。これら以外にも，蓬田岳南麓の下蓬田地区打違内や乙空釜などで，多くの鉄滓散布地が発見されている。

第4節　調　査　経　過

空釜Ｂ遺跡は，平成15年度に実施した当事業に関わる表面調査によって縄文土器が採集され，登録された遺跡である。平成17年度に実施した試掘調査の結果から工区内1,600㎡が要保存範囲とされた。平成20年３月に行われた福島県土木部，あ自建，県教委，事業団の４者による協議により，空釜Ｂ遺跡については平成20年度供用区間に含まれることから，当該年度中に発掘調査を実施することが決定された。当事業団では，平成20年４月１日付で県教委と締結した埋蔵文化財発掘調査委託契約に基づき，本事業担当として調査員１名を配してこれに対応した。

空釜Ｂ遺跡の発掘調査は，４月10日から調査時の連絡所・駐車場の整備に着手し，14日には重機による表土除去作業を開始した。同21日には作業員を雇用し，遺構検出作業を開始している。作業は調査区北部から進め，廃土は一輪車やクローラキャリアを用いて南方の調査区域外に設けた仮置場へと運搬した。５月中旬まで作業を継続し，２ヶ所の遺物包含層の範囲が確認できたことから，北部の１号遺物包含層の掘削に着手した。

１号遺物包含層では，上部の土層を除去したところ，北東隅の南向き斜面中位に縄文時代早期後葉の竪穴住居跡４軒，斜面裾に縄文時代前期初頭の２号竪穴住居跡が確認された。６月上旬より２号住居跡の調査を開始し，６月末に調査を終えた。また，同月21日には遺跡ボランティアによる現地公開を行い，30余名の見学者を集めている。

７月に入ってからは，早期後葉の４軒の住居跡および遺物包含層下部の掘削作業を進めた。２号住居跡の下位からは早期後葉の土器を伴った１号性格不明遺構を確認し，同月中は住居跡も含めたこれらの早期後葉の遺構の調査に費やした。この間，８日には村内の永田小学校の５・６年生15名，29日には平田村文化財保護審議委員４名の見学を受け入れている。その後，８月上旬は遺物包含層以下の土層掘削，遺構の調査および土層断面の作図を行い，盆休みを挟んで22日には調査を終えた。

南部にあたる２号遺物包含層の調査は，上面で検出した土坑３基の精査から開始した。これらはいずれも18世紀以降の近世墓であったことから文化財としては取り扱わず，遺骨，副葬品（キセル・六道銭）共々隣接住民の御好意により引き取っていただいた。その後，８月６日から掘削を開始した。調査期間の時間的制約から，重機によってトレンチを入れて遺物の出土層位と谷の深度を探った。その結果，谷の深度は２ｍを超すものの，堆積土の最上部は再堆積土であり，下部は遺物が皆

無であることを確認し，これらは重機によって掘削することとした。遺物包含層を掘削した結果，１号遺物包含層上部と同様に縄文時代前期以降の遺物が出土し，下位からは前期初頭の竪穴住居跡１軒を検出した。谷の堆積土を掘り切った９月３日に完掘写真を撮影して遺跡を引き渡した。同５日には連絡所・器材等を撤去して調査終了とした。調査期間中は，雨天により作業を中止や切り上げることが多く，作業日数は延べ６ヶ月間で，76日であった。

第５節　調　査　方　法

今回の調査で用いた測量座標は，世界測地系に基づく国土座標Ⅸ系の座標であり，メートル単位の下三桁を座標値として示した。また，調査区内における遺構・遺物の大まかな位置を示すために，遺跡北西の［Ｘ＝135,400・Ｙ＝62,850］を原点とする10m方眼のグリッドを配置した。グリッドには東西方向にアルファベット，南北方向に算用数字を振り，その組み合わせによって各枡目をＡ１・Ｂ２などと呼称する。報告においては，後ろに略号であるＧを付してＡ１Ｇなどと表記している。現地においては，グリッドの交点に測量杭を設置し，遺跡の図化，遺物の取り上げに用いた。

遺跡内の表土層の掘削には重機を用いた。重機掘削後の遺構検出および遺構内堆積土の掘削は草削り，唐鍬，移植鏝などを用いて基本的に人力で行った。但し，無遺物と確認できた層に関しては一部重機を用いている。遺構の掘込に際しては，竪穴住居跡は土層観察用畦を残した４分割法，土坑・ピット・焼土については２分割法を用いた。遺物包含層・性格不明遺構については土層ベルトを軸線沿いに適宜残して掘削した。

図５　グリッド配置図

遺物は，遺構およびグリッド単位で取り上げ，土層観察用畦，調査区壁の観察から出土層位を記録した。遺構の記録は，平面図と土層断面図の作成を原則とし，基本的に１／20で，調査区全体図については１／200で図化した。記録写真は調査過程の各段階において撮影している。35㎜のモノクロームおよびカラーリバーサルフィルムを主として用い，調査区の全景や遺構の完掘状況などの撮影には６×4.5判のモノクローム・カラーリバーサルフィルムも用いている。

これらの調査記録および出土遺物は，報告書刊行後に当事業団の定める基準に従って整理を行い，福島県教育委員会へと移管し，福島県文化財センター白河館に収蔵される予定である。

第2章　調 査 の 成 果

第1節　遺跡の概要と基本土層

遺跡の概要（図6，写真1～6）

今回の調査区は，遺跡範囲中央東部の山際に位置している。調査区中央のＩ・Ｊ７Ｇ付近は西から張り出す丘陵と遺跡東部の残丘状丘陵の間が尾根状の微高地となり，その南北には東に下る谷が２ヶ所入っている。いずれの谷にも遺物が認められることから，北の谷を１号遺物包含層，南の谷を２号遺物包含層として調査している。

１号遺物包含層は，南東方向に下る谷に形成される。調査区内での谷底の標高は493.5～497mで約４ｍの高低差がある。傾斜の角度は横断方向で20～30°，縦断方向で５°である。上部では３ｍほどであった谷底は標高496m付近から開けて，以下のＪ６Ｇ付近は10m程度の幅の谷となる。この谷の開けた部分に縄文時代早期の竪穴住居４軒・性格不明遺構１基，前期の竪穴住居跡１軒が構築される。早期のＳＩ１・３～５は，谷底へと下る丘陵の南向き急斜面に構築されているのに対し，前期のＳＩ２は斜面裾の谷の埋没により傾斜の緩くなった部分に構築されている。遺物もこの付近から多く出土し，谷上部のＩ５Ｇ西半は遺物がほぼ皆無である。これ以外の土坑については，ＳＫ１・４とした落し穴が谷の北向き斜面の裾に，ＳＫ２は南向き斜面にＳＩ３を切って，前期の墓坑の可能性のあるＳＫ３は谷底部に構築される。

２号遺物包含層は，調査区中央の微高地から緩やかに南方に下る，標高490.5～493mの南東向き斜面に形成される。但し，基盤層直上ではＩ８Ｇ西端の丘陵斜面裾で湧水が認められ，東南東向きの自然流路が形成される。この流路は調査区中央の尾根状微高地から20～30°の傾斜で３ｍほど落ち込み，谷底は緩やかに南東へ下っている。この流路が埋没した後にＳＩ６とした縄文時代前期の竪穴住居跡１軒とＳＫ５とした時期不明の土坑が構築され，さらに遺物包含層が形成される。

基本層序（図6・7，写真7・8）

遺跡の遺構外堆積土は，表土から基盤層を10層に分けた。調査区全域に共通する土層はＬⅠ・Ⅱおよび基盤層のＬⅩで，北の谷にはＬⅢ～Ⅵ，南の谷にはＬⅦ～Ⅸが堆積する。調査区中央の微高地では，ＬⅡ以下の堆積層は耕作によって削平されて，ＬⅩが露出する。

ＬⅠは表土層でしまりのない黒褐色土である。１号遺物包含層の谷上部では１ｍ近い層厚でそれ以外の部分では30cm程度の堆積である。ＬⅡは遺物包含層の上層となる黒色土である。しまりはなく，沼沢パミスとみられる火山灰を少量含んでいる。調査区北端のＪ・Ｋ５Ｇ付近では欠層となり，１号遺物包含層上では10cm程度と堆積が薄く，２号遺物包含層上では20～60cmと南に向かうに連れて厚くなっていく。主として縄文時代前期以降の遺物が出土する。

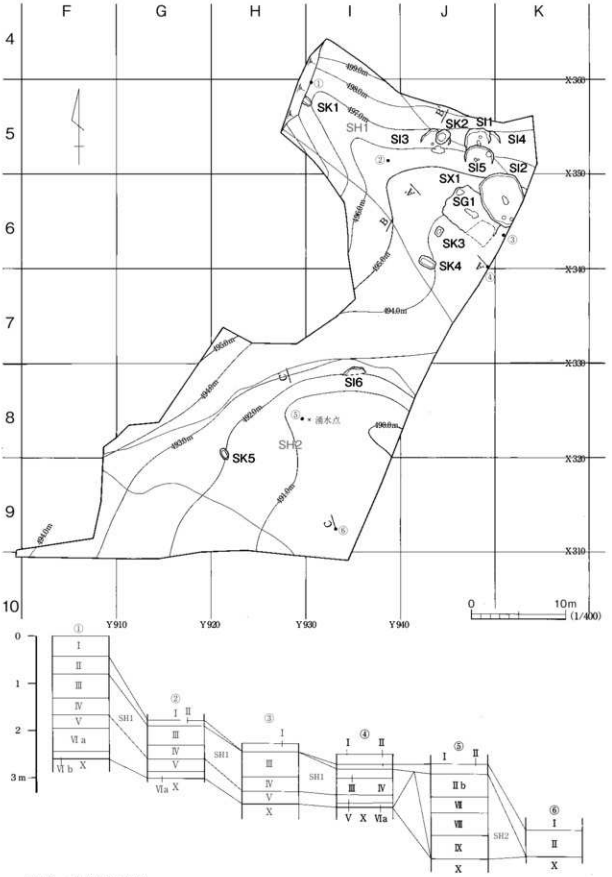
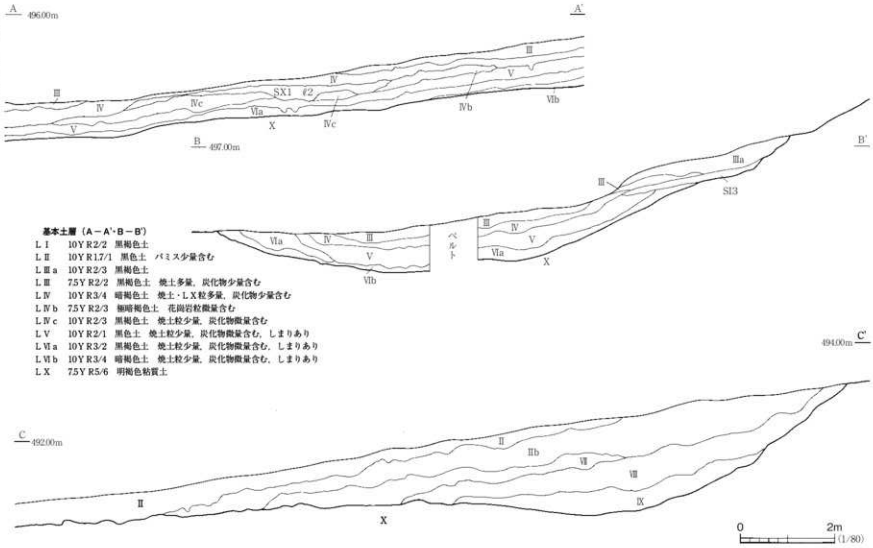

F
G
H
I
J
K
4
5
6
7
8
9
10
X360
X350
X340
X330
X320
X310
SK1
SH1
SK2
SI1
SI3
SI4
SI5
SI2
SX1
SG1
SK3
SK4
SI6
湧水点
SH2
SK5
0
10m
(1/400)
Y910
Y920
Y930
Y940
SH1
SH2
0
1
2
3 m

図６　調査区全体図

図7　基本土層



基本土層（A－A'・B－B'）

L Ⅰ	10Y R2/2	黒褐色土
L Ⅱ	10Y R1.7/1	黒色土　パミス少量含む
L Ⅲa	10Y R2/3	黒褐色土
L Ⅲ	7.5Y R2/2	黒褐色土　焼土多量，炭化物少量含む
L Ⅳ	10Y R3/4	暗褐色土　焼土・L X粒多量，炭化物少量含む
L Ⅳb	7.5Y R2/3	極暗褐色土　花崗岩粒微量含む
L Ⅳc	10Y R2/3	黒褐色土　焼土粒少量，炭化物微量含む
L Ⅴ	10Y R2/1	黒色土　焼土粒少量，炭化物微量含む，しまりあり
L Ⅵa	10Y R3/2	黒褐色土　焼土粒少量，炭化物微量含む，しまりあり
L Ⅵb	10Y R3/4	暗褐色土　焼土粒少量，炭化物微量含む，しまりあり
L X	7.5Y R5/6	明褐色粘質土

基本土層（C－C'）

L Ⅱ	10Y R1.7/1	黒色土　パミス少量含む	L Ⅶ	10Y R2/1	黒色土　焼土粒・炭化物微量含む	L Ⅸ	10Y R4/1　褐灰色砂質土　上面に鉄錆層を成す
L Ⅱb	10Y R3/1	黒褐色土　焼土粒・炭化物・パミス少量，部分的にL X塊多量含む	L Ⅷ	10Y R3/1	黒褐色土　焼土粒・炭化物多量含む	L X	10Y R5/8　黄褐色粘質土

ＬⅢは１号遺物包含層中位の黒褐色土である。焼土を多量含む。Ｊ５Ｇではこの上にＬＸの再堆積を含む土が堆積しており，これはＬⅢａとしている。主に縄文時代前期の遺物が出土する。ＬⅣは１号遺物包含層下層の暗褐色土である。焼土およびＬＸを多量含み，しまりがある。縄文時代早期後葉の遺物が出土する。さらに早期後葉の遺構群の下位にはＬⅣ・Ⅴとは区別される極暗褐色・黒褐色の無遺物層が堆積しておりそれぞれＬⅣｂ・ｃとした。ＬⅤ・Ⅵは１号遺物包含層の下位に堆積する黒色土・暗褐色土である。しまりと粘性に富む。焼土粒・炭化物粒を含んでいるが遺物は出土しない。ＬⅥについては，暗褐色土層ａと，ＬＸとの漸移層であるｂに細分できる。

ＬⅡｂは２号遺物包含層下層の黒褐色土である。上部にパミスを含むためＬⅢとは区別されるＬⅡ下位の層として捉えた。部分的にＬＸ塊を多量，焼土・炭化物を少量含む。主に縄文時代前期の遺物を包含する。ＬⅦ・Ⅷは２号遺物包含層下位の自然流路を被覆する黒色～黒褐色を呈する土である。焼土粒・炭化物粒を含むが，遺物は出土しない。ＬⅨは２号遺物包含層下位の自然流路の埋土で，褐灰色の砂質土である。上面に酸化鉄層が形成されている。遺物は出土しない。

ＬＸは遺跡の地形を形作る基盤層である。黄～明黄褐色の粘質土で，調査区南端部以南では花崗岩の巨礫を多量含む。

第２節　出土土器の分類

今回出土した土器は縄文土器のみであり，下記のように分類した。出土点数はⅡ群土器が最も多い。Ⅰ群がこれに次ぐ。Ⅳ群は出土量が僅かなものを一括した。

Ⅰ群　早期後葉の条痕文系土器群

　１類　茅山下層式期

　２類　茅山上層式期

　３類　本群に比定されるが類別不可能な胴部・底部

Ⅱ群　早期末葉～前期初頭の土器群

　１類　縄文条痕文系土器

　２類　前期最初頭の土器

　３類　前期初頭の花積下層式

　４類　本群に比定されるが類別不可能な胴部・底部

Ⅲ群　前期前葉～後葉の土器群

　１類　前期前葉の土器

　２類　前期中葉～後葉の土器

Ⅳ群　上記以外の時期に属する土器群

　１類　早期中葉の土器

　２類　後・晩期の土器

第3節　竪穴住居跡

１・４号竪穴住居跡　ＳＩ１・ＳＩ４

遺　　構（図８，写真９・10）

調査区北東部のＪ５Ｇ東方からＫ５Ｇ西方に位置する縄文時代の住居跡である。１号遺物包含層に面した丘陵の南向き急斜面に立地する。西1.5mに同時期のＳＩ３，南４ｍの谷底にＳＸ１が位置する。検出時はＳＩ５も含めて１軒の住居と考えたが，掘り込みの結果床面が段を成して複数確認できることから，３軒の重複と考えている。土層の観察からこれらの方がＳＩ５よりも新しい。検出面はＬⅣｂ～ＬＸで，暗褐色系土の堆積範囲として確認した。

１号竪穴住居跡は，隅丸方形を基調とした平面プランで斜面下方に南壁は確認できない。平面規

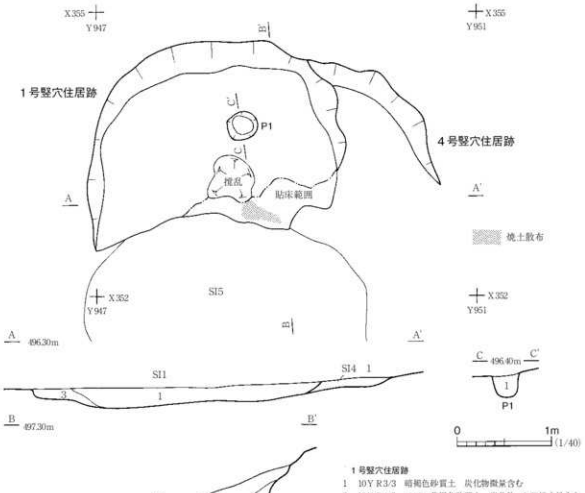


図８　１・４号竪穴住居跡

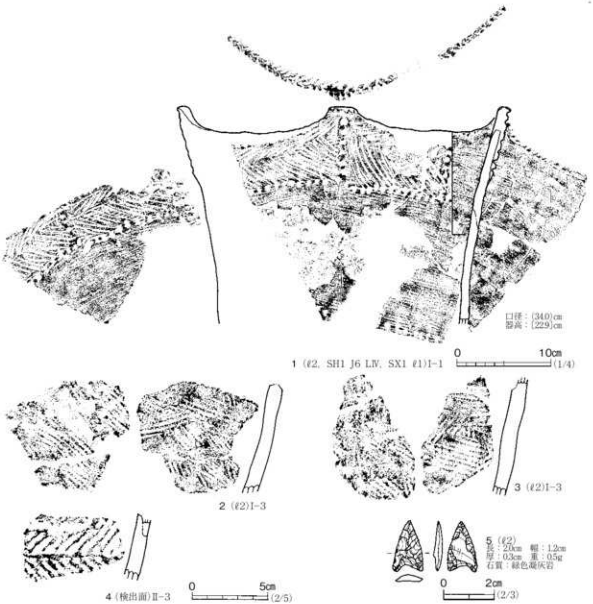


図９　１号竪穴住居跡出土遺物

模は南北２ｍ，東西2.7ｍを測る。壁高は北壁で最大59㎝を測り，水平から70°程度の角度で立ち上がる。床面は概ね平坦で，南に向かって下り勾配となる。ＳＩ５との境界付近にはℓ４としたＬＸのくすんだ土が認められ貼床かと考えている。

堆積土は砂質土で３層に分けられる。ℓ２・３とするＬＸを含む土が北・西壁沿いに三角堆積しており，その上にℓ１とした暗褐色土が流れ込んだ自然堆積である。

掘り込み中央にはピットが１個確認できる。Ｐ１は径30～33㎝の円形で，床面からの深さ28㎝の断面Ｕ字形に掘り込まれる。柱穴の可能性がある。そのほか床面南端部には焼土が散布しており，地床炉がこの付近に位置していた可能性がある。

４号竪穴住居跡は，１号住居跡北壁から１ｍほど東に飛び出す不整な落ち込みである。土層の観察からは，１号住居跡よりも古いと判断される。壁高は30㎝程度あるが，掘り込みは１号住居跡よ

りも浅く，壁の立ち上がりも緩い。床面は１号住居跡よりもきつく傾斜し，掘り込み外部の傾斜との境は不明瞭である。堆積土はＬＸを含む土の単層である。これに付帯するような施設は確認できない。

遺　　物（図９，写真28・43）

出土遺物はいずれも縄文土器片・石器である。検出面から土器片14点，１号竪穴住居跡ℓ１から土器片５点，ℓ２から土器片31点，床面から土器片12点・石器１点が出土する。４号竪穴住居跡堆積土から遺物は出土していない。このうち５点を図９に図示した。

１～３はⅠ群に分類されるものである。１は主にℓ２から出土したもので，ＳＸ１ℓ１，ＳＨ１ＬⅣとも接合する。４単位の大波状口縁で，口縁部下で稜を成しながらも屈曲することなく開く器形である。口縁上端は平坦に仕上げられ，上面に矢羽状の刻みが内外から加えられる。文様は，波頂・波底に刺突の入った隆帯が垂下し，矢羽状の集合沈線が半截竹管凹部で描かれる。文様帯下端の稜線上および胴部中央には同一工具による横方向への刺突が一巡する。地文は内外面とも条痕である。なお，左側の拓本で示したものは，ＳＸ１ℓ１から出土した同一個体の大破片で，図19－２の横から出土した。２・３は１とは別個体の内外面条痕文の胴部である。

４は検出面での出土で，本来はＬⅢに含まれるものであろう。Ⅱ群３類に分類される羽状縄文の施される土器である。５は凹基の石鏃である。硬質で細粒の緑色凝灰岩を用いる。

ま　と　め

これらは斜面に階段状に重複して構築された竪穴住居跡である。Ⅰ群１類土器が主に出土することから縄文時代早期後葉茅山下層式期に帰属するものと考えられる。

２号竪穴住居跡　ＳＩ２

遺　　構（図10・11，写真11～14）

調査区北東部のＪ・Ｋ６Ｇに位置する縄文時代の住居跡である。南向き斜面裾の１号遺物包含層中に構築される。検出面はＬⅣで，砂を含む黒褐色土の堆積範囲として確認した。

平面形は西に傾いた楕円形を呈し，南東側は調査区外へ出る。平面規模は長軸沿いに5.7mが調査区内で確認でき，短軸は4.4mを測る。壁高は北壁で最大45cmを測り，60～70°で立ち上がる。床面は若干起伏を持ちながら，南西に向かって下り勾配となる。貼床は成されず，北東よりＬＸ・ＬＶ・ＳＸ１ℓ１が床面となる。

堆積土は，５層に分けられる。中央に向かって凹むレンズ状の堆積を呈することから自然堆積と考えられる。土層断面Ｅ－Ｅ′で分かるように調査区壁面の土層観察では本遺構の掘り込み面はＬⅣであり，上位にはＬⅢが被覆する。また，ℓ２ａ上面において焼土の形成が認められることから，住居埋没途上においても凹みが利用されていた可能性がある。

床面中央のＬＶ上には焼け面が認められ，地床炉跡と考えている。住居の長軸に沿って細長く，100×50cmの範囲で焼土が形成される。床面から６cm程度が焼土化し，その下位４cm程度までが被

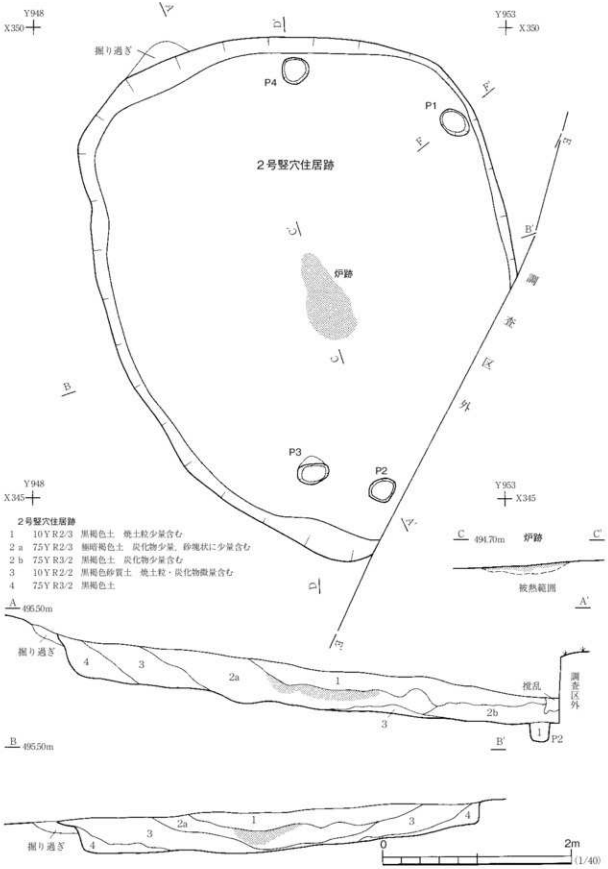


図10　２号竪穴住居跡（１）

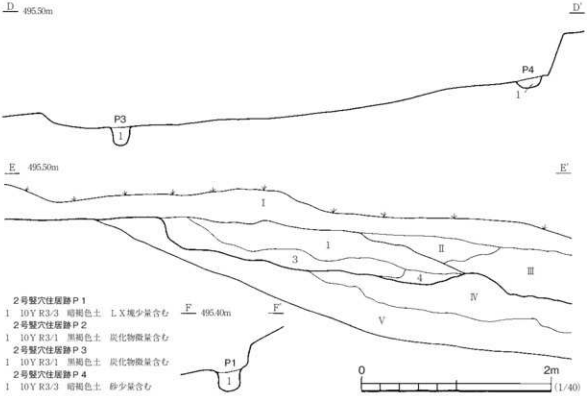


図11　２号竪穴住居跡（２）

熱して硬化している。

ピットは壁際に４個検出される。北壁中央から北東隅に２個，南西隅に２個配置され，北東から時計回りにＰ１～４と番号を付した。径25～35cmの円形ないし楕円形を呈し，Ｐ１～３が床面から20cm，Ｐ４が床面から10cm程度断面Ｕ字形に掘り込まれている。いずれも柱穴として機能していたと考えられる。堆積土は北の２個がℓ４に類似する暗褐色土，南の２個がℓ３に類似する黒褐色砂質土である。

遺　　物（図12・13，写真28・29・43）

出土遺物はいずれも堆積土からのもので，縄文土器と石器である。それぞれℓ１から118点･18点，ℓ２ａを含むℓ２から240点・25点，ℓ３から14点・16点，ℓ４から38点・３点出土している。土器はいずれもⅡ群２類に含まれるもので，地文撚糸文のものは各層位に認められるのに対し，地文縄文のものはℓ１～２に集中する。図12・13に主なものを示した。

図12には大形の土器片を示した。１～４は外反する口縁部下に隆帯を貼り付けて口縁部文様帯を区画する。文様帯には円形刺突や撚りの異なる１段の縄を並列して押捺した矢羽状の縄圧痕が施される。胴部地文は縄の回転方向を変えた放射状の縄文を施す。１は外反する口縁端部と断面三角形の隆帯を付して口縁部の区画とする。円形刺突を縦に３個配し，縄圧痕で斜位に結んで重鋸歯状の文様を描く。胴部はＬＲ縄文である。２は口縁端部が口唇状に飛び出し，これに縦位の隆帯を加えて方形の区画を成す。文様は横位の縄圧痕を施す。口縁上面および隆帯上には胴部地文と同一原体の２段ＬＲの縄による回転縄文を施す。内面は擦痕が残される。３は幅狭の文様帯に隆帯による縦

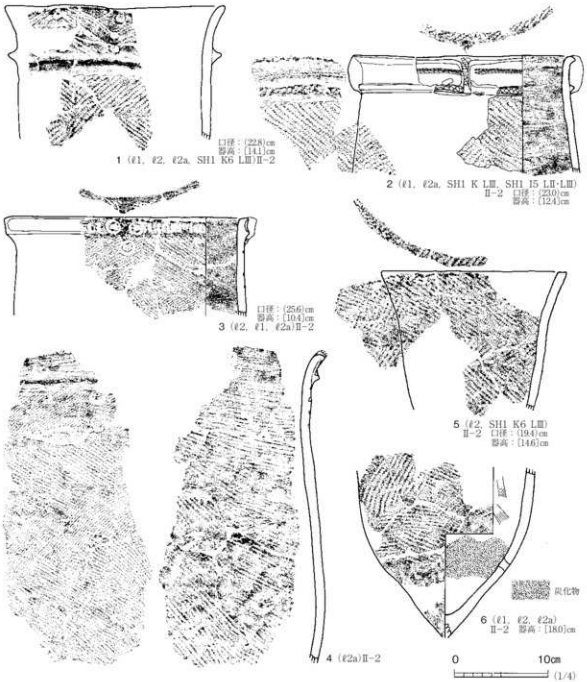


図12　２号竪穴住居跡出土遺物（１）

位の区画を加え，半截竹管による刺突を充填する。縦位区画の両脇および下位に円形竹管刺突を配する。内面は擦痕が残される。４は波状口縁となる。円形刺突間を縄圧痕で結んだ文様を描く。胴部地文は１段Ｌの縄である。内面は条痕が施される。５は地文のみの土器で，２段の縄ＲＬの斜縄文間に条の向きの異なる０段多条の縄文帯を挟み込む。６は尖底部で２段の縄ＬＲの粗雑な羽状縄文が施されている。

図13には復元不可能な土器破片および石器を示した。１は斜位の矢羽状縄圧痕が施され，圧痕間に半截竹管刺突が加えられる。内面口縁部上端には回転縄文が施される。２は口縁部上面，隆帯上

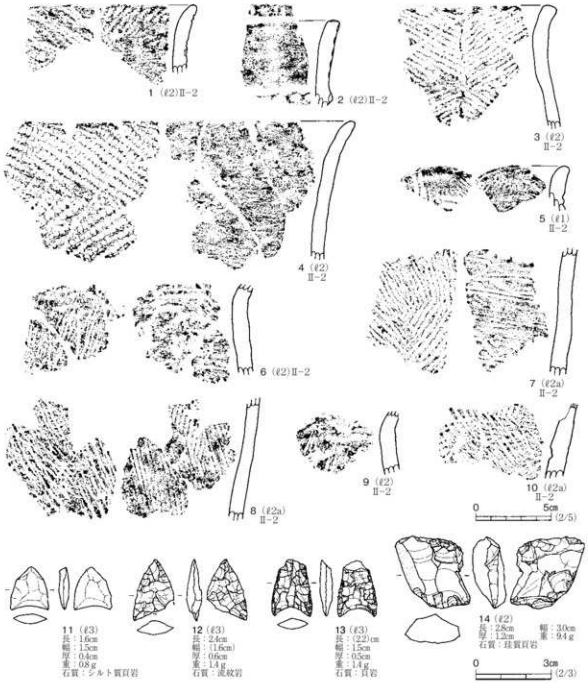


図13　２号竪穴住居跡出土遺物（２）

に竹管が押捺され，口縁部は無地文である。縦位に円形の浅い凹みが５個認められる。３・４は地文に放射状もしくは羽状縄文が施される。５～10は地文に撚糸文が施される。５は波状口縁の波頂部片で格子状の沈線が認められる。口唇部内面には地文が施される。以下の６・９が口縁部直下の破片であるほかはいずれも胴部の破片で，条が交錯したような撚糸文が施される。

11～13は石鏃でいずれも凹基である。11はシルト質頁岩を用いており，風化して表面の剥離は不明瞭である。基部の抉りは浅く，長幅比は小さい。12は流紋岩製で脚部を欠損する。13は頁岩製で尖頭部を欠損する。基部の抉りは深目で，長幅比が大きい。14は楔形石器と考えるもので，剥片の

上下に小型の剥離が集中しツブレも認められる。粗粒の珪質頁岩である。

ま　と　め

２号竪穴住居跡は，埋没途上の谷底の緩斜面の部分に構築された住居跡である。Ⅱ群２類土器が主に出土しており，早期後葉の遺物を包含するＬⅣを掘り込み面として上位に縄文時代前期初頭以降の土器を包含するＬⅢが堆積することから縄文時代早期終末から前期最初頭に構築されたものと考えられる。また，堆積土中に焼土が存在することから埋没途上すなわちＬⅢ堆積時期においても凹みが利用されていたと考えられる。付編に示した放射性炭素年代では，ℓ２ａ出土炭化材が6,130±40yrBPとＬⅢに近い年代を示す。

３号竪穴住居跡　ＳＩ３

遺　　構（図14，写真15・16）

調査区北東部のＪ５Ｇに位置する縄文時代の住居跡である。１号遺物包含層に面した丘陵の南向き急斜面に立地する。東1.5mの同一斜面にＳＩ１・４・５がある。ＳＫ２と切り合い，本遺構の方が古い。検出面はＬＶ・Ⅵ・Ⅹで，炉跡と思われる焼け面を伴った赤味がかった暗褐色土の堆積範囲としてＳＫ２とともに検出した。また，本章第１節の図７で示したように上部はＬⅢおよびＬⅢａによって被覆されていた。

平面形は隅丸方形を基調とし，軸線は東に傾く。斜面下方の南壁は確認できない。平面規模は南北２m，東西は軸線で2.5m，最大で３mを測る。壁高は北壁で最大36cmを測り，50°程度で立ち上がる。床面は起伏を持ちながら南へと下る。堆積土は暗褐色土の単層である。

床面から続く平坦面上に東西1.2m，南北0.9mの大きな焼け面が存在し，地床炉と考える。厚さ７cmが焼土化し，さらに下５cmほどに被熱による硬化が認められる。そのほかには柱穴と思しきピットは検出できなかった。

遺　　物（図14，写真31）

遺物は検出面の炉跡上にて39点の縄文土器片が出土したほか，掘り込み中に縄文土器１点が出土した。図14－１に示したのは，炉跡上堆積土および住居下方の斜面から出土した破片を接合・復元した土器でⅠ群１類に分類される。４単位の山形の大波状口縁で，口縁部が若干屈曲して内湾する器形である。口縁端部上面・文様帯下には竹管による刻みが施される。波頂部下は稜が垂下し，斜方向の半截竹管による平行沈線が充填される。図化した正面では右下がりの斜線であるが，右側に拓本で示したように他所では山形となっている。地文は内外面とも無文である。図14－２は検出中に出土したものでⅡ群２類土器である。外面に交錯する撚糸文，内面に条痕が施される。

ま　と　め

３号竪穴住居跡は丘陵南向きの急斜面に構築された竪穴住居である。出土遺物から早期後葉の茅山下層式期に構築されたものと考えられ，隣接するＳＩ１・４・５と近い時期に構築されたものと考えられる。

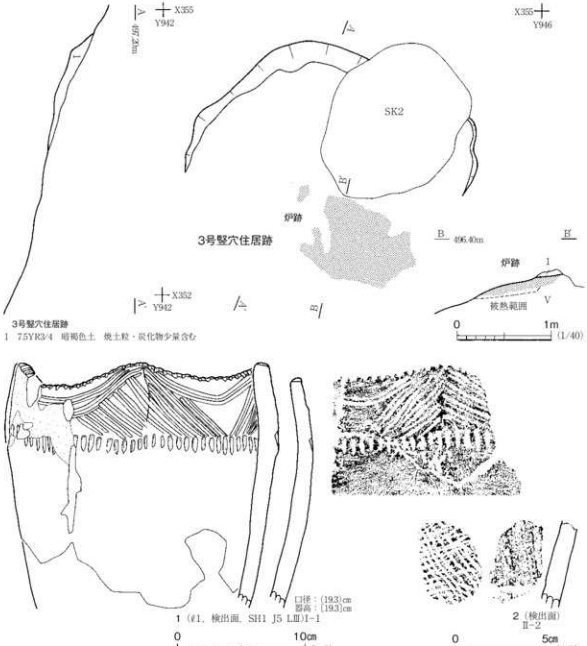


図14　３号竪穴住居跡・出土遺物

５号竪穴住居跡　ＳＩ５

遺　　構（図15，写真17・18・20）

調査区北東部のＪ５Ｇ南東に位置する縄文時代の住居跡である。１号遺物包含層に面した丘陵の南向き急斜面に立地する。西1.5mに同時期のＳＩ３，南４mの谷底にＳＸ１が位置する。ＳＩ１・４と重複しいずれよりも古いと判断している。検出面はＳＩ１床面およびＬＸで暗褐色砂質土の堆積範囲として確認した。

平面形は円形を基調とする。斜面下方の南壁は確認できない。平面規模は南北２m，東西３mで

ある。壁はＳＩ１床面から20cm程度の高低差を持ち，60～70°で立ち上がる。床面は概ね平坦で南西に向かって下る。北からＬＸ・ＬⅣｂが床面となっており，ＬⅣｂはそのＬＸ塊を含む土質から床面整地土として盛られた可能性も考えられる。遺構内堆積土は暗褐色砂質土の単層である。

掘り込み中央に小型の焼け面が２ヶ所確認でき，地床炉と考えている。炉跡北東の床面には花崗岩が置かれ，台石として機能したかと思われる。北東隅の壁に付帯してＰ１とした土坑１基が掘り込まれる。南北70cm，東西55cmの楕円形を呈し，床面からの深さは14cmである。堆積土は住居堆積土と同質である。

遺　　物（図15，写真30・43）

遺物は縄文土器27点・石器４点が出土するほか，床面からは上述した台石が出土している。１は内外面条痕のみが施されるコップ状の器形の土器である。２・３は同一個体破片で，大部分がＳＩ１堆積土中から出土しているが，遺構の新旧から本住居跡に帰属させた。口縁は波状を呈し，口縁部下に緩い稜を持つ。口縁端部上面に竹管側面押捺によって刻みが施される。地文は内外面条痕文で，竹管凸部による下方からの刺突により文様が付けられる。４は地文に縄文が施されている胴部片である。５は床面から出土した花崗岩の台石で，風化しており使用痕跡は観察できない。６は楔形石器で上下に小型の剥離が集中する。赤味を帯びたチャートを用いる。

ま　と　め

５号住居跡は，南斜面に構築された竪穴住居である。主な出土遺物がⅠ群１類に比定されることから早期後葉茅山下層式期に構築されたものと考えられる。また重複の状況から，ＳＩ１の構築とはそれほど離れた時期ではないと考える。ただし，付編に示した出土炭化物の放射性炭素年代は6,170±40～6,200±40とＳＩ２やＬⅢ出土炭化物とほぼ同じ年代を示している。これについては攪乱の見落としによるサンプリングエラーの可能性がある。

６号竪穴住居跡　ＳＩ６

遺　　構（図16，写真19・20）

Ｉ８Ｇ北端に位置する縄文時代の住居跡である。２号遺物包含層の形成された谷の南向き斜面に立地する。ＬⅧ掘削途上においてＬⅡｂ類似土の堆積範囲として確認した。

大半を掘り飛ばしており，平面形は定かではないが，北東隅の屈曲具合からすれば，元は隅丸方形を基調としていた可能性がある。遺存する規模は，東西2.2m，南北0.7mで，壁の高さは北東隅が最大で25cmである。確認できる床面は概ね水平である。堆積土はＬＸ・焼土・炭化物を含む暗褐色土の単層である。

遺　　物（図16，写真32）

出土遺物は，縄文土器65点，石器剥片１点である。主な土器12点を示した。

１～４は地文撚糸文の口縁部片である。口縁部は外反するものの厚手である。内面上端にも撚糸文が施され，以下は無文もしくは擦痕が認められる。５は地文縄文のみ施文され，内面には擦痕が

図15　５号竪穴住居跡・出土遺物

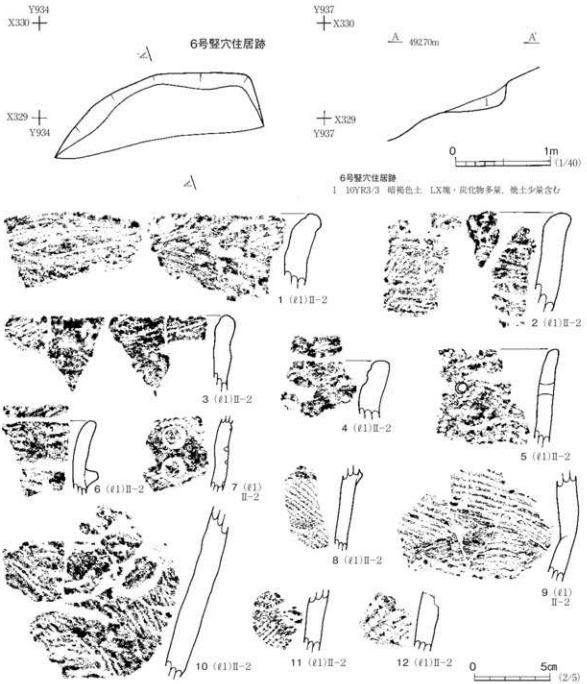


図16　６号竪穴住居跡・出土遺物

残される。６～８は口縁部を隆帯で区画するものである。６は口縁部が文様帯とならず，１段Ｌの縄が回転施文される。７は円形刺突を矢羽状縄圧痕でつなぐ。８は胴部片でＲＬ縄文が施される。以下９～11は撚糸文が施される胴部片，12はＲＬ縄文が施される胴部片である。

ま　と　め

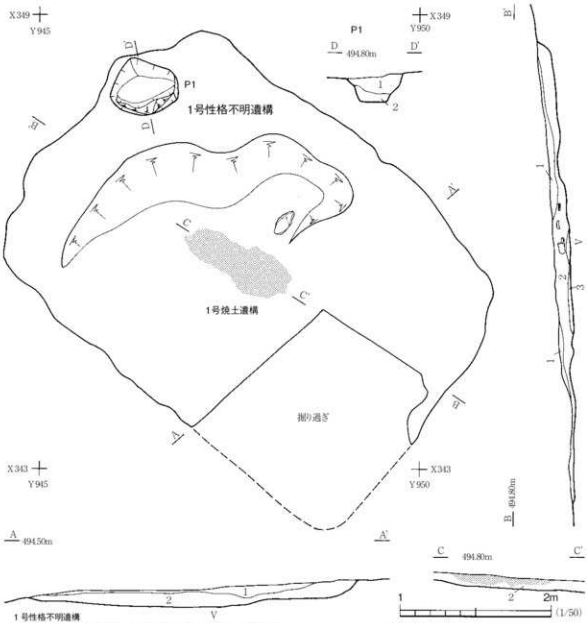
６号竪穴住居跡は，出土遺物がⅡ群土器であることから，早期終末～前期初頭に構築されたものと考えている。ⅠⅧの堆積により谷斜面の傾斜が若干緩やかとなった状況で構築されたと考えられ，同時期のＳＩ２と同様の形態の住居跡の北東隅のみが確認できたものとも考えられる。

第４節　性格不明遺構

１号性格不明遺構　ＳＸ１

遺　　構（図17・18，写真21～25）

調査区北東部のＪ６Ｇ東半からＫ６Ｇにかけて位置する。１号遺物包含層の形成される谷の底に立地する，ＬＸ由来土が主となる整地層のような土の堆積範囲を性格不明遺構とした。北2.5mの斜面上にＳＩ１・４・５が位置し，本遺構の上位堆積土はＬⅣおよびＳＩ２堆積土となる。検出面



１号性格不明遺構
1　10Y R2/3　黒褐色砂質土　花崗岩片多量，焼土粒少量，炭化物含む
2　10Y R7/4　にぶい黄橙色土　ＬＸ主体，暗褐色土塊少量，焼土粒・炭化物粒微量含む
3　10Y R2/1　黒色土　炭化物多量含む

１号性格不明遺構Ｐ１
1　10Y R2/2　黒褐色土　焼土粒・炭化物粒少量含む
2　10Y R3/4　暗褐色土　焼土粒微量含む

図17　１号性格不明遺構（１）

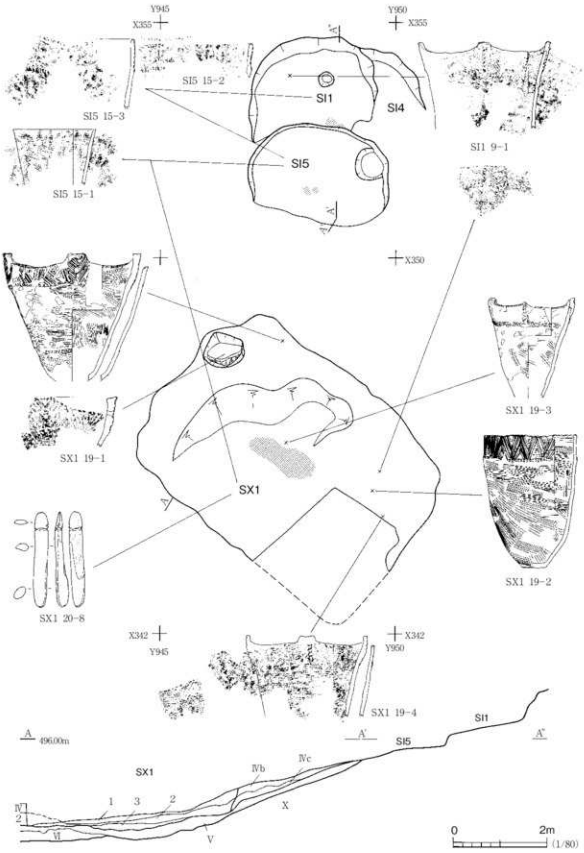


図18　１号性格不明遺構（２）

はＬＶ上面で，１号遺物包含層の最下層にあたる。

検出の過程を詳述すると，周辺では図18に示したようにＬⅣの掘削時から遺物が濃密に出土しており，さらにほぼ１個体の土器３点が整地層状のＬＸ主体土上面で検出された。これにより掘り下げを止め周辺を精査したところ，この土の堆積範囲が長方形を呈し，中央部に焼け面が伴うことが確認され，人為的に構築された可能性を考えて，性格不明遺構として調査することにした。

遺構範囲は長軸方向が谷筋と一致する長方形を呈する。規模は長軸6.1m，短軸4.4mである。堆積土は３層に分かれる。ℓ１はＬⅣに類似する砂質土で遺物を濃密に含んでいる。ℓ２は遺構範囲としたＬＸに由来する土，ℓ３はℓ２下位に認められる旧表土と思しきしまりのない黒色土である。

遺構面と認識したℓ２上面は，整地土にしては平坦ではなく，大小の起伏を持ちながら南東方向へ下っている。ℓ２上面では，１号焼土遺構（ＳＧ１）とした焼け面１基，Ｐ１とした土坑１基が検出されている。

ＳＧ１は遺構範囲の中央に位置し，遺構範囲の長軸方向に沿って細長い形状の焼け面である。最大長1.5m，最大幅0.6mで，厚さ10cmが焼土化する。Ｐ１は遺構範囲の北東隅に位置する不整な形態の土坑である。上端の平面形は，南に角のない隅丸方形を基調とする不整形である。対して底面は東西方向に細長い木葉形を呈し，上端の東西隅を結ぶような形になる。東西方向を長軸線とする上端の規模は長さ88cm，幅78cmである。深さは最大41cmを測る。堆積土は上下の２層に分かれ自然堆積であろう。用途は不明である。

本遺構の形成過程を探るために北側斜面からの断ち割りを行った。この土層断面である図18のＡ－Ａ″で観察できる堆積状況では，遺構の地山となるＬＶは斜面側に寄って堆積しており，当時の流路が北側斜面裾に振れていたと推測される。ℓ２は北側斜面ではＬＶ上にＬⅣｃが土手状の段を成し，その段を埋めるように，南側ではＬＶが谷底を形成して緩やかに立ち上がっており，それに沿うように堆積している。ℓ３は谷底でしか確認できない。

この堆積状況から，水流によるＬⅣｃの部分的消失→（ＳＩ５構築によるＬⅣｂの堆積）→ＳＩ１・４・５構築による谷底凹みへの表土・地山の投棄＝ℓ２・３の形成→斜面上位からの遺物を含んだ砂質土の流入＝ℓ１の形成≒（ＬⅣの形成）という過程を推測できる。

調査の最後には，ＬＶ面においても施設の有無を確認したが，ピット・焼け面ともになかった。

遺　　物（図19・20，写真31・33・43）

出土遺物は，縄文土器・石器である。各出土点数はℓ１から95点・７点，ℓ２から28点・13点，Ｐ１から３点・０点である。出土土器はいずれもＩ群に分類される。

図19には略完形の個体を示した。いずれも内外面条痕で，口縁部下あるいは胴部中位に低い隆帯によって弱い稜を形成する器形である。４単位の大波状口縁となるものについては波頂部下にも稜が垂下する。文様はすべて半截竹管による平行沈線で，口縁端部や稜上には同一工具による刺突や側縁押捺が加えられる。このうち１・２・４はℓ２の上面から同一個体が一括状態で出土したものである。１は波状口縁で，口縁端部は平坦に仕上げられる。波頂部下の稜には指頭圧痕状の凹みも

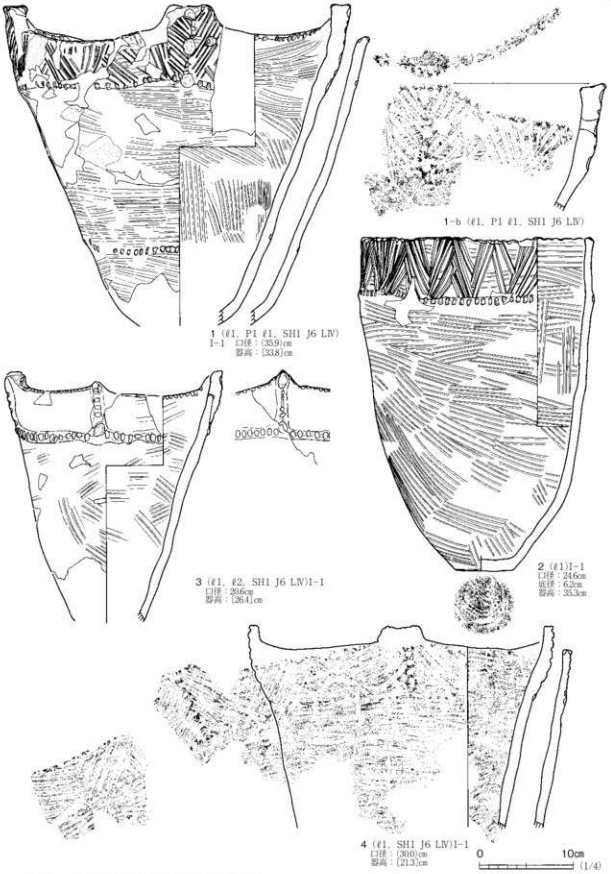


図19　１号性格不明遺構出土遺物（１）

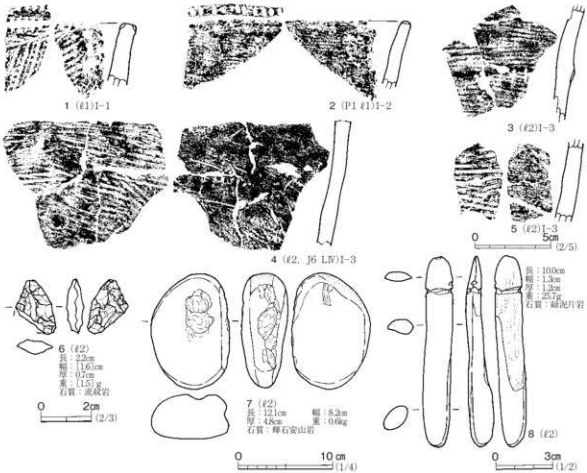


図20　１号性格不明遺構出土遺物（２）

加える。文様は鋸歯状文である。なお，同図右１－ｂに示したＰ１出土の同一個体片では波頂部上端の平坦面上に爪形の連続刺突が認められる。２は平縁で，若干丸みを帯びた口縁端部に刺突を加え小波状にする。底部は平底である。文様は山形文が描かれる。４は波状口縁で口縁端部の内外角には交互に刺突を加える。文様は鋸歯状文である。３は１号焼土遺構北側のℓ２中に破片が散乱して出土した。波状口縁で，口端部の内外角，稜上には竹管が押捺される。波頂部下の稜の上下には指頭圧痕状の凹みも加えられる。文様は施されない。

図20には主な土器片および石器を示した。１～５は土器片で図19に示したものと同様の特徴を持つ。６～８は石器である。６は流紋岩の石鏃で，脚部を欠損する。７は凹石で平坦面および側面に凹みを持つ。上端を除いて研磨によるつぶれが認められる。灰色を呈する輝石安山岩である。８は石棒かと思われる。一端が剥離した棒状礫を研磨して鑿状に仕上げ，刻みを一巡させる。そのため素材礫と頭部の平坦面がねじれた格好になっている。緑泥片岩製である。

ま　と　め

１号性格不明遺構は，地山ＬＸ由来土の堆積範囲である。その時期は，出土土器の主体がＩ群土器であることや検出層位が遺物包含層最下位であることから早期後葉茅山下層式期と考えられる。柱穴の欠如からこれだけの範囲に架ける上屋の存在が想定できず，床面の起伏の多さも合わせれ

ば，本遺構の性格を住居構築のための整地土と捉えることは疑問である。遺物出土状況や堆積状況，斜面上位に同時期の住居跡があることなどの状況証拠から住居構築時の廃土や生活時の遺物を投棄したことにより形成されたと考えられる。ただ，焼土遺構は屋外炉として機能した可能性を想起させ，この空間が同時期の住居跡に付帯した屋外作業に利用された可能性は大いにあるだろう。

なお，出土した炭化物の放射性炭素年代は6,980±40～7,080±40と１号遺物包含層ＬⅣとほぼ同年代を示す。

第５節　土　　坑

１号土坑　ＳＫ１（図21，写真26）

調査区北西端のＨ・Ｉ５Ｇに位置する。南東に伸びる谷底の南寄りに立地する。検出面はＬⅥで，黒褐色土の堆積範囲として確認した。北西端は調査区外へ伸びるが，調査区壁が２ｍを超すこと，上部に工事用の重機の往来があることなどから安全面を考慮して調査区内における調査に止めた。

平面形は長方形を呈する。長軸は西に傾き，谷筋の方向と一致する。検出面部分での壁はほぼ直立し，南東はオーバーハングする。調査区壁にかけた土層断面では，掘り込み面はＬＶであり，上部が開く漏斗状を呈しているのが確認できる。平面規模は最大幅が1.35ｍで，検出面での長方形プランでは0.6ｍである。長軸は1.15ｍ程度が調査区内で確認できる。検出面からの深さは35㎝程度，断面で確認できる掘り込み面からの深さは1.05ｍである。

堆積土は４層に分けられ，ℓ１はＬⅣ，ℓ２はＬⅣｃに似る。ℓ３は壁面崩落と思われるＬＸ塊を含み，ℓ４は旧表土から落下したと思われるしまりのない黒色土である。自然堆積であろう。また，出土遺物はない。

形態からは落し穴と考えられ，遺物は出土していないものの掘り込み面がＬＶであることから縄文時代早期後葉以前に構築されたものと判断できる。

２号土坑　ＳＫ２（図21，写真26・33）

調査区北部のＪ５Ｇに位置し，谷へと下る南向き急斜面に立地する。検出面はＬＸでＳＩ３とともに検出され，これよりも新しい。

平面形は楕円形で，長軸方向は東へ傾く。周壁はほぼ垂直に近い角度で立ち上がるが，南西壁のみ傾斜が緩く，不整な段が形成されている。最大長は1.72ｍで，最大幅は1.42ｍ，深さは80㎝である。堆積土は７層に分けられ，斜面上位からの土砂流入によって埋没したと判断できる。

遺物はℓ４から縄文土器片が１点出土している。図21－１に示したⅠ群土器の胴部で，ＳＩ３堆積土からの流入が考えられる。

用途は不明であるが，規模・形態からは貯蔵穴の可能性もある。構築時期は，ＳＩ３よりも新しいことから縄文時代早期後葉以降と考えられる。

３号土坑　ＳＫ３（図21，写真26・27）

調査区北部のＪ６Ｇ中央付近に位置する。検出面はＬⅣであり，１号遺物包含層による埋没途上の谷底緩斜面に立地する。花崗岩礫を伴う黒褐色土の堆積範囲として確認した。検出面を同じくするＳＩ２は北東５ｍに位置する。

平面形は隅丸方形で，長軸は東に傾く。長軸長は94cm，短軸幅は81cm，深さは20cmである。堆積土は黒褐色土の単層でＬⅢを主体とする。中央部に礫３個が重ねられ，南東隅の壁上端にも礫１個が配される。遺物はこれら以外にはない。

遺構の性格は，礫が配される状況から墓坑の可能性がある。構築時期は検出面がＬⅣであることから早期末葉以降と考えられる。なお，堆積土から出土した炭化材の放射性炭素年代は，6,140±40yrBPと出ており，ＳＩ２，１号遺物包含層ＬⅢ出土炭化物と近い年代である。

４号土坑　ＳＫ４（図21，写真27・33）

調査区北部Ｊ６Ｇ南端部に位置する。南東に伸びる谷底の南寄りに位置する。検出面はＬⅥおよびＬＸで，黒～暗褐色土の堆積範囲として検出した。

平面形は長方形を呈し，長軸は谷筋方向に一致する。壁は概ね直立し，中位から上位に若干膨らみを持つ。平面規模は長軸1.81m，短軸0.97mで，深さは94cmである。堆積土は８層に分けられる。中部から下部は概ねℓ５・６に認められる黒色土を基調とし，壁面崩落によるＬＸの混合度合によって分層している。ℓ２についてはＬⅣに類似する土で埋没している。この状況から自然堆積と考えている。

遺物は，縄文土器片が検出面において２点，ℓ６から１点出土している。図21－２は半截竹管による斜格子が描かれ，内面には条痕が残される。Ⅰ群１類に比定される。

遺構の性格は，形態・規模から落し穴と考えられる。構築時期は，遺物から早期後葉以前と考えられ，立地・検出面・長軸方向，堆積土の特徴などの一致からＳＫ１と近い時期と考えられる。

５号土坑　ＳＫ５（図21，写真27）

調査区南部のＨ８・９Ｇに位置し，２号遺物包含層の形成される南東向きの緩斜面に立地する。検出面はＬＸで，黒色土の堆積範囲として確認した。

平面形は楕円形で，長軸は西に傾き斜面の方向に一致する。周壁は膨らみを持って立ち上がる。特に西壁ではＬＸに含まれる礫を引き抜いており，凹凸が著しい。平面規模は長軸1.18m，短軸0.73mで，深さは33cmである。堆積土は花崗岩を含む黒色土の単層である。

遺物は縄文土器細片２点が出土する。撚糸文の文様を持つ繊維を含まない土器であるが，図示し得ない。

遺構の性格は不明で，構築時期は出土遺物から縄文時代後期以降と考えられる。

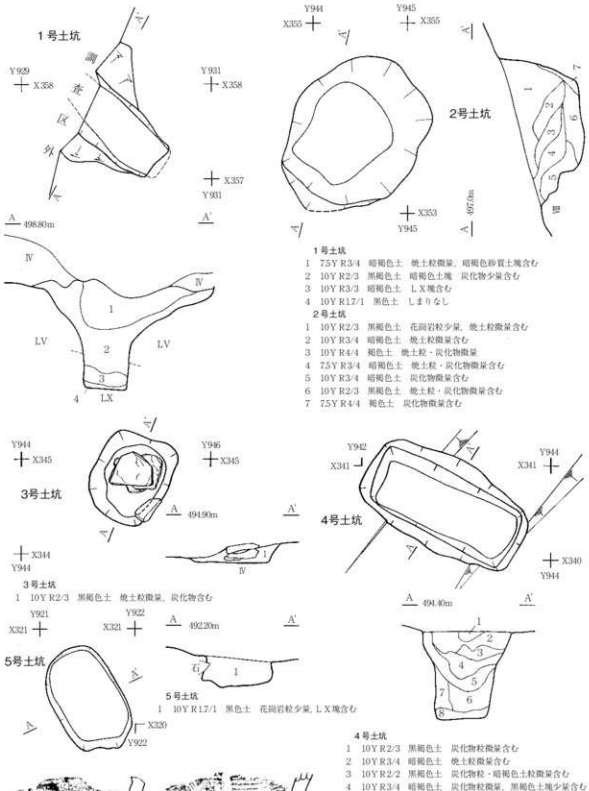


図21　１～５号土坑・出土遺物

第6節　遺物包含層

１号遺物包含層　ＳＨ１

調査区北部の谷に形成される遺物包含層である。Ｉ４～６・Ｊ５～７・Ｋ６の各グリッドに跨り，調査区内の300㎡ほどの範囲に広がる。遺物を包含するのはＬⅡ～Ⅳ層で，ＬⅡからの出土遺物は層厚の薄さからか少ない傾向にある。各層の出土点数は表３に示すとおりである。遺物の分布状況は，ＬⅡ・ⅢにおいてはＩ５Ｇ東半からＪ６Ｇの谷底部において多く認められ，ＬⅣにおいてはほぼＪ６Ｇに限られる。層位ごとの出土傾向としては，ＬⅢからは早期中葉～前期中葉の土器が出土し，早期末葉～前期初頭が主となり，次いで早期後葉，前期前葉の順となる。ＬⅣについては，早期後葉が大部分を占め，Ⅱ群２類とする縄文（撚糸文）条痕文土器も僅かに認められる。

各層の堆積時期は，ＬⅢが遺物の時期，および沼沢パミスを含むＬⅡの下位にあり，ＳＩ２の堆積土を被覆する状況から，概ね縄文時代前期初頭～後葉と考えられる。ＬⅣはＳＩ２が掘り込まれＳＸ１を被覆している状況から早期後葉～末葉と考えている。なお，各層位から出土した炭化物の放射性炭素年代は，ＬⅢが6,130±40～6,180±40yrBPとＳＩ２，ＳＨ２ＬⅡｂ出土炭化物と近い年代値，ＬⅣが7,050±40～7,200±40とＳＸ１出土炭化物に近い年代値を示す。各層位とも主として出土する時期の遺物に伴って炭化物が入り込んだものと考えられる。

各土器については，層位別に示す。

ＬⅢ出土土器（図22～25，写真34～37）

Ⅰ群土器（図22－１～11）条痕文系土器である。

１類：１～５がこれにあたる。ＳＩ１およびＳＸ１出土土器と同類で，内外に貝殻条痕が認められる。口縁部下で稜を成しながらも屈曲することなく開き，波頂部下には３のように隆帯もしくは稜が垂下する。口縁上端は平坦に仕上げられ，１・２のように上面もしくは内外角に刺突が加えられる。文様は主に半截竹管の平行沈線や刺突によるもので，集合沈線による鋸歯・山形状の文様を描く。焼成はおおむね良好であるが，胎土に砂粒・繊維を含み脆い。

２類：６～10である。１類に比して口縁部が外反し，薄手である。口縁上端に刻みもしくは半截竹管刺突が加えられる。文様は平行沈線によるもので沈線は集合化せず，口縁直下に１条横位に巡らせた下位に，６・７のように斜位，８～10のように横位に描かれている。８～10は同一個体片と思われ，同群の他の土器に比して胎土が緻密で砂粒を含まないなど異質である。内面条痕も認められない。

３類：11に底部を示した。径の小さい平底であり，外面には条痕は認められない。

Ⅱ群土器（図22－12～図23，図25－13・14）早期末葉から前期初頭の土器である。

１類：図22－12である。強く外反する口縁部の上端が平坦に作り出され，回転縄文が施される。外面は地文ＲＬ縄文上に撚りの異なる２段の縄を並列した圧痕が縦位，横位に施される。内面は条

図22　１号遺物包含層出土土器（１）ＬⅢ

痕文である。

２類：図22－13～図23－14・20に示した。胎土に砂粒・繊維を多量に混和する。以下の３種に分けられる。

ａ種：図22－13～20に示した，地文撚糸文のものである。口縁部は強く外反し，13・15のように上端が平坦に作出されるものと14のように口唇状に飛び出すものがある。底部は確認できないが，胴部下半資料の17から尖底もしくは丸底であろう。撚糸文は斜回転によって施文され，多くは交錯する。15については口縁直下に横位の条痕が施され，その上に撚糸文を重ねる。沈線施文は13・16がある程度で少なく，13に格子状，16は孤状の文様が認められる。内面は13～16・19が条痕，17・20が擦痕，18は無文である。

ｂ種：図23－１に示した，縄の側面圧痕によって文様を描くものである。本種はＳＩ２およびＳＨ２に多数認められるが，１号遺物包含層からの出土は少ない。口縁部は強く外反し，内面上端に回転縄文を加える。文様は撚りの異なる１段の縄の圧痕を並列させ，これを斜方向に施し，間に半截竹管凸部による刺突を沿わせる。内面は擦痕が残る。

ｃ種：図23－２～14・20に示した，口縁直下より地文縄文が施されるもの，および地文縄文の胴部である。口縁部は強く外反し，端部が２～４の尖頭状のもの，５の平坦に整えられるもの，６の口唇状に飛び出すものがある。外面は斜縄文のほかに３・５・６・13・14の羽状縄文，11のような放射状縄文も認められる。４は無文である。内面は９・13が条痕，10・20が擦痕で，他はナデのみの無文となる。なお，５には穿孔途上の補修孔が認められる。

３類：図23－15～19がこれにあたる。整った非結束羽状縄文が施されるもので，内面はミガキにより平滑である。口縁部文様帯を有するものはなかった。15には隆帯もしくは粘土積み上げの端部にヘラによる刻みを施している。

４類：図25－13・14に底部２点を示した。尖底で13は無文，14は斜縄文が施される。内面は無文で，13の下端には炭化物の付着が認められる。

Ⅲ群土器（図24・図25－１～11・15～20）前期の土器である。

１類：図24－１～図25－10がこれにあたる。いずれも文様は半截竹管凹部による断面蒲鉾状の平行沈線によって描く。図24－１は４単位の大波状口縁を呈し，波頂部には縦位の隆帯が貼り付けられる。口縁直下は無文となり，文様は平行沈線による区画線と波状文が描かれる。２は平縁で口縁部区画が２条引かれる。図24－３・４は同一個体の可能性がある資料で大波状口縁から器体中位で屈曲する器形を成すと思われる。３は口縁直下に条線帯と相互刺突文を持ち，下位に重層ループ文が施される。４は屈曲直上の資料で，上位に重層ループ文を施し，屈曲直上は連続する菱形文を描く。菱形文内の地文原体は組紐である。

図25－１～10には器形の分からない破片を示した。１・２は口縁部条線帯下に末端環付の原体による縄文が施される。３は大形の菱形文を描き，地文に格子状の付加条縄文が施される。４は屈曲部に沈線が一条引かれる。５～８は地文縄文中に重層ループ文帯を挟む。９は末端環付の縄によっ

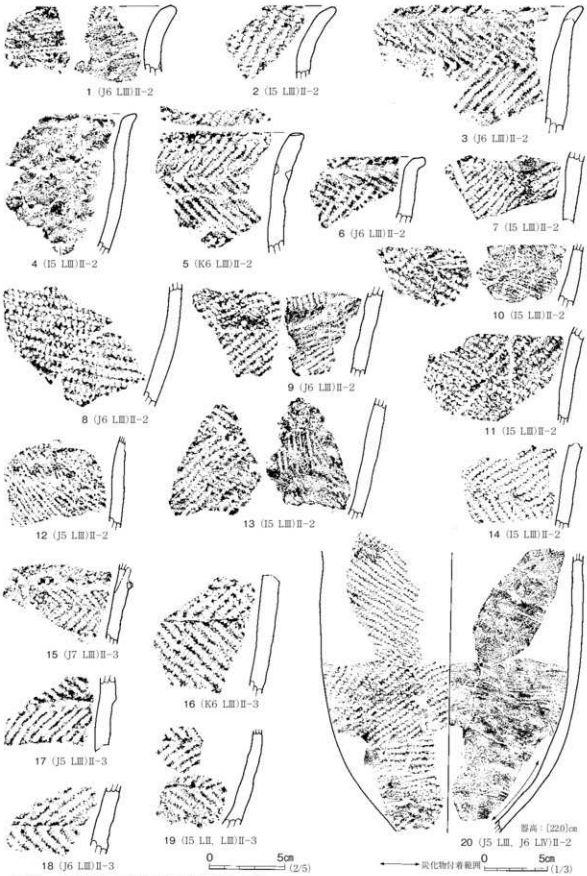


図23　1号遺物包含層出土土器（2）LⅢ

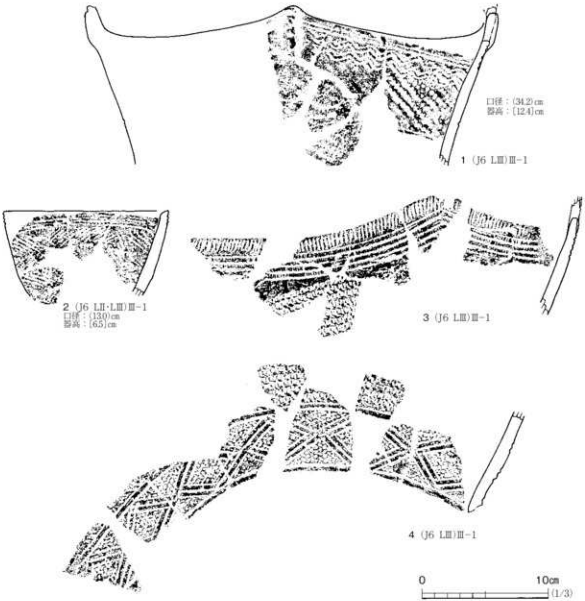


図24　１号遺物包含層出土土器（３）ＬⅢ

て菱形状の縄文を施す。10は２指頭幅ほどの短い原体を用いる。15～20は胎土・器厚等から同時期の底部と思われる。

２類：図25－11に示した。半裁竹管による重層波状文を描く。大木２ａ式かと思われる。

Ⅳ群土器（図25－12）上記した時期以外のものである。

１類：図25－12に示した，田戸下層式が１点出土している。貝殻腹縁を用いた貝殻沈線を斜位に施し，その下位に沈線を描く。

ＬⅣ出土土器（図26，写真38）

Ⅰ群土器（図26－１～19）

１類：図26－１～12に示した。無文である２を除いて内外とも条痕文である。１は４単位の大波状口縁で，無段の器形である。口縁部上端を平坦に作り出し，波頂部下に稜が垂下する。文様は口

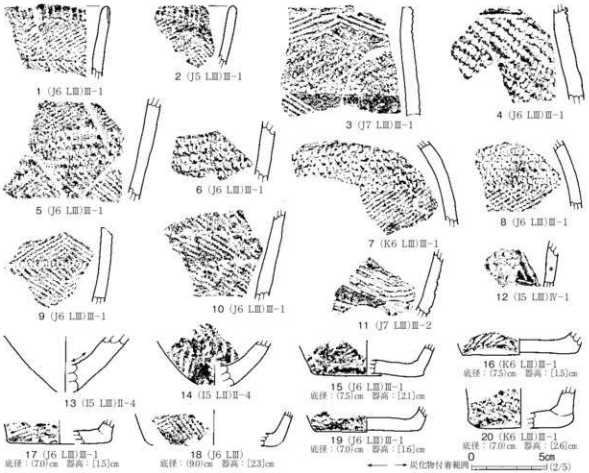


図25　１号遺物包含層出土土器（４）ＬⅢ

縁部内外角と稜周囲のヘラ状工具による刻みのみである。条痕は同群の他の土器に比して細い。

２は平縁で無段のコップ状の器形である。口縁上端に刻みが施されるのみで，文様は描かれない。３は口縁部波状であるのか歪んでいるだけかは判別が付けられない。４以下には破片を示した。大きくは，ＳＩ１およびＳＸ１出土土器と同様の器形・文様である。４が半截竹管凸部による単沈線で斜格子を描く以外は，鋸歯状もしくは山形文を描く。６は波頂部下の稜に指頭の押捺を加えたものであろう。口縁部である４・５や７～12の口縁部下位の破片からも無段で稜を成すだけであるのが分かる。稜に施される刺突は，４が半裁竹管凸部，７がささくれた竹管，９が貝殻腹縁，10がヘラであるほかは，文様と同工具の横方向の刺突である。

２類：図26－13に示したもので，１類より薄手で，口縁部の幅が狭い。稜には刻みや刺突は施されていない。地文条痕のみで，丸みを帯びた口縁の上端には，矢羽状の刻みが施されている。

３類：図26－14～19に示した。14～16は胴部片で内外に条痕を施す。17～19は平底で，18・19は上げ底状になる。17は胴部下端のみ，18は底部，19は底部内面に条痕が認められる。

Ⅱ群土器（図26－20～24）

２類ａ種：図26－21に示した，胴部下半の資料である。外面に撚糸文が施され，内面下端には炭化物の付着が認められる。

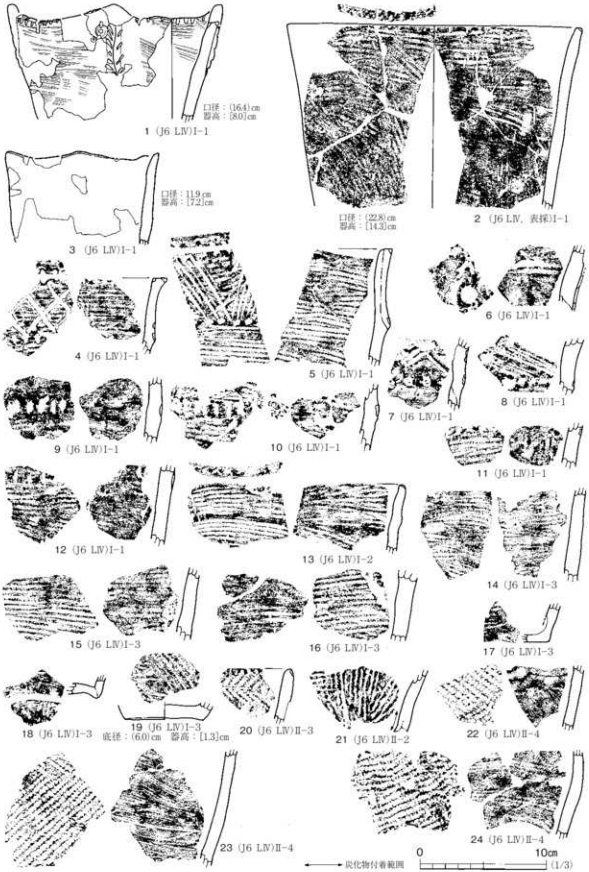


図26　1号遺物包含層出土土器（5）LⅣ

３類：図26－20に示した，口縁部片である。口縁直下にヘラ状工具による刻みを付し，以下に横位に整った羽状縄文を施している。

４類：図26－22～24に示した，縄文施文の胴部片である。いずれの土器も内面には擦痕が認められる。

石　　器（図27，写真44・45）

石器は表３に示したように119点出土した。表４のとおりＬⅢには石槍・スクレイパーなども少数ながら認められる一方，ＬⅣ出土の定形石器は石鏃・磨石類に限られ，剥片が大半を占める。

石　鏃（図27－１～７）

未成品も含めてＬⅢから５点，ＬⅣから８点出土している。元の形状の分かる完成品のみを図示した。いずれも無茎凹基の石鏃である。１～３はＬⅢ出土のものである。１・３のような長幅比が大きく基部の抉りの浅いものと，２のような小型で抉りの深い形態の２種がある。４～７はＬⅣ出土のものである。４～６に示したように流紋岩が多用される。基部の抉りが浅く，長幅比の小さい形態である。７は玉髄製の小型剥片を素材としており，周縁に若干の調整を加えたのみである。

石　槍（図27－９）

ＬⅡから１点出土している。珪質頁岩製である。両面調整により柳葉形に整形される。尖頭部から側縁上半は細かな交互剥離，下半から基部は幅広の大きな剥離によって整形されている。

スクレイパー（図27－８）

ＬⅢから１点のみ出土している。折断された剥片の一側縁に両面からの剥離が集中しており，この部分を刃部とする削器と考えている。石質は赤みを帯びたチャートである。

磨製石斧（図27－10・11）

ＬⅢから２点出土している。いずれも部分破片で，角閃石の斑晶のある石材を用いている。10は断面楕円形となる器体中央部の破片と思われる。11は断面方形を呈する基部で，敲打調整の痕跡が残存している。

凹石・磨石（図27－12～16）

ＬⅢ・ＬⅣから３点ずつ出土している。完形品のみを示した。

12・13はＬⅢ出土のものである。12は正面が縦方向の凸面，裏面が横方向の凸面の，ざらついた磨面となる。側縁は敲打痕が認められる。正面は全面研磨に供され，中央に敲打による凹みが形成される。裏面は頂部のみ研磨され横断面が台形を成す。赤褐色を呈する安山岩である。13は正面が斜めの凸面で傾斜部が滑らか，裏面は平坦面となり，正面に比してざらつく。側縁に敲打痕が見られる。堅緻な花崗岩を用いる。

14～16はＬⅣ出土のものである。14は円形で表裏の中央部に深い凹みが形成され，凹み周囲にざらついた磨面が認められる。赤みを帯びた安山岩を用いる。15は表裏とも平坦で滑らかな磨面が認められる。16は正面の平坦面だけに，礫面に比べて若干滑らかとなった磨痕が残される。これらの石材は灰～青灰色の輝石安山岩である。

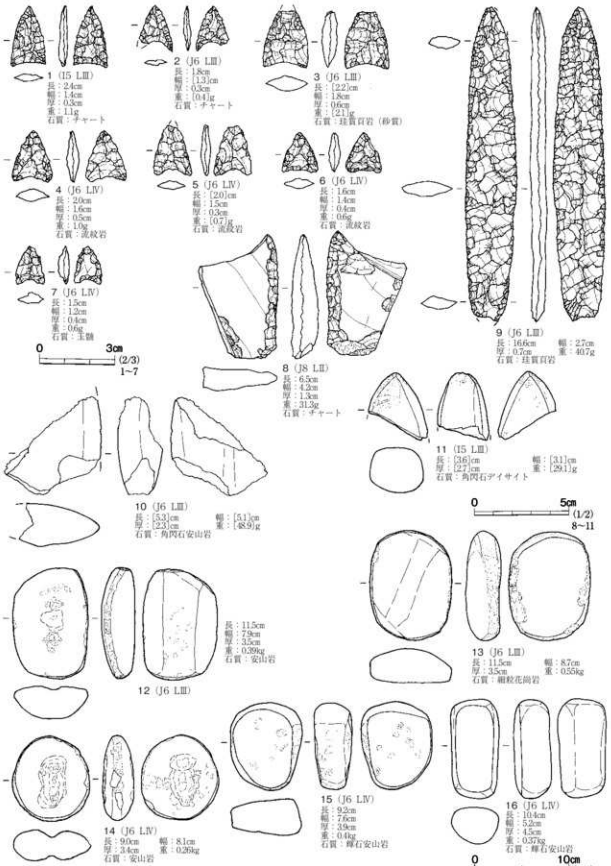


図27　1号遺物包含層出土石器

２号遺物包含層　ＳＨ２

調査区南部の丘陵裾部緩斜面に形成される遺物包含層である。Ｇ８・９，Ｈ８・９，Ｉ８・９，Ｊ８の各グリッドに跨り，調査区内の400㎡ほどの範囲に広がる。遺物を包含するのはＬⅡおよびＬⅡｂで，ＬⅡの堆積の厚い南東ほどＬⅡにおける出土量は多い。

遺物の分布状況は，表３に示すとおりで，西半での出土量は少なく，Ｉ８ＧからＩ９Ｇ北半までの範囲に集中する。時期的には，縄文時代早期後葉～前期・晩期の遺物を包含する。Ⅱ群土器の出土量が図抜けており，Ⅰ群土器がこれに次ぐ。層位ごとの傾向としてはＬⅡｂに早期～前期，ＬⅡにはこれらに加えて晩期までの遺物を含む。

遺物の出土傾向からＬⅡｂは前期最初頭からの堆積であり，上部に沼沢パミスを含むことからその下限は前期末葉と考えられる。同様に沼沢パミスを含むＬⅡについては，これ以降の時期の土器も含んでいることからＬⅡｂ上部が表土化した層と考えられる。

土　　器（図28～32，写真39～42）

Ⅰ群土器（図28－１～11）

１類：図28－１～８に示した。基本的な特徴は北部の１号遺物包含層およびその周囲の遺構群から出土したものと変わりはない。１～６に見られるように，集合沈線の充填文様を描き，波頂部および口縁部の下端は弱い稜をなし，刺突が加えられる。１の口縁上端部には矢羽状の刻み，２の縦位の集合沈線のように１号遺物包含層にあまり見られない文様もある。

３類：図28－９～11に示した。地文条痕文のみの胴部から底部片である。９は内面だけに条痕が認められ，10の条痕の条は他に比して細い。11は平底の底部である。

Ⅱ群土器（図28－12～図32－９）

１類：図28－12・13，図31－１に示した。12は外反する口縁部片で縦位の沈線が垂下する。口縁端部には回転縄文が施される。13は胴部中位の弱いくびれ部の破片である。くびれを境に地文縄文が羽状となり，その境に撚りの異なる２段の縄を並列した圧痕が横位に施される。図31－１は棒状工具の刺突によって小波状口縁となる。直線的に外傾し，外面にはＲＬ縄文，内面には条痕が残される。２類の可能性もあるが，胎土への繊維の混和量が２類ほど多くなく，硬質な印象を受けるため本類にした。

２類：図28－14～図30－18・図31－２～17に示した，前期最初頭に位置づけられるものである。胎土に砂粒・繊維を多量に混和し軟質である。１号遺物包含層同様３種に分けた。

ａ種：図28－14～図29－14がこれにあたる。地文撚糸文の土器である。内面は擦痕もしくは無文であるものが多い。図28－14～19に示した口縁部は強く外反し，内面上端に撚糸文が施される。18のように波状もしくは注口状に張り出すものも認められる。図28－20～24のように格子に孤線を加えた沈線文様が描かれるものは１号遺物包含層に比して多く存在する。これらの撚糸文は斜位に施され交錯することが少ない。図28－25～図29－13に示した沈線の確認できない胴部片では，斜位に交

図28　2号遺物包含層出土土器（1）

錯した撚糸文を施すものが多い。図29－13は口縁部直下からの破片と思われるが，上端に原体である単軸絡条体の圧痕が横位に残されている。図29－９は尖底部へとつながる下半の破片である。

また，ＳＨ１とは異なり，図29－14のように隆帯を持つものも存在する。胴部の中位に最大径のある器形をなすと思われ，口縁部は口唇状に飛び出し，平坦な上端にも撚糸文が施される。隆帯上には横位，口縁部は縦位，胴部は斜位に交錯した撚糸文を施し，内面には擦痕が残される。

ｂ種：図30－１～14がこれにあたる。外に張り出す口縁端部と隆帯によって口縁部を区画するもので，多くは縄の側面圧痕によって文様を描く。胴部地文は縄文である。縄圧痕は撚りの異なる１段の縄を並列して押捺して節が矢羽状になる。本種は１号遺物包含層に比して多く確認できる。

１～５は同一個体と思われ，口縁部は強く外反し，隆帯は剥落している。８は平縁で，肥厚して上端が平坦になる口縁部に突起が付けられる。口縁の上端と内角には回転縄文が施される。文様は渦巻かもしれない。10もこれと同様の口縁部形態で内面には条痕が残される。11・12・14は同一個体と思われる。11に示した口縁は口唇状に外反し，上端および内面に回転縄文が施される。12には円形刺突も認められる。14はこれらの底部と思われる。丸底の先が突起状に飛び出し，この突起の周囲に口縁と同様の縄圧痕が施されている。13は図12－３に示したＳＩ２出土土器と同一個体である。６・７・９は隆帯部の破片で，６は平坦な隆帯上に回転縄文が施される。７・９は断面三角形の隆帯で，９の左端には縄圧痕が確認できる。

ｃ種：図30－15～18・図31－２～17に示した，口縁部から地文縄文が施文されるものおよび縄文のみの胴部である。口縁部の形態は，直線的に外傾するものと外反するものがある。直線的なものは口縁端部尖頭状のもの（図30－15・図31－５）と同じく角頭状（図31－２・３）の２種にさらに細分できる。前者は内面無文で，後者は口縁上面に回転縄文が施され，内面には浅い条痕が残される。外反するものには，円形刺突を伴う外反度合が弱いもの（図30－16・17）と強く外反するもの（図31－４・６）がある。前者は口縁端部に回転縄文が施され，内面は16が擦痕，17が浅い条痕が残される。図30－18は16の同一個体の胴部片と思われる。後者は張り出した内面上端に回転縄文が施され，６はその下位に条痕が残される。図31－７以降は胴部片を示した。多くは羽状もしくは放射状の縄文が外面に施される。ただ，17の右下端には縄文施文前に施された条痕が残されている。13はその同一個体片である。内面は７・10・13・16・17が条痕，９・11・14が擦痕，他は無文である。

３類：図32－１～９に示した，いわゆる花積下層式に分類できるものである。胴部地文は整った非結束羽状縄文で，内面はミガキを加えて平滑である。１は山形の波状口縁をなす。肥厚した口縁端部と隆帯上にはヘラ状工具による刻みが施され，１段Ｌの縄圧痕による横位に連結される渦巻文が描かれる。地文は２段の縄である。２は口縁部を隆帯によって区画し，隆帯上には縄側面押捺による刻みを施す。文様は斜位の縄圧痕間に斜線および斜角刺突を充填する。縄圧痕は１段Ｒ，地文は０段多条である。３は口縁部が内湾し，文様帯が隆帯によって２段に分けられる。口縁端部外角と隆帯上には斜角刺突が加えられる。縄圧痕の原体は１段Ｌである。４は口縁端部外角に１段Ｌの縄の押捺による刻みが施され，以下は縄文となる。５～９は胴部片で，５の上端には斜角刺突が認

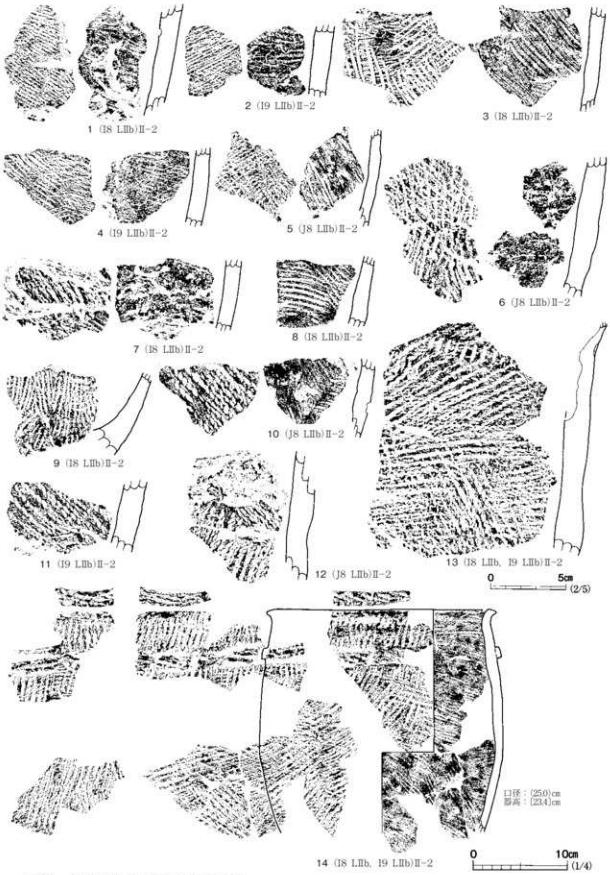


図29　2号遺物包含層出土土器（2）

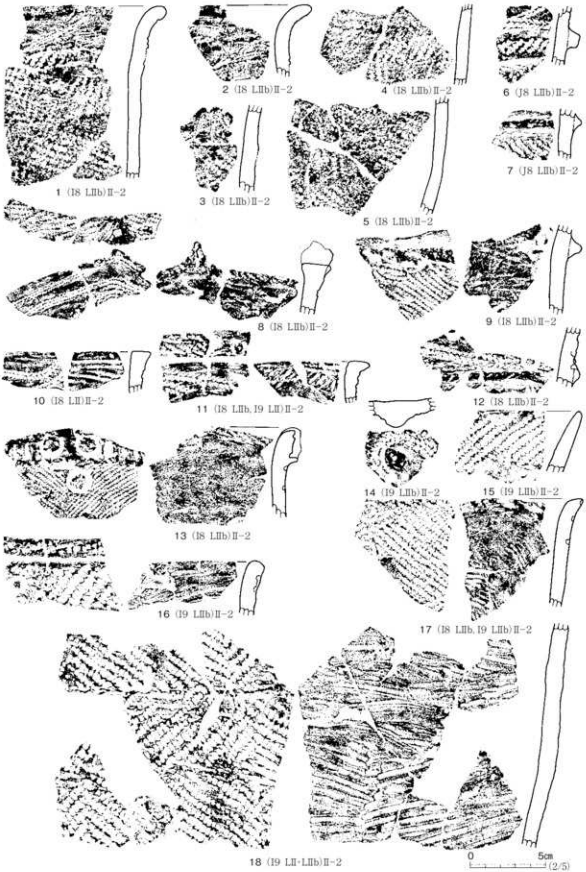


図30　2号遺物包含層出土土器（3）

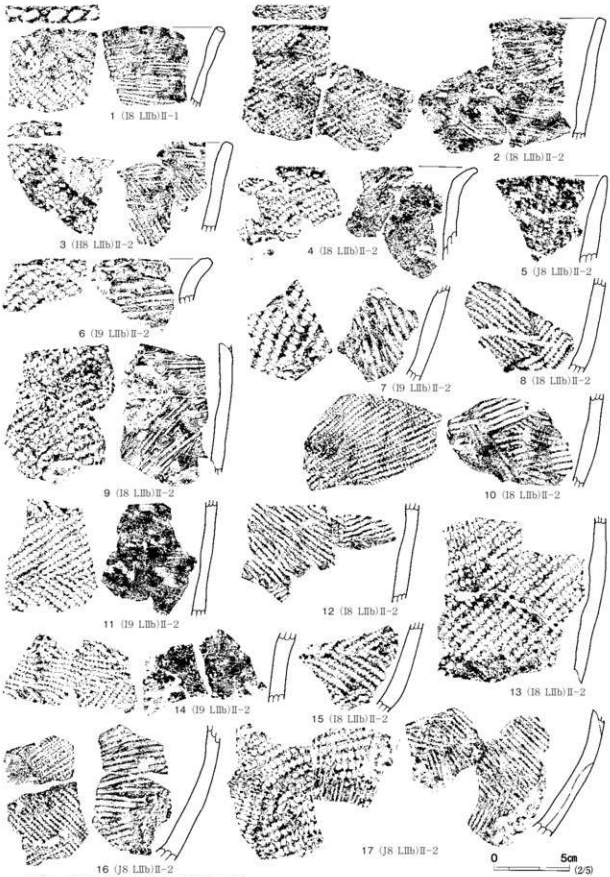


図31　2号遺物包含層出土土器（4）

められる。原体は５・８が２段の縄，他は０段多条である。

４類：図32－17・18に示した，Ⅱ群内での類別が不明な無文の尖底部である。

Ⅲ群土器（図32－10～14）

１類：図32－10・11がこれにあたる。１号遺物包含層に比して出土量は少ない。10は末端環付の原体によって羽状縄文を施文する。11は重層ループ文が施される。

２類：図32－12～14がこれにあたる。12・13は同一個体片である。櫛歯状工具による有節沈線によって施文する。文様は４本歯の工具で上下の区画線を引き，５本歯工具で曲線文を描く。器壁は薄く，内面はミガキで平滑である。大木２ａ式期の土器であろう。14は波頂部の丸い波状口縁をなし，上端からＬＲ斜縄文が施されている。胎土に繊維を含まず，内面にはヘラナデによる擦痕が残

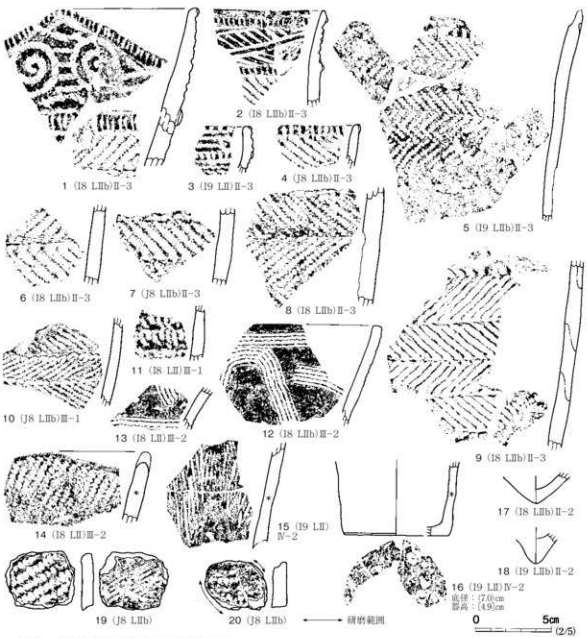


図32　２号遺物包含層出土土器（５）

されている。大木３～４式期の土器と思われる。

Ⅳ群土器（図32－15・16）

２類：図32－15・16に示した，晩期に属するものである。15は条痕施文の胴部破片である。16は無文の底部で，底面に木葉痕が残される。

土器片円盤（図32－19・20，写真42）

２点認められた。いずれもⅡ群２類ｃ種に分類される破片を用いている。19は打ち欠いたのみで方形に整形される。20は左右の破断面に磨痕が認められ，楕円形を呈している。

石　　器（図33，写真44・45）

石器は表３に示すとおり97点出土した。器種組成は表４に示すとおりで，多くが剥片である。

石　鏃（図33－１～４）

４点出土している。いずれも無茎凹基石鏃である。１はシルト質頁岩を素材としており表面は風化して剥離が不明瞭である。基部の抉りが浅く長幅比が大きい形態である。２は小型で基部の抉りが深く，片方の脚を欠損する。石質は透明な石英である。３は長幅比が大きく基部が弓張状に抉られる。正面中央は焼けはじける。４は尖頭部のみの欠損品である。３・４の石質は流紋岩である。

未成品（図33－５・６）

２点出土している。５は流紋岩の石鏃未成品で基部に厚みが残っている。６は白色を呈する珪岩の中礫上半に剥離を加えている。

磨　石（図33－７）

安山岩の磨石３点が出土しているが，いずれも欠損品である。残りの良いものを示した。正面中央に敲打痕が残され，稜より左方はざらついた磨面，右方は平滑な礫面である。裏面はざらついた磨面で中央に敲打による浅い凹みが残される。左側縁も平坦でざらついた磨面である。

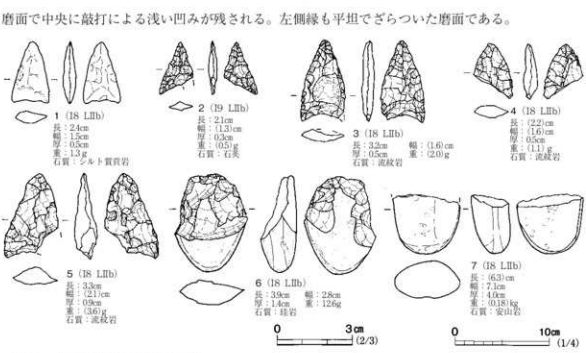


図33　２号遺物包含層出土石器

第７節　遺構外出土遺物

遺物包含層外から得られた遺物は，縄文土器片12点のほか，石器がＬⅠから１点出土し，４点を表採している。銭貨がＨ８Ｇから６枚，Ｇ９Ｇから６枚の計12点をＬⅠから採集している。

石　　器（図34－１・２，写真45）

１は輝石安山岩の凹石である。耕作によるガジリが多数認められる。正面が平坦，裏面が横の凸面となる平滑な磨面を持つ。側面と正・裏面の角も面取り状に研磨に供しており，横断面多角形を呈する。正面には小形，左側面には大形の凹みを持ち，下端も敲打により痕跡状を呈する。２は正面のみが平坦となる赤みを帯びた安山岩の礫である。磨面と思われる平坦面の状況は礫面に近く使用したかは不明であるが，近隣で採取できる石材ではないことから遺物と判断した。このほかに赤みを帯びたチャートの盤状石核１点，流紋岩の剥片２点が出土した。

銭　　貨（図34－３～14）

銭貨はいずれも寛永通寶である。９～14に示したＧ９Ｇ出土のものは11～14の４枚が，３～８に示したＨ８Ｇ出土のものは全てが銹着した状態で出土している。寶の下部の足は，Ｈ８Ｇでは３・４，Ｇ９Ｇでは９～12が「ス」字で，他は「ハ」字で背部に「文」字がある。

これらについては，Ｇ９Ｇで確認された近世墓の存在から，確認されたもの以外の墓が近代以降の開墾によって破壊されて，副葬品であった六道銭がＬⅠ中に入り込んだものと考えられる。

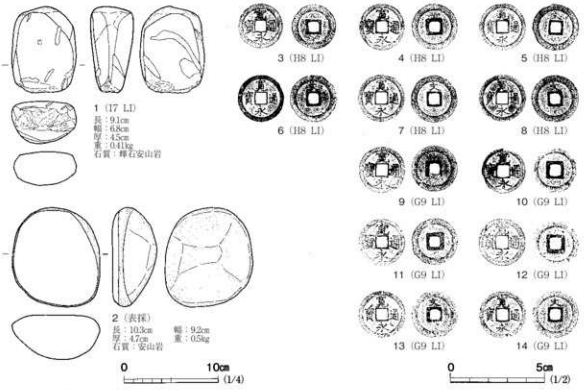


図34　遺構外出土遺物

表3　遺物包含層遺物点数

層位・種別 ＼ グリッド		1号遺物包含層					2号遺物包含層					層位別計
		I 5	J 5	J 6	J 7	K 6	H 8	H 9	I 8	I 9	J 8	
L Ⅱ	縄文土器	15	1	10				1	32	67		126
	石器			1					7	2		10
L Ⅱb	縄文土器						18	2	451	179	156	806
	石器						1	2	66	10	9	88
L Ⅲ	縄文土器	230	186	378	51	128						973
	石器	6		37	3	5						51
L Ⅳ	縄文土器		3	734	6							743
	石器			66		1						67
グリッド別計	縄文土器	245	190	1122	57	128	18	3	483	246	156	2648
	石器	6	0	104	3	6	1	2	73	12	9	216
包含層別計	縄文土器	1742					906					
	石器	119					97					

表4　石器器種別点数

遺構	石鏃	石槍	スクレイパー	未成品	二次加工剥片	楔形石器	石核	剥片	磨石・凹石	台石	磨製石斧	石棒	遺構別計
S I 1	1												1
S I 2	3			1	1	1	1	52					59
S I 5						1		2		1			4
S I 6								1					1
S X 1	1			1	2			14	1			1	20
SH1L Ⅱ・Ⅲ	3	1	1	2		2	2	36	3		2		52
S H 1 L Ⅳ	5			3				56	3				67
S H 1 一括								2					2
S H 2 L Ⅱ						1		8					9
S H 2 L Ⅱb	4			2	2	1	1	75	3				88
遺構外							1	2	2				5
計	17	1	1	9	5	6	5	248	12	1	2	1	308

表5　剥片石材別点数

遺構	層位	流紋岩	シルト質凝灰岩	珪質頁岩	頁岩	緑色凝灰岩	玉髄	石英	チャート（黒色）	チャート（赤色）	片麻岩	緑泥片岩	石英片岩	安山岩（ガラス質）	黒曜石	点数
S I 2		21	21	5	1		1			2		1				52
S I 5					1		1									2
S I 6		1														1
S X 1		9	1	1	1	1							1			14
SH1	L Ⅱ・Ⅲ	14	8	1	1			1	2	9						36
SH1	L Ⅳ	41	4	1	2	1			3		2			1	1	56
SH1	表採	2														2
SH2		37	23	13	1			3	3	2			1			83
遺構外		2														2
計		127	57	21	7	2	2	4	8	13	2	1	2	1	1	248

第３章　総　　括

第１節　遺構について

今回の調査では，空釜Ｂ遺跡は縄文時代の集落跡であることを確認した。確認できた遺構は竪穴住居跡６軒，性格不明遺構１基，焼土遺構１基，土坑５基，遺物包含層２ヶ所である。

時期別に見ると，早期後葉の竪穴住居跡４軒，性格不明遺構１基，および同時期以前の落し穴状土坑２基については調査区北部の１号遺物包含層の周囲に構築される。前期最初頭の竪穴住居跡２軒については，２つの遺物包含層に１軒ずつ確認され，北部には同時期のＳＫ３も伴っている。そのほか調査区南部で確認できたＳＫ５は時期・性格ともに不明である。

各時期の遺構の特徴について，以下にまとめる。

早期後葉の遺構

竪穴住居跡：この時期の竪穴住居跡は，ＳＩ１・３～５である。いずれも１号遺物包含層北側の南向き急斜面の谷の開けた部分に立地している。遺構の規模は２～３ｍ程度で，斜面下方の壁は存在しない。柱穴は０ないし１個で簡単なつくりの上屋が想定される。またＳＩ５のように貯蔵穴様の土坑が伴う例もある。

炉は床面そのままの地床炉である。いずれも斜面下方側に偏在しているが，これは元の住居床面は貼床によって斜面下方側へ広げられており，貼床土の流出・検出時の削平によって，調査で確認された状態になっていると想定される。また，ＳＩ１・４・５に見られる重複の様子からは斜面下から上へと新たに構築していく様子が窺える。

性格不明遺構：ＳＨ１最下層において検出されている。北側斜面での住居構築時の廃土および土器等の投棄によって形成された捨て場と考えられる。ℓ２上面においてＳＩ１出土土器（図９－１）の同一個体片が出土していることからℓ２以下の堆積土の形成時期はＳＩ１構築時までであろう。この段階でＳＧ１が形成されており，この場が住居に付設された屋外炉等として利用されたことが分かる。その後に斜面からの生活残滓の廃棄や住居堆積土・整地土等の流入によってℓ１およびＬⅣが形成されたと考えられる。早期における廃土投棄の可能性が指摘されるものは，管見であるが県内では広野町上田郷Ⅵ遺跡第２遺物包含層（本間1999・井2001）や新地町山中Ｂ遺跡３号遺物包含層（今野2007）がある。これらの遺跡でも層理面から一括状態の土器が出土する状況が認められ本遺構がこれらと同様のものとする理由である。

土　　坑：ＳＫ１・ＳＫ４は形態から落し穴と考えられ，立地，検出面および堆積土が似通っていることから近い時期に構築されたものと考えられる。その時期については，出土遺物および検出面から早期後葉を下らないものと想定され，本遺跡で最も古期の遺構になるであろう。

また，ＳＫ２は，ＳＩ３を切って構築されることから早期後葉以降に位置づけられる。機能については貯蔵穴の可能性があり，確認できた集落跡のいずれかの時期に伴うものと考えられる。

遺物包含層：この時期に堆積したと考えられるのはＳＨ１のＬⅣである。遺物が出土するのはほぼＪ６Ｇに限られ，北側の斜面に位置する住居跡を給源とするのは間違いない。ＳＸ１が住居構築時の捨て場であるとすれば，生活残滓の廃棄や堆積土の崩落によって形成された層と考えられる。

放射性炭素年代：これらの遺構から出土した炭化材の^{14}Ｃ（ＡＭＳ）年代は，最も新しい値がＳＸ１ℓ１の6,980±40yrBPであり，古い値はＳＨ１Ｊ６ＧＬⅣの7,200±40yrBPである（付章参照）。7,000yrBP前後に集中しており，茅山下層式～茅山上層式の年代として妥当な数値といえる。

ＳＩ５ℓ１の6,170±40～6,200±40yrBPという数値についてはこれらと比べて新しく，ＳＩ２およびＳＨ１ＬⅢの年代に近しい。この時期の住居堆積土およびＳＨ１ＬⅣからⅡ群土器も少量ながら出土している（９－４，14－２，15－４など）ことを考慮すれば，ＬⅣの堆積が薄いことに起因する上層からの混入および撹乱の見落としによるサンプリングエラーの可能性が高い。

前期初頭の遺構

竪穴住居跡：前期最初頭に位置づけられる竪穴住居跡はＳＩ２・６で，南北の遺物包含層に伴っている。双方とも斜面南裾の埋没途上の谷底の比較的平坦な部分に構築され，早期後葉段階との立地の違いが認められる。

形態・規模の明らかなＳＩ２を基にすれば，長軸６ｍ，短軸4.5ｍ程度の楕円形で，柱穴は周壁沿いに配されるが，その配置は不整である。床には貼床などは成されず，地山の傾斜のままである。炉は床面そのままの地床炉で，床の中央部に位置する。同時期の住居跡としては郡山市西原遺跡９号住居跡に規模・形態ともに近いものがあり（高松1984），本遺跡に特有の特徴などは見出せない。

土　　坑：ＳＫ３については，検出面から早期末葉から前期最初頭に位置づけられることは確かである。長径１ｍ弱の楕円形を呈し，礫が土坑内部に入っている。ＬⅢおよびＬⅣには大礫および中礫はほとんど含んでいないことから，流れ込みとは考え難く，抱石葬を行った墓坑の可能性が考えられる。

遺物包含層：主にＳＨ１ＬⅢ・ＳＨ２ＬⅡｂからこの時期の遺物が主となって出土しているが，Ⅲ群としたこれ以降の土器も混在している。よってこれらの層の堆積開始時期がこの時期だとは言えるが，堆積期間としては前期末葉の沼沢パミスの噴出以前までの時間幅を持って考えねばならない。遺物の出土点数はＳＨ１では谷底のＩ５・Ｊ６Ｇ，ＳＨ２ではＩ８Ｇに多く，住居跡の周辺に散乱する状況を示す。早期後葉段階との住居の立地の違いとも相俟って，谷底を「捨て場」にしようという意識はなく，住居の周りにぶちまけている印象がある。

放射性炭素年代：これらの遺構から出土した炭化材の^{14}Ｃ年代は6,100±40～6,230±40yrBPの間に収まる（付章参照）。他遺跡の測定結果と併せても，早期末葉～前期初頭の年代としては妥当な値といえる。

第2節　遺物について

今回の調査の出土遺物の総数は，縄文土器3,389点，石器315点，銭貨12点である。遺物の出土状況についての特徴は前節で触れたとおりで，早期後葉～末葉のⅠ群土器と前期初頭のⅡ群土器が層位を違えてまとまって出土する。主たる出土遺物である縄文土器，石器について以下にまとめる。

縄文土器　（図35）

Ⅰ群土器

1類（図35－1～8）については，ＳＩ１・３・５，ＳＸ１出土土器に代表され，ＳＨ１ＬⅣから主体的に出土する。4単位の波状口縁と平縁の双方あり，口縁部下および胴部中位に刺突を伴う稜を持つ。5に見られるように底部は平底である。口縁端部は打ち削ぎ状に角張り，内外角に刺突が施されるもの（1・6・7），あまり角張らず上端に刻み・刺突が施されるもの（2～5・8）がある。口縁部文様は無い（1），もしくは局所的に刺突列を配するもの（2・3）と集合沈線によって山形もしくは鋸歯状の文様を描くもの（4～8）が主で，その他に図35に示していない破片として縦位の集合沈線（28－2）や斜格子（21－2，26－4）なども認められる。口縁端部の形態，有段器形が弱化して稜と化していることなどの諸特徴から本類は茅山下層式の後半期に併行する土器群と捉えている。

このうち，1～3に掲げたものについては，重複関係から古く考えられるＳＩ５およびＳＸ１でも下層のℓ2出土土器であり，4～8に掲げたＳＩ１・ＳＸ１ℓ1出土の土器よりも層位的には古いといえる。しかしこれらの出土する遺構の形成状況から鑑みれば近接した時期に投棄された遺物であることも明らかであり，そこにどれだけの年代差があるかは明らかではない。

また，4～8については松本茂が小野町小滝遺跡の報文中で「集合斜線充填文」として抽出した文様で，これらの文様を持つ土器については松本や野内秀明によって広義の茅山式，すなわち茅山下層式から茅山上層式の時期の一定時間中に存在した一系列の土器群と評価されている（松本1993，野内2001）。今回の出土状況は，これらが集合斜線充填文土器の茅山下層式後半段階の一括資料であることを示している。

2類（図35－9～11）としたものは，1類に比して器壁が薄手で，口縁部の幅が狭い，もしくは稜による区画がないものである。数量は少なく，ＳＨ１ＬⅢ・ⅣおよびＳＨ２から僅かに出土するのみである。1類よりも新しく，茅山上層式期以降に位置づけられるものと考えている。

Ⅱ群土器

1類（図35－12～14）は早期末葉の縄文条痕文系土器であるが，出土点数は非常に少ない。地文縄文上に縄圧痕が施されるもの（12・13），無地の口縁部文様帯に沈線文が施されるもの（14）がある。土器型式としてはいわゆる北前式や梨木畑式の系列に入るものであろう。よって編年的位置

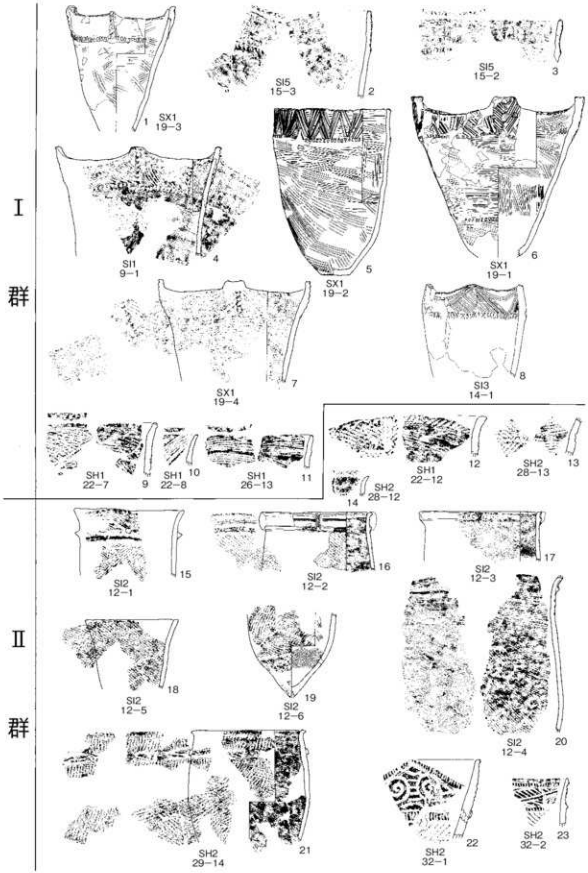


図35　空釜B遺跡出土土器集成

づけとしては茅山上層式以降に置くことができ，Ⅰ群２類土器と同時期である可能性がある。また，12・13に見られる縄圧痕は原体こそ２段撚りであるものの，節が矢羽状になるような圧痕である点がⅡ群２類ｂ種と共通する。ここから，これらについてはⅡ群２類の直前に位置付けられる可能性も指摘できる。

２類（図35－15～21）はＳⅠ２出土土器（15～20）を基準として分類しており，前期最初頭に位置付けられるものとした。ＳＨ１ＬⅢおよびＳＨ２から主体的に出土する。

ａ種は撚糸文地文の土器をまとめた。口縁部は強く外反する器形が多く，地文の撚糸文は斜方向に回転施文され且つ交錯している。内面は条痕が施されるものと無文もしくは擦痕のものがあり，前者と後者の量的比率は１：２程度で無文・擦痕のものが多い。沈線によって文様を描くものもあるが，格子およびこれに孤線文を加えたものに限られ，大畑Ｇ式において典型とされる「米」字状の文様を持つものは確認できない。

これらの特徴は上田郷Ⅵ遺跡ⅡＡ群１・２類と共通し，同類の土器と考えられる。また，同遺跡のⅡＢ群や南相馬市の荻原遺跡Ⅱ類（高橋1994・藤谷1995），原Ｂ遺跡Ⅰ群１類（中野2008）などに見られる横位隆帯を巡らすものは少なく，図35－21に見られる程度である。

ｂ種はＳⅠ２出土土器（図35－15～17・20）に代表される。横位隆帯が一巡し，区画された文様帯には縄圧痕および竹管刺突によって文様が描かれる。胴部は原体の回転方向を変え縦横の羽状，放射状（菱形）に縄文が施される。飯舘村羽白Ｄ遺跡Ⅱ群０類（鈴鹿1988）や上田郷Ⅵ遺跡ⅡＢ群３類ｂ種（16が類似）・４類ｃ種（14・15・19が類似），荻原遺跡Ⅲ類などと同類の資料である。

このような中でも，本遺跡において特徴的なのは，縄圧痕がいずれも左右の１段撚りの縄を並列させた矢羽状圧痕である点が挙げられる。前掲の遺跡では１段撚り１本，２段撚り１本，１段撚り２本（矢羽状圧痕）などが認められており，本遺跡での斉一性はⅡ群２類土器の時期的な近接および製作者の近親性を示す可能性がある。

ｃ種は地文のみ施された土器である（図35－18･19）。同一原体によって縦横の羽状，放射状（菱形）に縄文が施されている。

２類については，ｂ種土器がＳⅠ２堆積土中に良好な資料が集中すること，共通する特徴が見出せることからほぼ同時期の一括資料と捉えることができよう。また，地文撚糸文土器は存在するものの，地文縦走縄文・斜め短沈線による鋸歯文が施されるいわゆる日向前Ｂ式が欠落しており，早期の終末段階，いわゆる大畑Ｇ式期まで遡る可能性は僅かと考えうることから，ｂ種に伴出するａ・ｃ種の大部分についてもこれと同時期のものと考えられる。

３類（図35－22・23）は花積下層式に比定される。胴部には整った横位の羽状縄文，内面にはミガキが加えられる。器壁も薄く２類とは一線を画す。文様を有するものは，隆帯上にヘラによって刻み，１条の縄圧痕による渦巻文を描くもの（22）や，縄側面押捺による列点状の刻みや１条の縄圧痕間に短沈線を充填するもの（23）がある。文様を有さないものについても斜角刺突や竹管側面による刻みが一巡するものが認められる。

鈴鹿良一の羽白Ｄ遺跡における分類（鈴鹿1987・2005）に従えば，22は渦巻文の周囲に縄圧痕を充填する様子から古段階（同遺跡ＳＩ５・19）に比定され，23や文様帯を有さない資料は縄による列点状の刻みなど古段階的な特徴を残しながらも，斜角刺突や短沈線の充填など中段階（同遺跡ＳＩ10）に比定できる特徴も併せ持つものと言える。

Ⅲ群・Ⅳ群土器

Ⅲ群１類は，ＳＨ１ＬⅢに多く見られる。文様帯上端に波状文を施すもの，相互刺突文･重層ループ文・菱形文を施すもの，区画線のみを施すものの３種がある。いずれも前期前葉の関山Ⅱ式およびそれに併行する段階に比定できる。

Ⅲ群２類はＳＨ１ＬⅢ・ＳＨ２から少量出土しており，大木２ａ式併行期に位置づけられるものと大木４式に位置づけられるものが確認できる。大木２ａ式期のものは工具をコンパス状に動かすことで，波状文，有節沈線による渦巻状文を描いている。近隣の西田Ｈ遺跡（山元2005）などでは認められた口縁部に爪形文などの文様帯を持つものは認められない。大木４式としたものは，内面にナデによって砂粒が動いた擦痕があることからこの時期のものとした。

その他に田戸下層式および晩期に属する土器がＳＨ１ＬⅢおよびＳＨ２ＬⅡからごく僅かに出土している。田戸下層式については細片１点のみしか出土していない。晩期の遺物については，図32－15に示した条痕文が施される資料が晩期後葉に位置づけられるほかは，無文もしくは詳細な時期の判別が不能な細片である。ただし，表面調査の際に調査区東側の畑地で同時期の土器も採集されており，調査区外に遺構がある可能性は否定できない。

石　　器

全体的な特徴として，定形的な石器としては石鏃・磨石類が多く，その他の器種はＬⅢに石槍，スクレイパー，磨製石斧，包含層最下層のＳＸ１に石棒が認められるに過ぎない。

非定形なものとしてはＳＩ２やＬⅢ以上に認められる楔形石器や，石鏃を主とする未成品，二次加工剥片がある。楔形石器は両極打法によって剥離した小形の石核と考えられ，その他についても小形剥片に加工が施されたものである。また，剥片はいずれも最大５cmに満たないものであり，その出土量は定形石器および石核の数倍である。ここから考えると，本遺跡では石鏃等の小形石器の製作が主に行われたことは確かで，逆に点数の少ない石槍や磨製石斧などは製品の状態で遺跡内に運び込まれて，破損等により遺棄されたものと考えられる。

磨石類については，前期と考えられるＬⅢ出土のものでは亜円礫の表裏の凸面を使って研磨および凹みによる敲打，側面を敲打に使い分ける傾向が見て取れる。対して，早期後葉段階と考えられるＳＸ１およびＬⅣ出土のものでは正・裏面および側面を問わず，研磨および凹みによる敲打面とし，且つ磨面が平坦面として形成される傾向がある。

また，石棒についてはＳＸ１のℓ２から出土している。谷底の遺物包含層最下位からの出土であり，後世の攪乱により後・晩期の遺物が混入したとは考えられない。したがって早期後葉に帰属す

るものと思われ，この時期の石棒は福島県内では珍しいものである。

剥片石器では，各層位とも流紋岩が多く用いられ，剥片でも変わりない。器種組成から考えられた遺跡内で石鏃の製作が主として行われていたであろうことがここからも窺える。この石材は風化した表面が白色を呈し，石英・角閃石の斑晶を含むもので，石器石材としてはいわき市をはじめ浜通りの南部方面を主に，阿武隈高地南部の本遺跡を含む地域でもよく見られる。

これに次ぐ点数が出土しているのはシルト質頁岩で，ＳＩ２・ＳＨ２に特徴的に見られることから，前期初頭の段階で多用された石材と考えられる。灰～青灰色を呈し，表面は粉を吹いたような風化面である。白河市一里段遺跡の旧石器西ブロックで多用される泥岩とされたものと同質で，この石材については無斑晶質のデイサイトとする見方もある。今のところ産地は明らかではないが，一里段遺跡で多出している例から，福島県南部から離れた箇所が産地とは考えにくい。

さらにこれに次ぐ点数が出土するチャートについては黒色・灰色の斑紋を持つものと赤色・灰色の斑紋を持つものの２種がある。後者については赤玉とする見方もある。いずれにせよ阿武隈高地中に産出する可能性がある石材であると考えられる。

珪質頁岩には硬質・細粒のものと砂質・粗粒のものがある。前者は山形県など日本海側を産地とするものと考えられ，石槍など製品に認められるものの剥片点数は少ない。

ここから本遺跡で石鏃や剥片として多く見つかっている石材については，遠距離から運び込まれたものは少ないことが分かる。器種組成と合わせて考えれば，周辺地域で獲得できる石材を用いて石鏃等の小形石器の作成が行われ，これが遺物として残されていると考えられる。

また，磨石類に使用されるのは安山岩類で，阿武隈高地中で産出する石材ではない。本遺跡の西方に位置する玉川村・石川町の遺跡においても同石材が磨石として利用されている状況から，おそらくは阿武隈川以西から持ち込まれた石材と考えられるが，剥片石器同様にさほど遠距離から得られたものではないと思われる。

第3節　ま　と　め

今回の調査によって本遺跡には，縄文時代早期後葉茅山下層式期と前期最初頭の集落および遺物包含層が重層的に存在することが確認された。調査区は遺跡の緩斜面上位に位置しており，当該期の集落および遺物包含層がさらに東側の緩斜面下位へと伸びているものと想定される。

早期後葉には湧水のない谷沿いの南向き斜面を狙って立て続けに住居を構築し，谷底に構築廃土・生活残滓などの廃棄行為を行っている。前期最初頭には丘陵南裾の埋没しかけた谷底緩斜面に比較的大型の住居を構築するようになり，早期段階からの居住地選択条件および居住形態の変化が窺える。

石器の器種や石材からは，遠隔地から石材を得てさまざまな器種の石器を製作した痕跡は認められないことから，本遺跡は拠点的集落ではなくキャンプサイト的な性格を有しているといえる。

よって集落の存続期間は長期に亘ることはないと考えられる。

確認された集落の各時期間に位置づけられる早期末葉においては，土器が僅かであり，この時期に帰属する遺構を確認できないことから遺跡の利用は低調であったものと考えられる。さらに前期以降は前期初頭から前葉の土器が多少認められるが，これもまた遺構は確認できない。ここからも遺跡の利用は非常に断続的であることが分かる。

遺跡利用の断続性に加え，各時期の集落の住居軒数が少数であることから，これらの住居および遺物包含層に伴う早期後葉および前期最初頭の土器群は良好な一括資料であると考えられる。さらに遺跡利用が断続的であったが故に，これらの土器群が層位を違えて出土すると言える。

ここから従来の福島県における早期後葉・末葉以降の土器編年，「茅山下層式」から「集合沈線充填文土器」→「胡麻沢段階」の条痕文土器・「北前・梨木畑式」・「常世２式」→「大畑Ｇ式」・「日向前Ｂ式」→「前期最初頭の土器群」→「花積下層式」という流れが当を得たものであることを確認できたという意義を見出すことができる。

参考文献

中村五郎 1983「東北地方南部の縄紋早期後半の土器編年試論」『福島考古』24　福島県考古学会

高松俊雄 1984「西原遺跡」『内環状線関連遺跡発掘調査概報Ⅱ』郡山市教育委員会・郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団

鈴鹿良一他 1987「羽白Ｄ遺跡（第１次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅹ』福島県教育委員会・福島県文化センター

鈴鹿良一他 1988「羽白Ｄ遺跡（第２次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告ⅩⅠ』福島県教育委員会・福島県文化センター

本間　宏他 1989「中ノ沢Ａ遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告４』福島県教育委員会・福島県文化センター

松本　茂他 1993「小滝遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告21』福島県教育委員会・福島県文化センター

高橋信一 1994「荻原遺跡（第１次調査）」『県営かんがい排水事業　請戸川地区遺跡発掘調査報告Ⅱ』福島県教育委員会・福島県文化センター

樫村友延他 1995「中倉Ｂ遺跡」・「中ノ内Ｃ遺跡（細田地区）」『東北横断自動車道関連遺跡Ⅰ』いわき市教育委員会・いわき市教育文化事業団

猪狩忠雄他 1995「差塩Ｂ遺跡」・「差塩Ｄ遺跡」『東北横断自動車道関連遺跡Ⅱ』いわき市教育委員会・いわき市教育文化事業団

藤谷　誠 1995「荻原遺跡」『県営かんがい排水事業　請戸川地区遺跡発掘調査報告Ⅲ』福島県教育委員会・福島県文化センター

中村嘉男他　1996『土地分類基本調査　小野新町』福島県農林部

平田村　　1999『平田村史　第一巻通史編』

本間　宏他　1999「上田郷Ⅵ遺跡（１次調査）」『常磐自動車道遺跡調査報告18』福島県教育委員会・福島県文化センター

金子直行 2000「早期後葉土器群における広域編年の可能性について」『第13回縄文セミナー　早期後半の再検討』縄文セミナーの会

縄文セミナーの会 2000『第13回縄文セミナー　早期後半の再検討－記録集－』

野内秀明 2001「条痕文土器後半期の諸段階－茅山下層式・茅山上層式土器とその周辺の土器群」『考古論叢神奈河』第９集　神奈川県考古学会

井　憲治他 2001「上田郷Ⅵ遺跡（２次調査）」『常磐自動車道遺跡調査報告22』福島県教育委員会･福島県文化センター

山内幹夫 2003『福島県文化財センター白河館　文化財研修（時代別研究コース）「縄文時代早期」資料』

國井秀紀他 2004「仁井殿遺跡」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告17』福島県教育委員会・福島県文化振興事業団

山元　出他 2005「堂田Ａ遺跡」･「西田Ｈ遺跡」『こまちダム遺跡発掘調査報告３』福島県教育委員会・福島県文化振興事業団

鈴鹿良一 2005『福島県文化財センター白河館　時代別研究研修「縄文時代前期土器の研究１」資料』

福島県教育委員会 2006「第２章第３節（２）平田村の遺跡　２．空釜Ｂ遺跡」『福島県内遺跡分布調査報告12』

今野　徹他 2007「山中Ｂ遺跡」『一般国道６号相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅵ』福島県教育委員会・福島県文化振興事業団

中野幸大他 2008「原Ｂ遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告46』福島県教育委員会・福島県文化振興事業団

山元　出他 2009「石橋遺跡」･「手倉遺跡」･「法昌段Ａ遺跡」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告19』福島県教育委員会・福島県文化振興事業団

付　章　空釜Ｂ遺跡における放射性炭素年代（ＡＭＳ測定）

㈱加速器分析研究所

１　測定対象試料

空釜Ｂ遺跡は，福島県石川郡平田村大字下蓬田字空釜（北緯37°13′03″，東経140°32′33″）に所在する。遺跡は阿武隈高地中央部の丘陵南東裾に位置する。遺跡には２条の谷が入り，それぞれに遺物包含層が形成されている。

測定対象試料は，２号竪穴住居跡（SI2）埋土２ａ層出土の木炭（FB.AMSG.001：IAAA-81837），５号竪穴住居跡（SI5）埋土１層出土の木炭３点（FB.AMSG.002～004：IAAA-81838～81840），１号性格不明遺構（SX1）埋土１層出土の木炭２点（FB.AMSG.005・006：IAAA-81841・81842），１号性格不明遺構ピット１（SX1P1）埋土１層出土の木炭（FB.AMSG.007：IAAA-81843），３号土坑（SK3）埋土１層出土の木炭（FB.AMSG.008：IAAA-81844），１号遺物包含層（SH1）Ｊ５グリッドＬⅢ層出土の木炭３点（FB.AMSG.009～011：IAAA-81845～81847），１号遺物包含層（SH1）Ｊ６グリッドＬⅣ層出土の木炭３点（FB.AMSG.012～014：IAAA-81848～81850），１号遺物包含層（SH1）Ｊ７グリッドＬⅣ層出土の木炭（FB.AMSG.015：IAAA-81851），２号遺物包含層（SH2）Ｉ８グリッドＬⅡｂ層出土の木炭３点（FB.AMSG.016～018：IAAA-81852～81854），合計18点である。ＬⅡ層には沼沢パミス（約4,800yrBP）が堆積する。

２　測定の意義

遺構の構築時期と遺物包含層の堆積時期を推定し，遺跡の形成過程を明らかにする。

３　化学処理工程

(1)　メス・ピンセットを使い，根・土等の表面的な不純物を取り除く。

(2)　酸処理，アルカリ処理，酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では１Ｎの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では１Ｎの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。なお，AAA 処理において，アルカリ濃度が１Ｎ未満の場合，表中に AaA と記載する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では１Ｎの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後，超純水で中性になるまで希釈し，90℃で乾燥する。希釈の際には，遠心分離機を使用する。

(3)　試料を酸化銅と共に石英管に詰め，真空下で封じ切り，500℃で30分，850℃で２時間加熱する。

(4)　液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し，真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を

精製する。

(5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し，グラファイトを作製する。

(6) グラファイトを内径１㎜のカソードに詰め，それをホイールにはめ込み，加速器に装着する。

4 測定方法

測定機器は，3MV タンデム加速器をベースとした^{14}C -AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

(1) 年代値の算出には，Libby の半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。

(2) ^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。この値は，δ^{13}C によって補正された値である。^{14}C 年代と誤差は，１桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また，^{14}C 年代の誤差（±１σ）は，試料の^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) δ^{13}C は，試料炭素の^{13}C 濃度（^{13}C／^{12}C）を測定し，基準試料からのずれを示した値である。同位体比は，いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により^{13}C／^{12}C を測定した場合には表中に（AMS）と注記する。

(4) pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C 濃度の割合である。

(5) 暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C 濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，１標準偏差（１σ＝68.2%）あるいは２標準偏差（２σ＝95.4%）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は，下一桁を四捨五入しない^{14}C 年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv4.0較正プログラム（Bronk Ramsey 1995　Bronk Ramsey 2001　Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

6 測定結果

^{14}C 年代は，SI2出土の木炭が6,130±40yrBP，SI5出土の木炭３点が6,170±40yrBP（FB.AMSG.002），6,200±40yrBP（FB.AMSG.003），6,170±40yrBP（FB.AMSG.004）である。SX1ℓ１層出土の木炭２点は7,040±40yrBP（FB.AMSG.005），6,980±40yrBP（FB.AMSG.006），SX1P1ℓ

1層出土の木炭が7,080±40yrBP，SK3出土の木炭が6,140±40yrBPである。

SH1LⅢ層ではJ5出土の木炭3点は6,180±40yrBP（FB.AMSG.009），6,150±40yrBP（FB.AMSG.010），6,130±40yrBP（FB.AMSG.011）である。SH1LⅣ層ではJ6出土の木炭3点は7,070±40yrBP（FB.AMSG.012），7,200±40yrBP（FB.AMSG.013），7,190±40yrBP（FB.AMSG.014），J7出土の木炭が7,050±40yrBPである。SH2LⅡb層のI8出土の木炭3点が6,160±40yrBP（FB.AMSG.016），6,100±40yrBP（FB.AMSG.017），6,230±40yrBP（FB.AMSG.018）である。

同一遺構から出土した試料の年代は，すべて誤差範囲内で一致する。また，層位の上下関係とも整合的な結果である。年代値としては，LⅣ層を主体とした7,200～7,000yrBP前後（縄文時代早期後葉）と，LⅡb～Ⅲ層を主体とした6,200～6,100yrBP前後（縄文時代早期末～前期初頭）に区分される。SI5に関しては，表土直下のLⅤ・LⅧ上面で検出されたが，本来の検出面はLⅣ上面に相当したと推定される。

試料の炭素含有率はすべて60％以上であり，十分な値であった。化学処理および測定内容にも問題は無く，妥当な年代と判断される。FB.AMSG.016とFB.AMSG.018では，確認された年輪の最外部から試料を採取できたが，対象となった木炭には小片が多く，樹皮や最外年輪部を確認できるものではなかった。したがって，内側の年輪ほど古い年代を示す「古木効果」を考慮し，いくらかの年代差があることを踏まえて検討する必要がある。

参考文献

Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, ***Radiocarbon*** 19, 355-363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, ***Radiocarbon*** 37(2), 425-430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, ***Radiocarbon*** 43(2A), 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, ***Radiocarbon*** 43(2A), 381-389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, ***Radiocarbon*** 46, 1029-1058

表1 測定結果

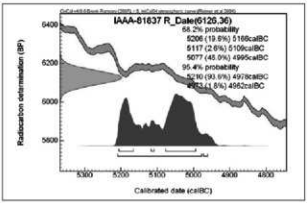
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）（AMS）	δ^{13}C補正あり	
						LibbyAge（yrBP）	pMC（%）
IAAA-81837	FB.AMSG.001	2号竪穴住居跡（SI2） ℓ2 a	木炭	AAA	−25.57±0.41	6,130±40	46.64±0.21
IAAA-81838	FB.AMSG.002	5号竪穴住居跡（SI5） ℓ1	木炭	AaA	−26.92±0.32	6,170±40	46.37±0.20
IAAA-81839	FB.AMSG.003	5号竪穴住居跡（SI5） ℓ1	木炭	AAA	−28.57±0.44	6,200±40	46.24±0.22
IAAA-81840	FB.AMSG.004	5号竪穴住居跡（SI5） ℓ1	木炭	AaA	−29.01±0.42	6,170±40	46.39±0.21
IAAA-81841	FB.AMSG.005	1号性格不明遺構（SX1） ℓ1	木炭	AAA	−23.81±0.48	7,040±40	41.61±0.20
IAAA-81842	FB.AMSG.006	1号性格不明遺構（SX1） ℓ1	木炭	AAA	−26.19±0.37	6,980±40	41.96±0.21
IAAA-81843	FB.AMSG.007	1号性格不明遺構P1（SX1P1） ℓ1	木炭	AAA	−27.44±0.56	7,080±40	41.44±0.20
IAAA-81844	FB.AMSG.008	3号土坑（SK3） ℓ1	木炭	AAA	−24.41±0.74	6,140±40	46.59±0.22
IAAA-81845	FB.AMSG.009	1号遺物包含層（SH1） J5 LⅢ	木炭	AAA	−25.90±0.33	6,180±40	46.33±0.21
IAAA-81846	FB.AMSG.010	1号遺物包含層（SH1） J5 LⅢ	木炭	AAA	−24.02±0.43	6,150±40	46.53±0.22
IAAA-81847	FB.AMSG.011	1号遺物包含層（SH1） J5 LⅢ	木炭	AAA	−28.44±0.32	6,130±40	46.62±0.22
IAAA-81848	FB.AMSG.012	1号遺物包含層（SH1） J6 LⅣ	木炭	AAA	−24.93±0.55	7,070±40	41.50±0.21
IAAA-81849	FB.AMSG.013	1号遺物包含層（SH1） J6 LⅣ	木炭	AAA	−27.72±0.39	7,200±40	40.83±0.19
IAAA-81850	FB.AMSG.014	1号遺物包含層（SH1） J6 LⅣ	木炭	AAA	−25.47±0.39	7,190±40	40.86±0.20
IAAA-81851	FB.AMSG.015	1号遺物包含層（SH1） J7 LⅣ	木炭	AAA	−29.16±0.68	7,050±40	41.56±0.20
IAAA-81852	FB.AMSG.016	2号遺物包含層（SH2） I8 LⅡb	木炭	AAA	−31.93±0.80	6,160±40	46.47±0.23
IAAA-81853	FB.AMSG.017	2号遺物包含層（SH2） I8 LⅡb	木炭	AAA	−33.69±0.44	6,100±40	46.77±0.24
IAAA-81854	FB.AMSG.018	2号遺物包含層（SH2） I8 LⅡb	木炭	AAA	−28.17±0.71	6,230±40	46.02±0.21

［#2547］

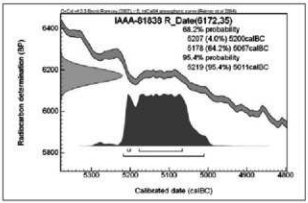
表2　暦年較正年代

測定番号	δ^{13}C補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-81837	6,140 ± 40	46.59 ± 0.21	6,126 ± 36	5206BC − 5166BC (19.6%) 5117BC − 5109BC (2.6%) 5077BC − 4996BC (46.0%)	5210BC − 4978BC (93.6%) 4973BC − 4962BC (1.8%)
IAAA-81838	6,200 ± 40	46.19 ± 0.20	6,172 ± 35	5207BC − 5200BC (4.0%) 5178BC − 5067BC (64.2%)	5219BC − 5011BC (95.4%)
IAAA-81839	6,250 ± 40	45.90 ± 0.22	6,195 ± 38	5216BC − 5202BC (7.6%) 5177BC − 5069BC (60.6%)	5295BC − 5243BC (6.9%) 5231BC − 5037BC (88.5%)
IAAA-81840	6,240 ± 40	46.01 ± 0.21	6,170 ± 36	5207BC − 5198BC (5.2%) 5179BC − 5064BC (63.0%)	5218BC − 5011BC (95.4%)
IAAA-81841	7,020 ± 40	41.71 ± 0.20	7,043 ± 39	5984BC − 5898BC (68.2%)	6004BC − 5844BC (95.4%)
IAAA-81842	7,000 ± 40	41.86 ± 0.21	6,976 ± 40	5968BC − 5956BC (5.6%) 5904BC − 5803BC (62.6%)	5980BC − 5946BC (12.0%) 5924BC − 5751BC (83.4%)
IAAA-81843	7,120 ± 40	41.23 ± 0.20	7,076 ± 39	6007BC − 5972BC (30.5%) 5953BC − 5913BC (37.7%)	6028BC − 5881BC (95.4%)
IAAA-81844	6,130 ± 40	46.65 ± 0.21	6,135 ± 38	5207BC − 5163BC (22.3%) 5135BC − 5131BC (1.4%) 5119BC − 5107BC (4.8%) 5079BC − 5001BC (39.6%)	5213BC − 4982BC (95.4%)
IAAA-81845	6,200 ± 40	46.24 ± 0.20	6,180 ± 35	5210BC − 5202BC (4.5%) 5177BC − 5069BC (63.7%)	5223BC − 5011BC (95.4%)
IAAA-81846	6,130 ± 40	46.63 ± 0.21	6,145 ± 37	5207BC − 5160BC (24.9%) 5153BC − 5148BC (2.0%) 5137BC − 5129BC (3.6%) 5120BC − 5094BC (11.3%) 5080BC − 5028BC (26.4%)	5213BC − 4997BC (95.4%)
IAAA-81847	6,190 ± 40	46.29 ± 0.21	6,131 ± 37	5206BC − 5164BC (21.4%) 5119BC − 5107BC (4.2%) 5079BC − 4999BC (42.6%)	5212BC − 4981BC (94.7%) 4969BC − 4964BC (0.7%)
IAAA-81848	7,060 ± 40	41.50 ± 0.21	7,065 ± 40	5999BC − 5968BC (24.3%) 5956BC − 5905BC (43.9%)	6020BC − 5875BC (93.8%) 5860BC − 5847BC (1.6%)
IAAA-81849	7,240 ± 40	40.60 ± 0.19	7,195 ± 37	6076BC − 6016BC (68.2%)	6205BC − 6190BC (2.3%) 6184BC − 6169BC (2.0%) 6162BC − 6141BC (3.3%) 6111BC − 5995BC (87.8%)
IAAA-81850	7,200 ± 40	40.83 ± 0.2	7,188 ± 39	6072BC − 6014BC (68.2%)	6205BC − 6191BC (1.7%) 6184BC − 6170BC (1.5%) 6161BC − 6141BC (2.6%) 6110BC − 5988BC (89.5%)
IAAA-81851	7,120 ± 40	41.21 ± 0.19	7,053 ± 38	5988BC − 5966BC (18.8%) 5958BC − 5902BC (49.4%)	6011BC − 5873BC (92.5%) 5862BC − 5846BC (2.9%)
IAAA-81852	6,270 ± 40	45.81 ± 0.21	6,156 ± 39	5207BC − 5144BC (31.6%) 5139BC − 5091BC (21.3%) 5081BC − 5051BC (15.4%)	5215BC − 4999BC (95.4%)
IAAA-81853	6,250 ± 40	45.94 ± 0.23	6,104 ± 41	5198BC − 5179BC (8.1%) 5064BC − 4951BC (60.1%)	5209BC − 4933BC (95.4%)
IAAA-81854	6,290 ± 40	45.72 ± 0.2	6,234 ± 37	5300BC − 5207BC (54.5%) 5160BC − 5154BC (2.1%) 5146BC − 5138BC (3.3%) 5128BC − 5120BC (3.0%) 5094BC − 5080BC (5.3%)	5306BC − 5200BC (58.8%) 5178BC − 5066BC (36.6%)

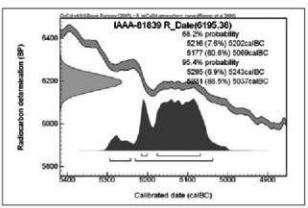
［参考値］



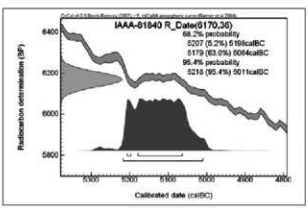
FB.AMSG.001　2号竪穴住居跡　ℓ2a



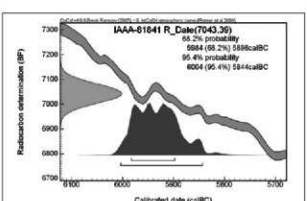
FB.AMSG.002　5号竪穴住居跡　ℓ1



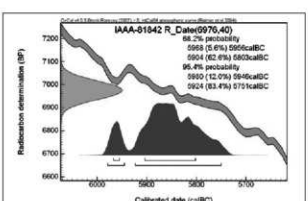
FB.AMSG.003　5号竪穴住居跡　ℓ1



FB.AMSG.004　5号竪穴住居跡　ℓ1

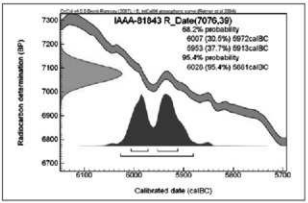


FB.AMSG.005　1号性格不明遺構　ℓ1

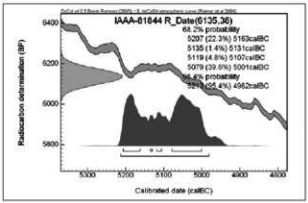


FB.AMSG.006　1号性格不明遺構　ℓ1

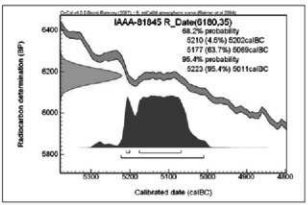
図1　暦年較正年代グラフ（1）



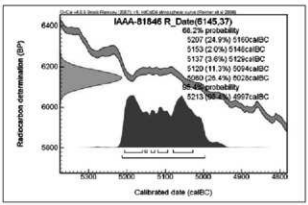
FB.AMSG.007　1号性格不明遺構P1　ℓ1



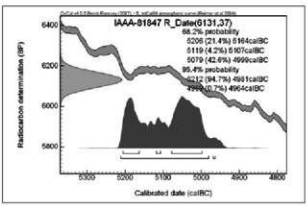
FB.AMSG.008　3号土坑　ℓ1



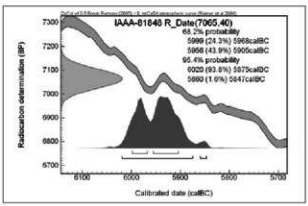
FB.AMSG.009　1号遺物包含層J5LⅢ



FB.AMSG.010　1号遺物包含層J5LⅢ

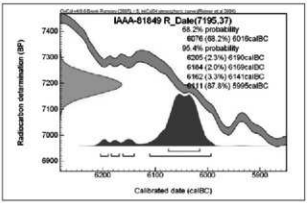


FB.AMSG.011　1号遺物包含層J5LⅢ

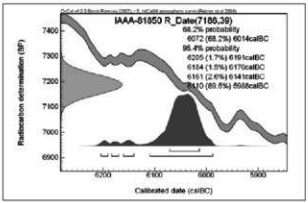


FB.AMSG.012　1号遺物包含層J6LⅣ

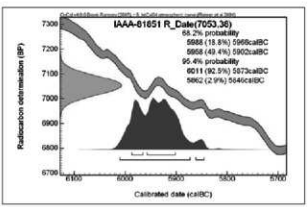
図2　暦年較正年代グラフ（2）



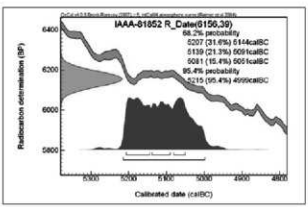
FB.AMSG.013　1号遺物包含層J６LⅣ



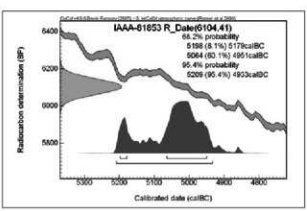
FB.AMSG.014　1号遺物包含層J６LⅣ



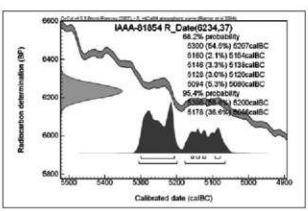
FB.AMSG.015　1号遺物包含層J７LⅣ



FB.AMSG.016　2号遺物包含層I８LⅡb



FB.AMSG.017　2号遺物包含層I８LⅡb



FB.AMSG.018　2号遺物包含層I８LⅡb

図３　暦年較正年代グラフ（３）

写　真　図　版

1　調査区全景（南から）

2　調査前現況（南東から）

3　調査区北部検出状況（北西から）

4　調査区北部完掘状況（南東から）

5　調査区南部検出状況（南西から）

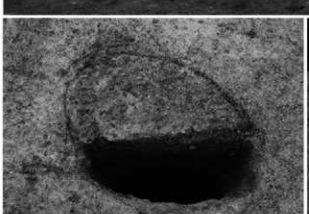
6　調査区南部完掘状況（南西から）

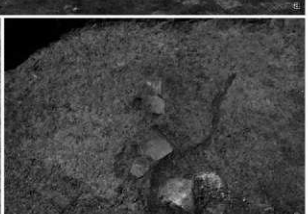
7　1号遺物包含層土層

a　南北断面（南東から）　b　東西断面（北東から）

8　2号遺物包含層土層（南東から）

9　1・4号竪穴住居跡（南から）





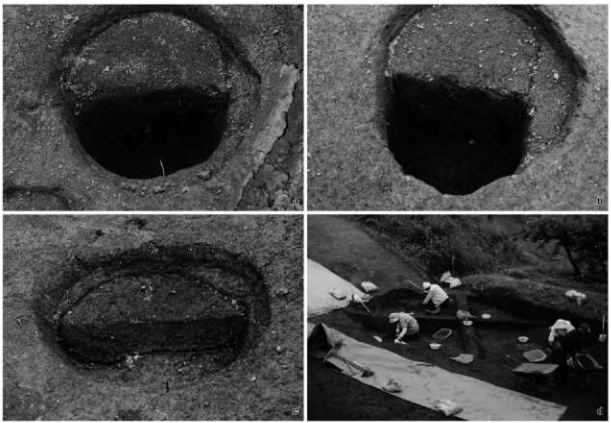
10　1・4号竪穴住居跡細部

a　土層断面（南から）
b　1号住P1断面（東から）
c　1号住遺物出土状況（南から）

11　２号竪穴住居跡（南西から）

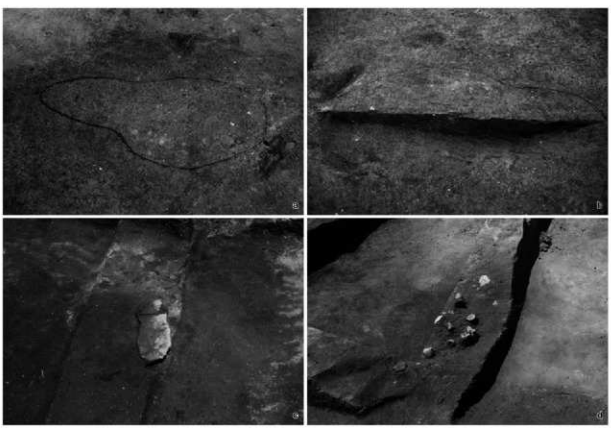
12　２号竪穴住居跡土層断面

a　南北断面（西から）　b　東西断面（南から）



13　２号竪穴住居跡細部（１）

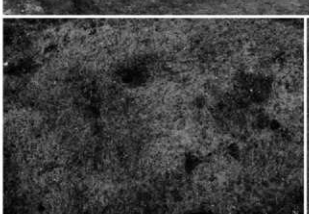
a　Ｐ１断面（南から）　b　Ｐ３断面（東から）
c　Ｐ４断面（東から）　d　作業風景



14　２号竪穴住居跡細部（２）

a　炉跡（西から）　b　炉跡断ち割り（東から）
c　遺物出土状況（南から）　d　遺物出土状況（南から）

15　3号竪穴住居跡（南西から）



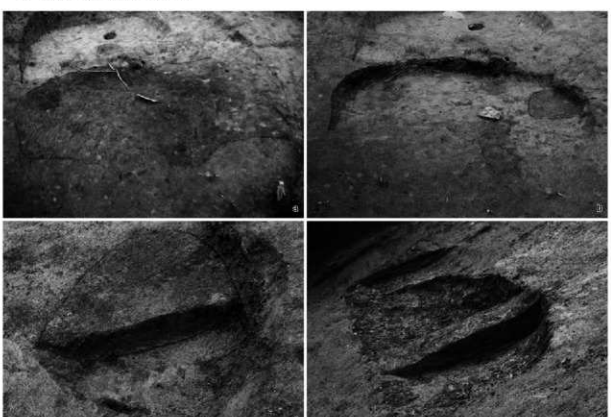
16　3号竪穴住居跡細部

a　土層断面（西から）
b　炉跡（南から）
c　炉跡掘り割り（南東から）

17　5号竪穴住居跡（南から）

18　5号竪穴住居跡土層断面（西から）

19　6号竪穴住居跡（南から）



20　5・6号竪穴住居跡細部

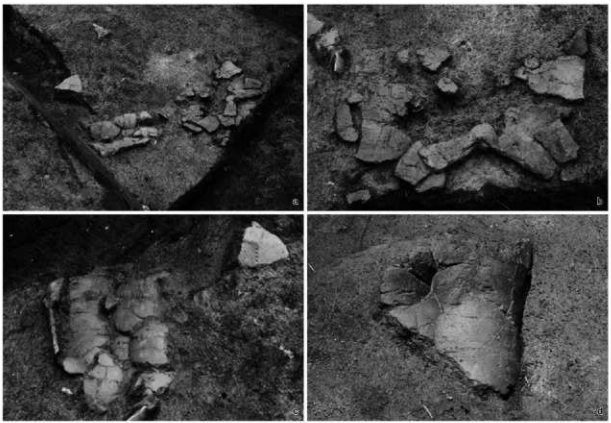
a　5号住検出（南から）　b　5号住床面（南から）
c　5号住P1断面（南から）　d　6号住土層断面（南東から）

21　1号性格不明遺構（南東から）

22　1号性格不明遺構検出（南東から）

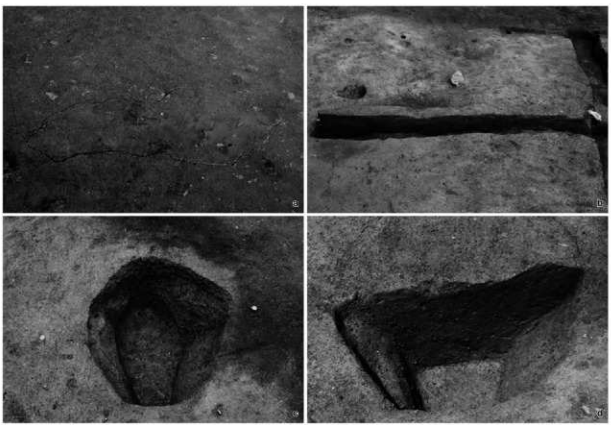
23　1号性格不明遺構土層断面

a　東西断面（北から）　b　南北断面（東から）
c　南北断ち割り（東から）



24　1号性格不明遺構遺物出土状況

a　19－4・19－2（南西から）　b　19－4（南から）
c　19－2（南東から）　d　19－1（西から）



25　1号性格不明遺構細部

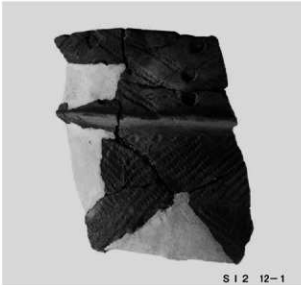
a　1号焼土遺構（南から）　b　1号焼土遺構断ち割り（南から）
c　P1（東から）　d　P1断面（東から）

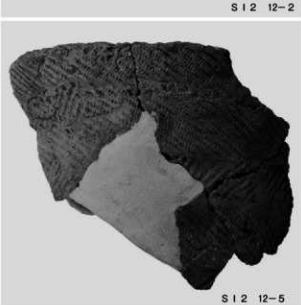
26　1～3号土坑

a　1号土坑（東から）　b　2号土坑（南から）
c　3号土坑（南から）　d　3号土坑検出（南から）

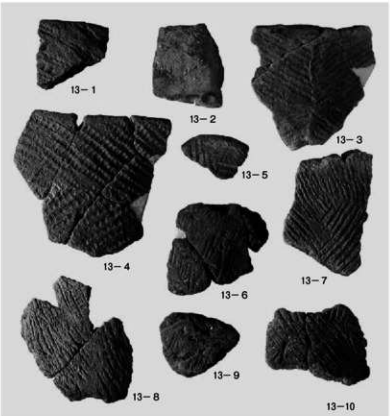
27　3～5号土坑

a　3号土坑下部礫（西から）　b　4号土坑（東から）
c　4号土坑土層断面（西から）　d　5号土坑（南から）

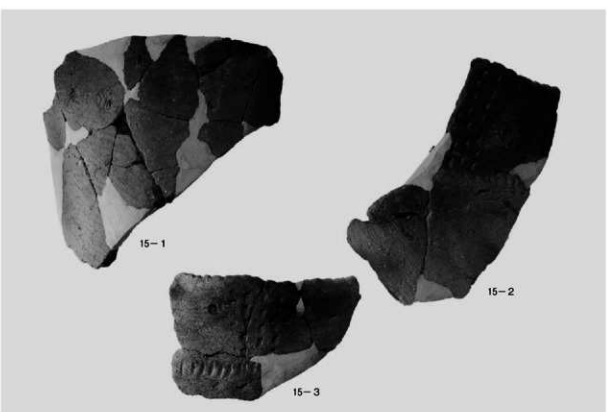




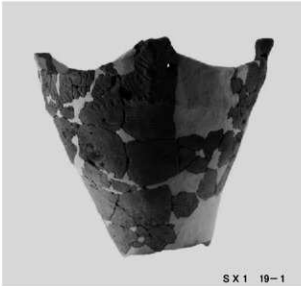
28　遺構内出土土器（1）ＳＩ１・２

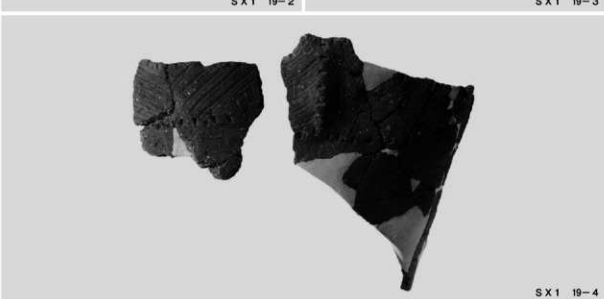


29　遺構内出土土器（2）ＳＩ２

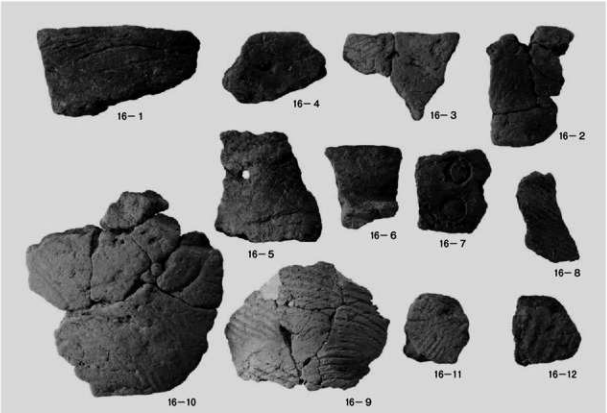


30　遺構内出土土器（3）ＳＩ５

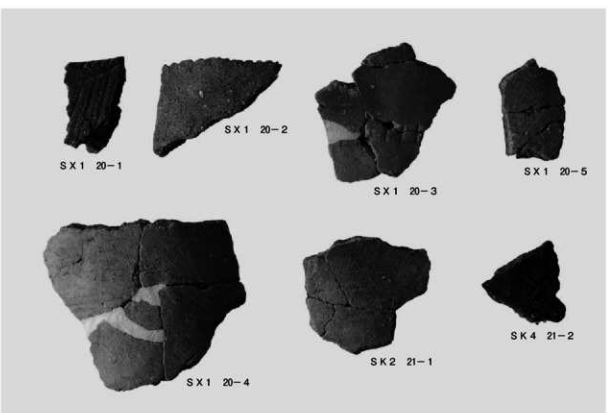




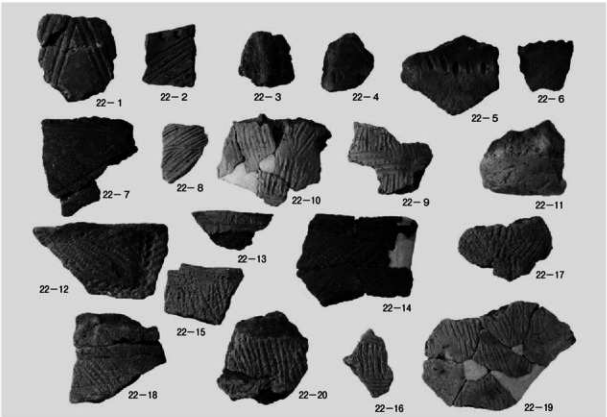
31　遺構内出土土器（4）ＳＩ３，ＳＸ１



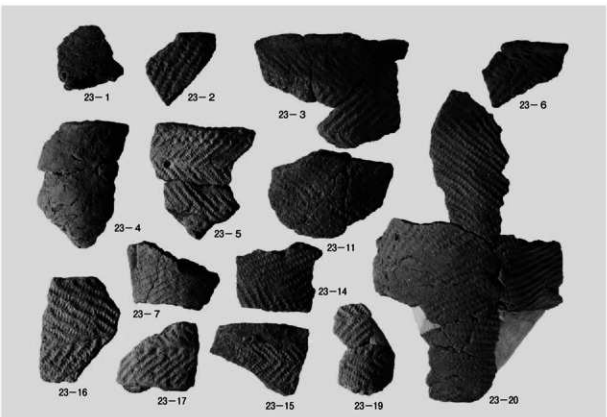
32　遺構内出土土器（5）ＳＩ６



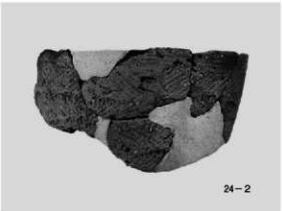
33　遺構内出土土器（6）ＳＸ１，ＳＫ２・４

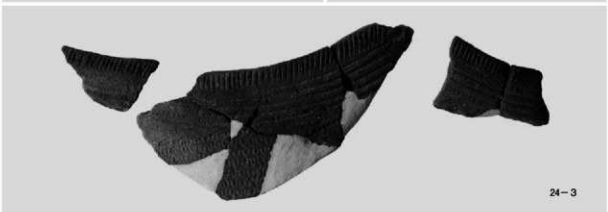


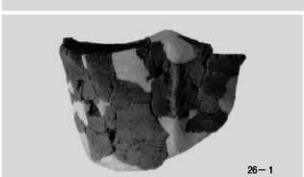
34　1号遺物包含層出土土器（1）LⅢ



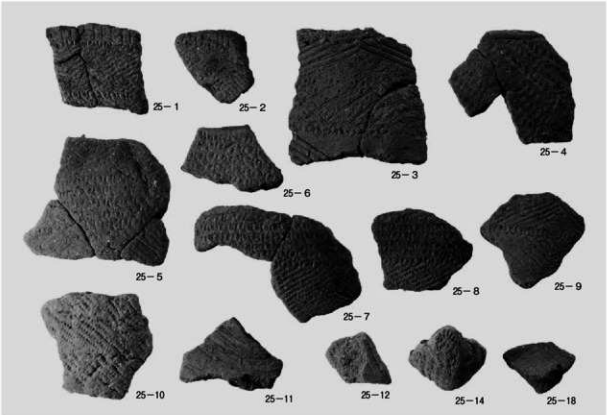
35　1号遺物包含層出土土器（2）LⅢ



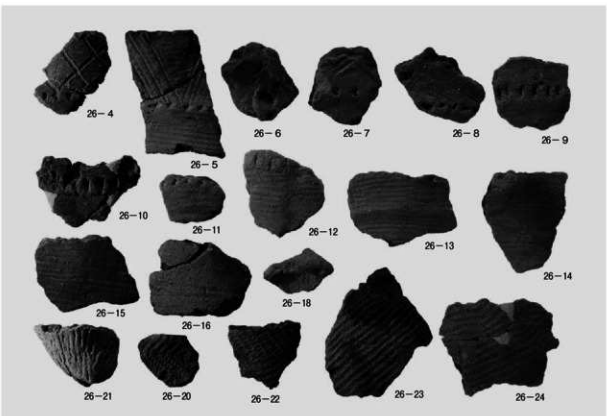




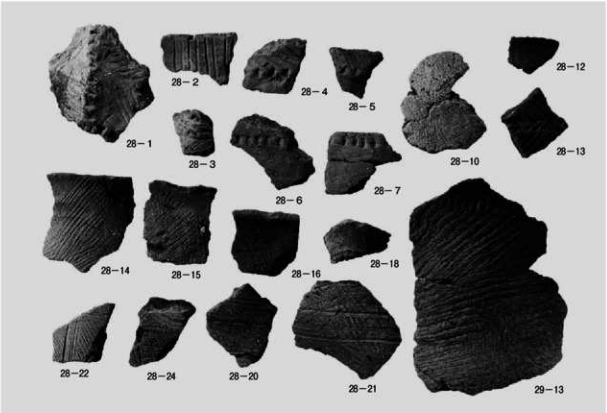
36　1号遺物包含層出土土器（3）LⅢ・Ⅳ



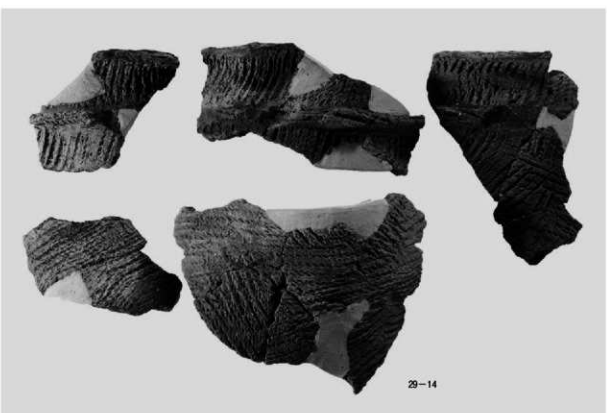
37　1号遺物包含層出土土器（4）LⅢ



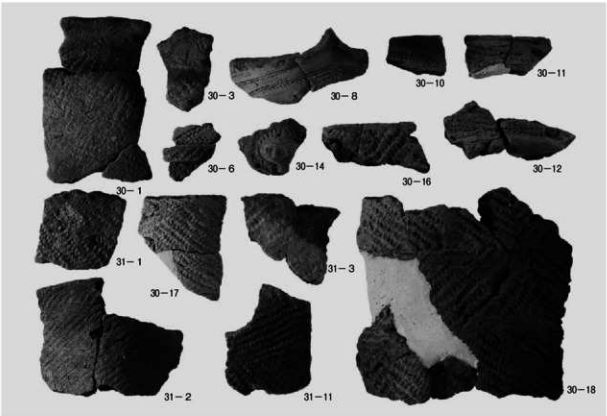
38　1号遺物包含層出土土器（5）LⅣ



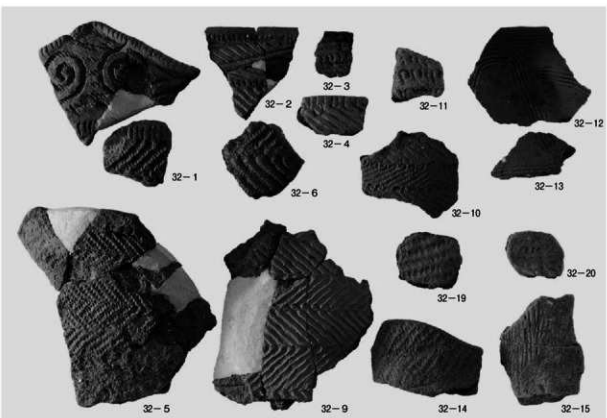
39　2号遺物包含層出土土器（1）



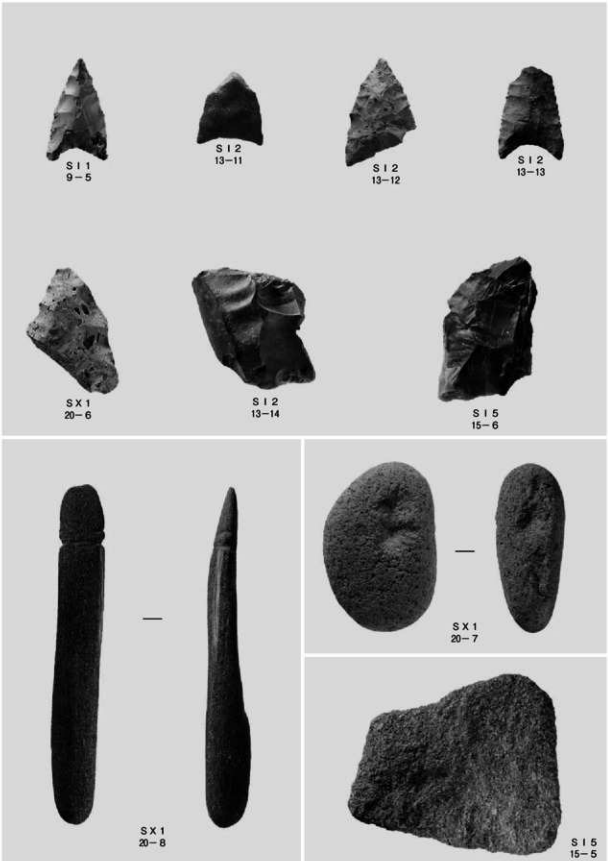
40　2号遺物包含層出土土器（2）



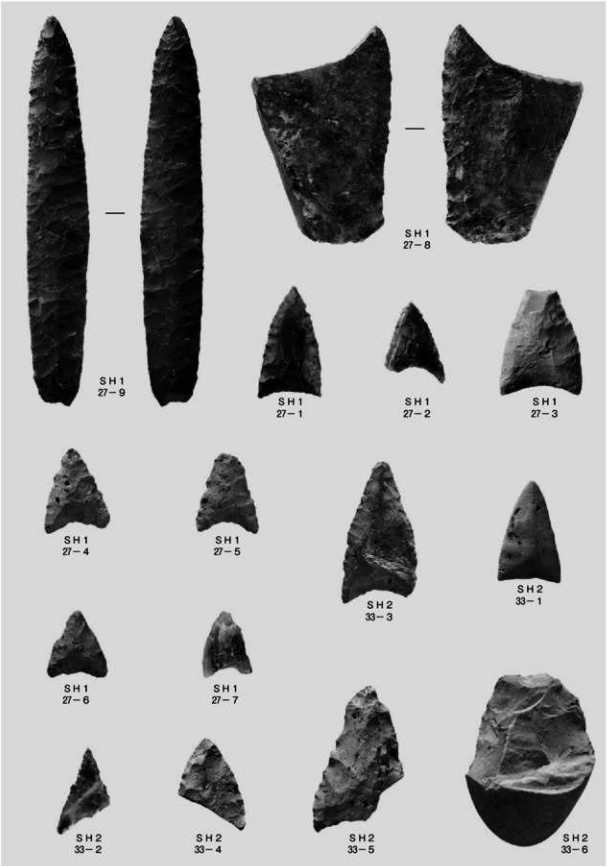
41　２号遺物包含層出土土器（３）



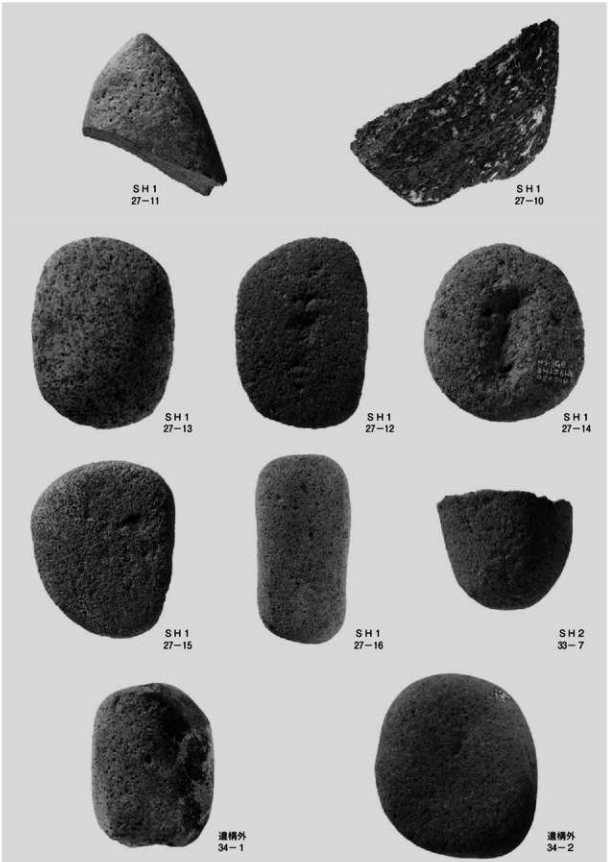
42　２号遺物包含層出土土器（４）


S I 1
9－5
S I 2
13－11
S I 2
13－12
S I 2
13－13
S X 1
20－6
S I 2
13－14
S I 5
15－6
S X 1
20－8
S X 1
20－7
S I 5
15－5

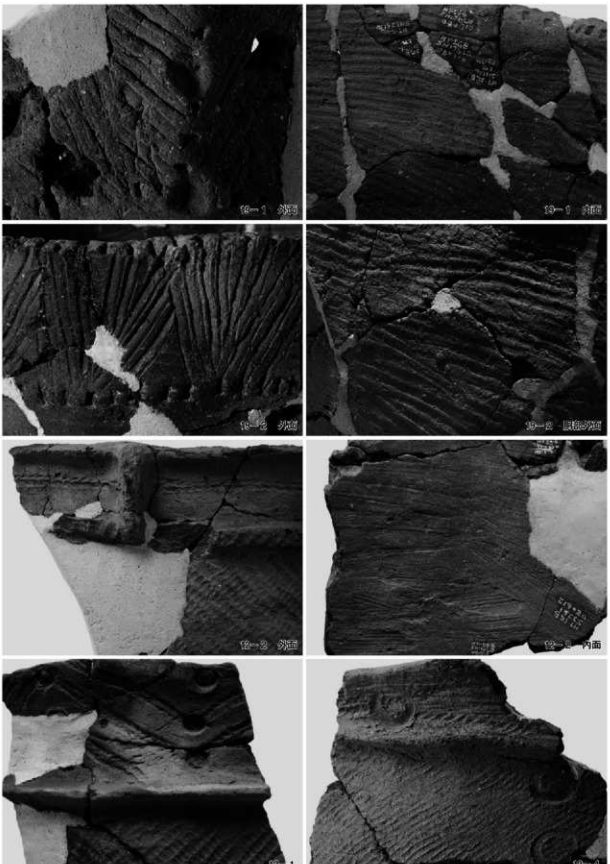
43　遺構内出土石器



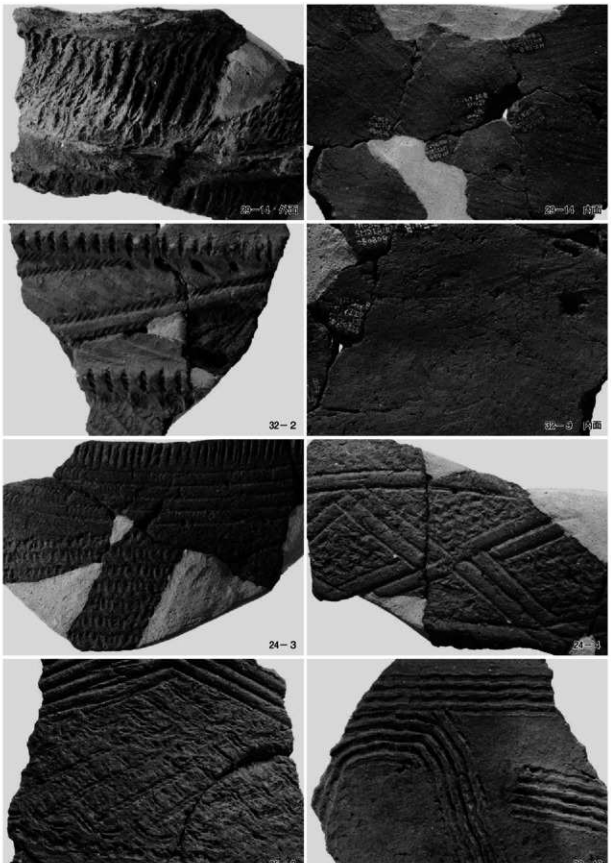
44　遺物包含層出土石器



45　遺物包含層・遺構外出土石器



46　土器細部（1）



47 土器細部（2）

報　告　書　抄　録

ふりがな	ふくしまくうこう・あぶくまみなみどうろいせきはっくつちょうさほうこく
書　　名	福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告20
シリーズ名	福島県文化財調査報告書
シリーズ番号	第464集
編著者名	山元　出
編集機関	財団法人福島県文化振興事業団　遺跡調査部　遺跡調査課 〒960－8115　福島県福島市山下町１－25　TEL 024－534－2733
発行機関	福島県教育委員会 〒960－8688　福島県福島市杉妻町２－16　TEL 024－521－1111
発行年月日	2009年11月27日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
空釜（そらがま）B	福島県石川郡平田村大字下蓬田字空釜（ふくしまけんいしかわぐんひらたむらおおあざしもよもぎたあざそらがま）	5035	00149	37° 13′ 03″	140° 34′ 33″	20080410 ～ 20080905	1,600㎡	道路（あぶくま高原道路）建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
空釜（そらがま）B	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡　６軒 性格不明遺構　１基 土　　坑　５基 遺物包含層　２ヶ所	縄文土器 石　　器 銭　　貨	縄文時代早期後葉～前期初頭の集落跡とこれに伴う遺物包含層の調査

要　　約

空釜Ｂ遺跡は阿武隈高地南部に位置する縄文時代の遺跡である。丘陵裾部の南東向き斜面に立地し，遺跡西部の山際部分を調査した。早期後葉から前期初頭の集落跡を検出し，これに伴う２ヶ所の遺物包含層を確認している。早期後葉の竪穴住居跡は調査区北部の谷に面する南斜面に立地し，これを給源とする構築廃土および遺物によって１号遺物包含層の最下層にあたる１号性格不明遺構および包含層下層が形成される。早期末葉から前期最初頭の竪穴住居跡は北部・南部の谷に各１軒が構築され，これ以降の遺物によって１号遺物包含層上層および２号遺物包含層が形成されていた。遺跡の利用は断続的であるため集落が営まれた早期後葉・前期初頭期の土器については，良好なセットと考えられる。

福島県文化財調査報告書第464集

福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告20

空釜（そらがま）B遺跡（いせき）

平成21年11月27日発行

編　集	財団法人福島県文化振興事業団　遺跡調査部		
発　行	福島県教育委員会	〒960－8688	福島市杉妻町２－16
	財団法人福島県文化振興事業団	〒960－8116	福島市春日町５－54
	福島県土木部	〒960－8670	福島市杉妻町２－16
印　刷	陽光社印刷株式会社	〒960－0112	福島市南矢野目字萩ノ目裏１－１